

NO. 35  
AUTUMN  
1971

# 英語展望

ELEC BULLETIN

## 国際展望

宮田 齊・浅野 輔・金山宣夫・鳥居次好  
「私の英語歴」高橋源次

座談会 "NEW APPROACH TO ENGLISH"  
高橋・黒田・清水・太田・山家

「日英語の比較—時制と相について—」

「Mother Goose の世界(その 8 )」

ことばの背景「I told you so 考」

「日英語の比較—関係節について—」

書評『成層文法による意味論』

# 英語展望

ELEC BULLETIN

NO. 35  
AUTUMN  
1971

Edited by Fumio Nakajima

The English Language Education Council, Inc., Tokyo



## 【国際展望】

役に立てる英語.....	宮田 齊	2
「日本を世界に理解せしむる」ということについて.....	浅野 輔	4
国際適応学の必要.....	金山宣夫	6
「東南アジア旅行記」後日談.....	鳥居次好	8
私の英語歴.....	高橋源次	10
【座談会】 NEW APPROACH TO ENGLISH.....		14
高橋源次, 黒田 巍, 清水 譲, 太田 朗, 山家 保		
感想 : NEW APPROACH TO ENGLISH を使用して .....	西 一郎・西口恭教, 森 博, 武藤陽一, 横溝邑市	19
日英語の比較.....	太田 朗	27
Mother Goose の世界 (その 8) .....	平野敬一	41
【ことばの背景】 I told you so 考.....	國弘正雄	47
日英語の比較.....	上田明子	52
【新刊書評】『成層文法による意味論』 .....	三宅 鴻	60
『図説日本の洋学』 .....	大村喜吉	69
新刊紹介.....		71
展望通信.....		72

## 役に立てる英語

MIYATA, HITOSHI

宮田 齊

もう9年ほど前のこと私は Napoli の大通り Corso Umberto の雑踏の中を歩いていた。晩秋とはいえアイスクリームの屋台が賑うほどの暖かさだった。三色旗を掲げた Napoli 大学の前を過ぎて少し行ったところにちょっとした広場があって、そこで大変な騒ぎがおこっているのにでくわした。「騒ぎ」というのはちょっと当らないかも知れない、と言うのは怒声はもとより近頃私たちがイヤという程聞かされている「ワッショイ…」式の喚声も鳴りひびいていない。プラカードも旗もない。それなのに、どう見てもこれは一種のデモと思えた。

時刻は午後2時頃だったろうか、南の都にふさわしい明るい午後だった。左右前後にたくさんの人達が見物しているのだから、誰でもいいからつかまえて情報を得られるはずなのに哀しいかな私のイタリア語はあまりにお粗末なので敢て口を開く勇気がおこらなかった。騒音のないデモの渦は広場で揉み合いをつづけている。ふとみると私の傍に中学生らしい子供達が一かたまりいる。それぞれ腕にかかえた教科書やノートのなかに 'Let's Speak English' という title が見えた。ものはためしと、この子たちに向って 'Do you speak English?' とたずねて見ると、男の子の一人が 'Yes, I do.' と昂然として答えた。その落付いた、余裕のある態度に私はすっかり錯覚をおこしてしまって口早に 'Then please tell me what are these people demonstrating for or against?' と一緒にしゃべってしまった。しゃべってしまってきて、相手がキョトンとした顔付きでこちらを見ているのに気付くと、「こりゃすこしむずかしかったかな」とさとて、こんどはゆっくりと 'This is a demonstration, isn't it?' とゆっくり聞いて見た。Demonstration のイタリア語は demostrazione でほとんど同型だから、これなら国際語彙として通ずるだろうと考えたわけである。ところが、中学生は予期した反応を示してはくれなかった。そこで振出しに戻ってまた 'Do you speak English?' とハッキリ、ゆっくり発音してみると、またしも 'Yes, I do.' と答えて、抱えていた教科書を指さし、'This is a book.' と言い、ペンを出して 'This is

a pen.' と言う。'You speak English very well.' とほめると——事実この中学生の発音はイタリア人としては上の部だった。——彼の demonstration (駄洒落ではない) は 'Is this a book? Yes, it is...'. と持合せがなくなるまで2, 3分続いた。広場の渦はますます速度を増している。こんな次第で、肩を張って 'I speak English.' と返事した中学生からは結局私の求めていた情報は得られなかったが、その代りに面白い事に気がついた。というのはこの子供は手持の英語を充分役に立てたのだ、という現実の認識である。彼が 'Yes, I speak English.' と答えたのは正真正銘の真実で、この基本的姿勢で貫けば、あとは量の問題だけである。この子は今頃、縦横に英語を駆使して社会人 (あるいはむしろ国際人) としての活動に取りかかっていることだろう。わずか3日2晩の Napoli 滞在から貴重な教訓を得た私はその後2週間のイタリア旅行をありったけのイタリア語を駆使 (?) して、快く楽しくすごすことができた。言うまでもなく、私の手持ちのイタリア語はおよそ実用とは縁遠い文学的なものだった。路面電車の車掌さんに \*La musica italiana molto piacere nel Giappone と前おきして 'La donna è mobile col pium' al vento muta d' accento è di pensiero' とリゴレットの有名な「風の中の羽根のように…」を、しかも、暗記したところまで一気にしゃべり、ついで椿姫の断片だのダンテの地獄の入口の文句だのを並べたてた。専門家なら敢てしないところだろうが、Napoli の中学生に学んだ通り、おめずおくせすイタリア人にわかるイタリア語で全く脈絡のないツカヌことを並べたてたわけである。その crazy talk の効果はすばらしく、中年をすぎた車掌さんは私の傍につききりで、四半分もわかっていない私に自分の家族の話やら、イタリアでは英語が大流行である、という話をしてくれた。文字通り私たちの心は暖く交流した。しかも、私の全く非実用的なイタリア語のカケラの寄せ集めを媒体として、前号で私の畏敬する先輩中内教授は「役に立つ英語」程度のインチキな sentence. それ故左肩に \*をつけた。

語」について縷々卓見を述べられたが、私は「役に立つ英語」或は「役に立つ外国語」は「役に立てる」ことを通じて追々身について行くものだ、という平凡で、しかも経験的に正しいと思われる学習法を唱えたいのである。役に立つ外国語というセットになった商品のようなものが幾種類か有り合わせる、というようなことはない。

そもそも「役に立つ」というのは相関的な事柄であって、Shakespeare 全篇を詠(きん)じていても商業文は書けまいし、その逆も真であろう。自然科学者の間では言語以外の記号体系を用いるから、最少限度の「語学力」で充分「役に立つ」であろう。こう考えて来ると、英語でもその他どの外国語でも、「役に立て」ればやがて必ず「役に立つ」ようになろう。Shakespeare の作品に造詣が深くても直ちに商業文は書けまいが、Shakespeare を跳躍台にして商業文に到達することは不可能ではない。もし私が 2 週間でなく半年イタリアに滞在することができたとしたら、「風の中の羽根のように…」から始まった私のイタリア語も相当「役に立つ」ものになっていたであろう。極端なことを言えば、キッカケは何でもいいのであって、市場にハンランしているテープ付き講座の順序通り ‘Good morning. How are you?’ から——昔流に言えば ABC から始まると決まったわけではない。場合によっては tape の棒暗記のほうがマイナスになる事もある。How are you? と覚え込んでいたところ先方が、これとちがった表現を使ってくるともう react できにくいという事も大いにあろう。そういう市販の tape や record は「生気に乏しい」場合が少なくない。それは script を読みあげるからで、真正な speaker ではなく、むしろ reader としての声が流れてくる場合が多い。これは David Abercrombie が ‘Conversation and Spoken Prose’ という小論で美事に分析した通りである。

私はこの程、あるクラスで Amy Lowell の名詩 *Lilacs* を講じたが、この感動にあふれた詩句を詠んじてもそれがそのまま「役に立つ」と言う人はおそらくあるまいが、イタリアでの私の経験から言えば、「役に立てる」ことは充分できると思う。そもそも、世の中には shock treatment という療法があって、これを裏付ける精緻な理論が未完成である場合でも、経験的には効果をあげるケースがあると聞く、私は英語コムブレックスのハンランしている今日の日本の英語教師や学習者のために一種の shock treatment として Vachel Lindsay の異色の作品 *The Congo* を処方してみたいと思う。この詩は大部分の米詩選乃至は詞華集に載っているから text を手に入れることは必ずしも困難ではない。俳優の吹き

込んだ tape があればなおよい。

Or Mumbo-Jumbo God of the Congo  
And all of the other  
Gods of the Congo,  
Mumbo-Jumbo will hoodoo you,  
Mumbo-Jumbo will hoodoo you,  
Mumbo-Jumbo will hoodoo you.

現代的なリズムでこの奇異な音の奏でる味わいを詩の冒頭に出て来るよう有り合わせの棒きれや古傘の柄で何かを叩きながら毎日唱えてみるとよい。劣等感性英語コムブレックスには有効な shock treatment になろう。毎日唱えればイヤでも覚えててしまう——私の *La donna è mobile...* と同じことである。そして、英米人の間に入ったらイキナリ唱えて見るとよい。お経のような mumbo-jumbo を聞いて破顔一笑握手を求めて来る士があれば以て友とするに足る教養人だと考えてよい。要はこちらから mumbo-jumbo を敢て唱えるか否かにある。Mumbo-jumbo を「役に立てるか立てないか」にある。詩も数ある中から何故ことさら *The Congo* を選ぶか？と問われたら私は答えよう。

Then I had religion, Then I had a vision...  
の詩句の故である、と。Lindsay は黒人たちの子供じみた馬鹿騒ぎの光景を見、その一大騒音を聞いて遙かアフリカの jungle の中で mumbo jumbo を伏しおがむ未開の人々の「こころ」を悟る。老来やむを得ぬことかも知れないが、近頃私はしきりと宗教のことを考える。未だかつて Christian であったこともなく、また今後その信仰に帰依する可能性もすくない私だが、かつて某先達が勧めたといわれる Bible の味読が英語を communication の medium とする人間たちを識る最良の方策だと信じている。その Bible は 17 世紀の King James Bible 即ち Authorised Version が最もよい。The Song of Solomon, Ecclesiastes 等の詩篇、マタイ伝第五章の Sermon on the Mount のイエスの訓え、これらを朗々と誦しているうちにやがて諸君の英語は「役に立つ」ようになる。

大道無門、千差有路。高峰の登り路は 1 本とは限らない。私の知る有能な polyglots はそれぞれの独特な仕方で斯の道の達人となった。従って万人に共通な method や approach はないと言って憚らないが、ただひとつ共通な点は、この人たちはすべてそれぞれの道で英語を役に立てた人たちであり、「役に立てる英語」はやがて「役に立つ英語」として定着するものである、ともう一度上述の私見を繰返して筆をおく。

(71/7/21)

(早稲田大学教授)

## 「日本を世界に理解せしめる」 ということについて

ASANO, TASUKU

浅野輔

"In our attempt to have a clear picture of Japan-US relations from now on, we need first of all to examine as objectively as we can how our two countries accept each other in their basic recognition at the present time."

"American claims and opinions have some which Japan must humbly listen to, so we, Japanese, will have to reflect what we should, thereby helping Japan-US relations improved and become closer."

上記は、去る6月日本の財界が企画してアメリカの有力紙ワシントン・ポスト紙に掲載した "JAPANESE BUSINESS OFF TO NEW ERA OF RESPONSIBLE PARTNERSHIP" という見出しの2ページ見開き広告からの引用である。この広告特集は、アメリカにおける対日不信感をとり除く努力のあらわれであるとして日本の新聞にも報道されたので、読者の中には御記憶の方もあろうと思うが、これは、時を同じくしてワシントンで開催された日米財界人会議を機会に、織維交渉以来険悪化の一途をたどる日米経済関係を正常化の軌道に戻すことをねらいとして、植村甲午郎経団連会長、永野重雄新日鉄社長、岩佐凱実富士銀行頭取ら日本財界トップメンバー8名による紙上パネル・ディスカッションと銘打って企画されたものである。

言うまでもなく、日米関係はとくに経済問題を中心として、ここ数年来緊迫化の度を加えているが、そのような時に日本の財界がかなりの資金を用いて対日誤解をとくためにこのような広告キャンペーンを行なったことは、大きな意義のあることであると言うべきなのかも知れない。

さて、日本が自己の立場を対外的に説明し理解を求めようとすれば、多くの場合その伝達手段として英語を用いなければならないというのが現状であるから、この種の広告も新渡戸稲造博士の言う「英語を駆使して日本を世界に理解せしめる」ことを意図した活動の1つであると見ることができるであろう。だが、この場合果たしてその意図が十分に生かされ日本に対する理解がそれだけ

増大したかというと、残念ながら私は極めて懷疑的にならざるをえないのである。

言うまでもなく、英語を駆使すること自体は、必ずしもそのまま日本を世界に理解させることに結びつくものではないし、むしろ対日誤解を増大させるだけという皮肉な結果に終わることもある。敢えて問題を日本の英語教育界に関連させて私見を述べれば、英語駆使能力という点ではいろいろと御腐心の様子がうかがわれるのであるが、その能力を「日本を世界に理解せしめる」こといかに結びつけるかという、極めて重大な問題が等閑に付されているのではないかと思われるのである。(私自身は、英語教育について全くの門外漢であるから、この点を誤解しているのかもしれない。しかし、もしさうであるとすれば、これほど喜ばしいことはないのである)

今回の広告特集は、国際化、国際化とお経のように唱えられている今日の日本において、われわれが国際的、対外的の場面において自己の立場や主張を表明し、日本に対する眞の理解を求めようとする場合、おちいりやすい陥穰を象徴的に示しているように思われるのである。私自身は、パブリック・リレーションズや経済、あるいは英語の専門家ではないが、日米関係に关心を抱き、その将来を深く憂慮している1人として素人なりの考えを述べてみたいと考えた次第である。

この広告は、実際に紙面に掲載されてみると、そもそもその当事者である日本の財界人の間で非常な不評を買ったと聞いている。「出来が悪かった」というのがその理由のようである。それはそうであろう。私も、実際にワシントン・ポスト紙を手にしたとき、何と魅力のない紙面かと慨嘆したものである。広告の形式は、「日米経済関係における摩擦と緊張の原因は何か」「円切り上げについてどう考えるか」等4つの設問に対する財界人8名の解答というアンケート方式で、8人の小さな顔写真を別とすれば、あとは似たり寄ったりの議論が、2ページにわたってぎっしりと組みこまれている。P Rの専門家でない私にも、ここにはレイアウト上の問題があるばかり

りでなく、もしこの企画がワシントン・ポスト紙の編集記事という形で掲載されればよほど効果も違っていたであろう、というような考えはすぐ頭に浮んでくるのであった。しかも、上記引用した英文に示されるように、訳文も稚拙きわまりないものであって、趣旨不明、もしくは日本人が読んではじめて理解可能な訳文が、この広告には散見できるのである。

しかし、「出来が良い」とか「悪い」というのは技術的問題であって、この広告キャンペーンが示唆する問題は、技術的問題を超えた、日本人の対外姿勢そのものにみられるビヘイビアにかかわるもののように思えてならないのである。

たとえば、財界の人びとの言う「技術的」問題1つとっても、日本には優れたPRエイジェントもあるし、日本人の手による翻訳を書き直す優秀な外人ライターもいる筈である。すなわち、技術的困難は克服不可能なことではないのである。実際、テレビにせよ、カメラにせよ、日本製品のアメリカにおける広告がいかに気のきいたスマートなものであるかは、アメリカの雑誌を手にとれば1目瞭然である。しかし、「対日誤解をとく」という極めて重大な問題は、日ゼニに直接結びつかない活動であるが故に、何か手を抜いた感じがしないでもない。そこには、今日見られる日米関係の緊迫した状況をたかが一片の広告で解消しようとする極めて安易な姿勢がうかがわれてならない。「出来が悪い」のは、広告業者や翻訳家のためではなく、問題をあまりにも安易に考えた当事者の姿勢にあったと言うべきであり、実は、技術的とされる問題も、技術以前のより根元的なところにその原因をもっているのである。

「出来が悪かった」「効果がなかった」ということで事が治まれば、これは簡単であるが、この種の広告にはマイナスの効果というものがある。すなわち、対日理解を増進させようとする意図が、逆に対日誤解を増長させるという結果に終わるのであって、そうであるならば、最初から何もしない方がよほどマシであるという事態が往々にして発生する。たとえば、今回の場合、この当否は別として、アメリカには今日「株式会社日本」論という、日本の財界・政界一体ぐるみの態勢に対する鋭い批判があるが、この広告特集はそのような議論をまさに裏づけする効果しかなかったと思われても止むをえないのである。

たとえば、この広告は、Panel Discussion by Eight Top Japanese Industrialistsと銘打っているが、その内容は前述のように、アンケート方式による回答の寄せ集めに過ぎず、しかもその内容たるや似たり寄ったりの冗

舌という感が深い。Discussionという形式も実体も伴っていないのである。互いに多種多様な議論をかみ合せながら相互の理解と合意とを築き上げて行くという「討論」の本質がここには全く一顧だにされていない。しかも、勝手に言いたいことを述べながら、その結果8名の財界人ががっかりするほどまでに、その論旨において類似していることは、どういうものであろうか。

このような広告、またそれを支えた企画が、日本の運命を左右すると言われるまでに強力な財界の人びとの間で、単に「技術的失策」として片づけられている限り、日米関係は好転の兆しを見ないのであろう。この広告に見られる最も顕著な欠陥は、われわれ日本人がアメリカであれイギリス人であれ、外国人に対し自己の立場と主張を表明する場合の安易さである。われわれは対外的な発言をする場合、日本国内にのみ通用する論理（実際は論理の欠如というべきかも知れない）、情緒（「これだけ一生懸命なのだから、わかってくれてもいいではないか」）、表現（「反省すべきは反省する」と言いながらそれが具体的行動に結びつかない）にあまりにも「甘え」ているのではないだろうか。国際場裡においては、以心伝心とか腹芸という、さまざまな日本的伝達手段は役に立たないのであり、たとえこれらの手段に日本の優雅を感じるとしても、われわれはもっと無味乾燥な、それだけにおのれの心を裸のままにさらけだす表現でしか勝負できないことを知るべきである。

1～2年前ニューヨーク・タイムズの著名な政治記者が私に語ったところによれば、同紙のカヴァレッジにおける日本関係のニュースはだいたい20位ぐらいを低迷しているということである。おそらく、ニューヨーク・タイムズに多少ともなじみのある人ならば、同記者の意見に異論をさしはさむことはできないであろう。同記者の見解によれば、「大国日本」がこのような扱いを受ける理由は、日本の政治家の発言がニュースにならないということなのである。そう言わせてみれば、わが国宰相の施政方針演説や記者会見の中に、国際的ニュースとしてとり上げるべきどのような卓見や主張があるであろうか。

今日最も必要とされているのは、「英語を駆使する」能力と「日本を世界に理解させる」能力の同時的な開発である。前者については、私は何も言う資格もないが、後者については、言いたいことが山ほどあってこのスペースでは意をつくすことはできない。ただ、今回のワシントン・ポスト紙上の広告について結論めいたことを述べれば、

(p. 13 へつづく)

## 国際適応学の必要

KANAYAMA, NOBUO

金山宣夫

## 1. 変化の意味を問う

最近「適応学」ないしは「国際適応学」ということは聞くことがある。これは英語では、Adaptologyといい、外国でもジュネーブの ILO やハワイの異文化間訓練センターあたりで使われることがあるようだ。適応学と Adaptology ということばは、どちらが先にできたというわけではなく、また、どちらとも辞書にはないはずである。

「国際適応学」がおそらく最初に紹介されたのは、「週刊文春」の1969年6月9日号の「たしかに日本人はエコノミック・アニマル」という記事においてであり、Adaptology の方は Oriental Economist の1970年3月号の Introducing Adaptology という記事でお目見得した。

その一応まとまった解説書は、『国際適応学入門』(サイマル出版会、1971年7月刊)と銘打って世に問われている。実は、その著者は私であり、また適応学 (Adaptology) という新語を作ったのも私である。したがって、ここで求められているのは、適応学について「一身上の弁明」をすることかと思う。

現代に見られる諸々の変化は、その度合と速度が大きいがために、茫然と見過されることがある。本来は自然に対する人間の能動的な働きかけであった技術の体系は、高度の発達を遂げ人間の手にあるものになるおそれがでてきた。近代化・工業化は「適応の動物」であるといわれる人間の適応能力を越える域にまで及んできている。公害や人間疎外の問題に、それが歴然と表われていることは、いうまでもなかろう。

国境を越えた活動についても、物的な通信・交通手段の高度な発達にひきかえ、「国際化のソフトウェア」ともいべき心構えや方法論については、旧態依然としており、意識されることすらあまりない。繊維輸出問題や円切上げ問題に見られるように、とどのつまりは日米双方とも感情論に走ることになってしまう。

しかし、それでは変化の意味を十分に読みとる態度とはいえない。変化とは何かというと、たとえば領土の価

値についてである。かつて領土は至上の価値を持った「国家的利益」の内容であった。ところが領土は必ずしも「資産」ではなく「負債」にもなりうることが、第二次大戦から現在に至る急激な歴史の変化の中ではっきりしてきた。大戦に勝ちながら、広大な海外領土の経営に耐えかねて大国の地位をすり落ちていった英仏と、大戦に敗れて大幅に領土を削られながら「奇跡」といわれるほどの経済的発展を遂げた日独との差を考えれば、容易に納得のいくことであろう。その説明として次のような議論をすることもできよう。

日本の4つの島の海岸線は、17,000kmで、アラスカを除くとアメリカの海岸線よりも長い。またソ連の海岸線は40,000kmもあるが、実際には10,000kmくらいしか利用できない。有効海岸線距離において、日本は米ソをしのいでいるだけでなく、日本は海岸から1kmくらいのベルト地帯に、いわゆる「臨海工業地帯」を擁しているが、外国にはそれが未発達である。

欧米の鉄鋼業は、ピッツバーグやザールを見ればわかるとおり、内陸型であり、また港湾は、生産施設を伴わない通過型港湾が多い。その一方日本では、生産と流通が有機的に一体化しており、加工産業や組立産業には最適のシステムとなっている。領土内に存在する原料の量によって国富が測られた時代には、たしかに領土が広い方がよかったわけであるが、現代のようにそれを加工したり組立てたりすることでより大きな価値が生み出されるようになると、海岸線は長いほどよく、国境線は、紛争の種になるので、短いほどよいということになる。

このような変化は、産業論的な説明だけですませるのではなく、さらにもう少し広い視野で見られるべきである。ハーバード大学のニコラス・レシャー教授は、費用対効果分析に立って、国家的価値の持つ意味が次第に薄れしていくことを指摘している。それというのも、社会的・技術的变化によって種々の価値を実現するための費用が変わり、国家的価値の実現には、ますます多額の費用を要するようになってきたと見るのである。

辺境の寸土を争うために「総力戦」を行なうこととは、

明らかにバカげている。あえて領土を拡大したとしても、それは天然資源の経済的供給を約束するものではない。日本経済の発展は、臨海工業地帯について見たところ、国土と資源が不足していたにもかかわらずというよりも、まさにそれだからこそ達成されたといってよい。広大な領土を維持するための軍事力を必要とせず、国内資源を優先するために非経済的な保護政策をとる必要もなかったからである。

## 2. 「貿易立国」の次にくるもの

しかし、これで満足していたのでは早合点になる。日本はたしかに効果的な生産活動を行なってきたが、その反面の事実は、強引ともいえる海外資源の獲得と加工製品の輸出であった。「輸出外交」はあっても「輸入外交」のない日本人の経済中心主義は、「経済動物」とか「黄色いニダヤ人」という好ましくないイメージで見られるようになってきた。

目下日本の貿易量が世界に占める割合は7%足らずであるが、1970年代の終わりまでにはそれが10%を越え、またGDPでも同じく10%を上まわると予測されている。日本経済は、世界経済全体に対しても他の国民経游に対しても、軽視することのできない厳然とした地位を占めることになるわけである。

こうなってくると、海外資源を手に入るかぎり入れるという従来のやり方や、とれるだけの注文は全部とって世界市場をひとりじめせんばかりの勢いを示しているわが造船業などの将来は、手放しで喜んでいていいものだろうか。日本はいつまでも「貿易立国」だけを唱えているわけにはいかないし、資源の再循環を前提としない「カウボーイ経済」を脱しなければならない。そうでないと、他国を混乱させ圧迫することになる。

このような情勢に対応するためには、政治的・社会的・文化的な諸活動が考えられなければならない。そして、それに取り組もうとするのが実は適応学なのである。

## 3. 文化と未来の衝撃への対応

適応学ということばは、現在見られる重要な変化への対応を問題意識するための試みに仮に与えたもので、「学」としての正統化を要求するための旗印ではない。対象とする問題は複雑で多岐にわたっており、さらに社会の諸局面において「モザイク化」が進行するであろう。「モザイク社会」は私たちが今までに経験しなかったもので、これからの人間とその社会は、この新しい変化に対応すべき哲学と方法論を編み出していかなければならぬ。その努力の総体を、私はあえて十把ひとからげにして適応学と呼ぶわけである。

身近かな例としては、特異といわれる日本人の国際感覚を考えてもよい。「海外旅行ブーム」といわれるものの、海外の日本人は「メガネとカメラ」だけによってではなく、その心理や態度によっても、それと識別できるといわれるくらい、緊張しているようだ。もとよりどの国民でも、外国では多かれ少なかれ緊張するには変わりないが、特に「日本株式会社社員」として世界でその存在が目立ってきている日本人が「国際化時代」に入るにあたって、興味のある問題である。その背景として、前述のとおり、海岸線はあっても国境線のない日本には、私が「国境感覚なき家族主義」と呼ぶ特異な精神構造や、国際関係を劣等感と優越感のバランスに立って規定するやり方を指摘してもよからう。

最近、「21世紀は日本の世紀」説の元祖として周知のハーマン・カーン氏をニューヨーク郊外のハドソン研究所に訪れて意見の交換を試みたとき、私は彼が日本人の国際的適応性をどう見ているかを中心に話をした。

彼は、増加一方の日本人旅行者の数字などをあげて、日本人が外国ぎらいとは思えないし、アメリカ白人がいっしょに仕事をしようとしているインディアンを、日本人なら使いこなすだろうと、積極的な見方を示した。私はそれに対して、日本人もアメリカ人も、あまりうまくはやれないのではないか、両者とも国際適応性は低いのではないかという意見を述べ、それにつけて加えて、日本人はそのことを知っているが、アメリカ人はそれに気づいていないと指摘した。

「同一の状況下にあっても、日本人というのは、ひどく人見知りする民族である。自分が先に語りかけることに、抵抗感を覚え、閉塞した心を開こうとせず、磊落になれないという気質を備えているようである」と東レの森本忠夫氏がいうとおり、日本人は外国で過敏になりかたくなっている。

文化ショックもアルビン・トフラー氏いうところの未来ショックも、現代生活では避けることができない。この意味から適応学の内容を単純化していいうならば、文化と未来の衝撃に対する適応の研究といってよいし、また次の目的を示すことによって説明に代えてもよい。

- (1) 高度に発達した技術の国際交流に対して、人間の国際交流を充実させる。
- (2) 平和な世界を建設するための実効的な手法・政策・戦略の裏づけを行なう。
- (3) 近代化と開発促進のための国際協力の方式・類型を示す。
- (4) 技術社会における個人の地位・役割を国際視野で評価し、人間の権利・価値を明確にして未来の人間像を描く。

(p. 13 へつづく)

## 「東南アジア旅行記」後日談

TORII, TSUGIYOSHI

鳥居次好

出てきたスーツケース 昨年12月26日東京発、シンガポール3泊、クアラ・ルンプール2泊、おおみそか東京帰着という、あわただしい東南アジア旅行をしたことは本誌 No.33 に書いた。本稿はその後日談である。

No.33 には書かなかったが、おおみそかの晩に羽田に着いたとき、私がクアラ・ルンプールでシンガポール・マレーシア航空に預けた二つの荷物のうちの一つが紛失した。出かける時には20年も前に買ったボストンバッグ一つだけだったのが、5日の旅行をしている間に昔の教え子たちからもらったおみやげがだんだんふえ、しまいにクアラ・ルンプール日本人小学校長の池上登氏が見かねて「これに入れてお帰りになつたら」と言ってスーツケースをくれた。なくなったのは、そのスーツケースである。1月29日になって MS 航空羽田 airport manager の Lee 氏から電話があって「ロンドンのコンピューターであなたのスーツケースをさがしたが出てこない。この上は弁償するよりほかに方法がないので、金額にしていくらに相当するか言ってほしい」ということであった。「贈物と文献だけだから金額に見つることはできない。ただ一つ Sim Kee Boon からもらった贈物はまだあけて見てないので何だかわからない。できたら彼に問い合わせて、それと同じ物をもとめて届けてもらいたい」と返事したところ「Sim は MS 航空の director をしているから電話ですぐ問い合わせる」ということであった。それから1週間とたたない2月4日、再び Lee 氏から電話があり「あなたのスーツケースがシンガポールで発見された。早速お届けする」ということだったので、待っていると6日になって、1か月以上も行方不明だったスーツケースが Lee 氏の贈物とともに届けられた。早速あけて見ると Sim の贈物は直径40センチほどの錫の盆で、その中央に次のような言葉が刻み込まれていた

TO

TORII SENSEI

WITH HAPPY MEMORY AND  
GRATEFUL THANKS TO A  
DEDICATED TEACHER

FROM  
SIM KEE BOON  
PERMANENT SECRETARY  
GOVERNMENT OF THE REPUBLIC OF  
SINGAPORE  
DECEMBER 1970

かくして私の東南アジア旅行は大団圓を告げたわけである。

文部大臣の反応 『英語展望』No.33 には、シンガポールにおける私の教え子 Phua Kia Tong の手紙の全文を掲げ、その後に「この雑誌の読者の中には、外務省に勤めておられる方もあるかもしれない。あるいは、外務省に知人があり、その人にこの手紙のことを知らせよう、という方があるかもしれない」と書いた。しかし、それだけでは心もとないので、この雑誌各一部ずつに若干の資料をそえて、当時の外務大臣愛知揆一氏と、5月31日にシンガポールで開かれる東南アジア文相会議に出席することになっていた文部大臣坂田道太氏に送ってみた。外務大臣の方は今日にいたるまで何の反応も示さない。外交というものはそのように慎重でなければならぬものかもしれない。

坂田文部大臣の方は非常にていねいであって、渡瀬憲明秘書官の礼状とともに、大臣の著書『大学・混迷から再建へ』(1969、新月社) と『ヨーロッパの大学改革——坂田文部大臣訪欧記録』(1971、文部省) を贈ってくれた。私は2冊の本を早速読んでみたが、特に前者には「東西文化交流」という一章があって、そこに東西文化交流地点としての日本の役割に関する著者の考え方、Phua Kia Tong がいだいているような構想を実現する場合に日本人として必要な心構えとがこまごまと説かれており、この本を贈ってくれた意図がよくわかった。

『英語展望』No.33 で紹介した私の教え子 Chong Ah Wah は、この3月末シンガポールで行なわれた日本語教員資格試験にトップで合格したが、年令が40才を越えているために日本留学の機会が与えられない。戦中・戦後を通じ一貫して日本と日本語を愛してきたこの中国人の日

本留学を実現するためには、日本政府からの直接の指名しかないということを、シンガポールから来ている留学生達から聞いたので、渡瀬秘書官になんとか便宜をお与えいただけぬかと尋ねたところ、しばらくして大学学術局植木浩留学生課長から、いろいろ調べたが今のところ適當な方法が見当たらない、という丁重な返事がきた。日本政府の責任ある人びとが、このような考慮を払ってくれたということだけでも、日本とシンガポールの親善に益するところが多いと考え、私はそのむね早速 Chong に知らせた。

**Only America can be revolutionary** ニクソンが突如として北京を訪れると言い出してから、日本は再びアジアの孤児になるのではないか？という懸念が広く日本人の間に抱かれるようになった。

私はフィラデルフィアに Nathaniel R. Bowditch という友人をもっているが、彼は「共産主義社会は conservative になってしまったために新しい情勢に適応する柔軟性がない。それに対して真に revolutionary になりうるのはアメリカだけである」というフランス人 Jean-Francçis Revel の考えに共鳴している。その Nat からきのうもらった手紙には、米中接近の動機が次のように解釈されている。“Personally, my biggest fear is a war between the Russians and the Chinese. By having the Americans, and I hope your country, improve their relations with the Chinese I think it will make the Russians think twice before they start a preventive war with the Chinese.” これを見ると日本も仲間に入れてもらえそうであるが、こういうあいも変わらぬ力の論理で真の平和がもたらされようとは、とうてい思われない。

**Phua Kia Tong が見た日本** 前掲のシンガポールの技術家 Phua Kia Tong は去る 5 月 20 日から 3 か月の予定で日本の水道技術を学ぶべく目下来日中であるが、Nat の手紙と同じ日に彼からは次のような日本印象記が送られてきた。

3, 8, 1971

Dear T. Torii 先生,

So far I have been in Japan about 2 1/2 months. My impressions of the country is as follows.

With the exception of a few misguided hippies scattered in the big cities, generally the Japanese could be considered well disciplined. Unlike others, they are determined to conquer nature as evidenced in many engineering projects such as highway construction. When they come across mountains, no detour is attempted but tunnels are made. To span

the low lying areas, bridges are built. All these features unmistakably demonstrate the admirable mental, physical and technological ability of the people to conquer nature, which is necessary for a leading nation.

Observations have shown that the average Japanese employees are more obedient to the superior officers or employers. This refined attitude is perhaps due to the traditional loyalty of the juniors to their superiors, or the loyalty to the organisations in which they work with the hope that by working hard, there will be prosperity, more profit and hence more bonus at the end of the year. This tradition and the materialistic outlook serve as stimulants in the process of nation building.

The industry of Japan has grown and matured to an extent that goods and machinery of all descriptions are produced. Very few are imported products, the entry of which is discouraged by imposing high tariff. Moreover, the Japanese have established a love of and feel proud to use their products. And in many cases, in their drive for economic expansion and domination, the merchants are actively and aggressively marketing their finished goods to other parts of the world which have been the long established market of the West. This keen, neck to neck competition is providing the developing countries an opportunity to enjoy the fruits of modern technology in Japan.

Japanese are proud of their own language. This can be witnessed among the Japanese who, unlike other nationals, always speak Japanese. This national tendency might prevent the growth of study of other foreign languages. In most cases, the Japanese are quite prepared to help foreigners in finding their ways and to answer queries with their simple knowledge of foreign languages. They would be able to do better if they are capable of speaking foreign languages well. In many countries, e. g. in Singapore, the language barrier has been a serious handicap to the Japanese residents, who have found it difficult to communicate with the local people. As a result they often isolate themselves in their own tiny community.

During visits to many bookshops in various parts of Japan, I was surprised to note that most books published in English about the present day Japan, have been written by non-Japanese. The foreign authors of these books naturally portray Japan from their own angles to suit their convenience. Thus very often consciously or unconsciously, distorted pictures are given with far-reaching damage. For the present, the conclusion is that the Japanese scholars are contended to leave such vital matters in the

(p. 13 へつづく)

# 私 の 英 語 歴

TAKAHASHI, GENJI  
高 橋 源 次

私は英語を覚えはじめてから60年になりますが、英語歴という以上は学校から社会に出て、そしてやってきた仕事を眺めてみるとことになるのですが、ちょうど私の10才のときから話すことになりました。

私の10才のとき、アメリカに行っていた父が脳溢血で死んだという通知があったのです。その手紙には英文の書類が入っていたが何であるかはだれにもわからない。母の幼な友達で、当時和歌山市の県立和歌山中学校の英語の主任であった有本常太郎先生というのがいたのですが、「みんな読めんのならば常たんに読みでもらおう」と母がいうので先生に来てもらいました。先生は庭先に立ったままでその英文の死亡証明書をすらすらと読んで、そのお医者さんの名前をいってから、「脳溢血です」と即座に言われ、村中がわからなかったものが先生に見せるとすぐにわかったのです。10才の私は「有本先生という人はえらい人だ。あの横文字をさっと読んで答えてくれた。これはえらい人だ」という印象を与えられたのです。そのとき私は有本先生みたいな人になりたいと子供心に思いました。これが私が今まで英語とともに暮らしてきている motivation あります。

第2に申したいのは、やはり小学校時代兄から “Get up, Genji” というのを生活の中で教わったことです。父の死の数年後アメリカから帰ってきた兄が朝私を起すのに「ゲラップゲンジ」と言うんです。寝ている者に言うんだし起きればそれでよかったが、はっきりした意味を理解していたわけではない。しかし起きよということらしいということは呑みこめていた。はっきりとしたのはそれから数年後中学生になってからでした。私は県立粉河中学校に行ったのですが、そこで私が受けた英語教育について2つ申したいことがあるんです。1つは、当時の先生が非常によかったということです。鈴木、内田、花房という諸先生方の指導は、英語を生きていることばとして教えていただいた。第2は、県立中学校でありましたけれども、イギリス人とアメリカ人の先生がいたのです。1人は Satchel という英国人、もう1人は Henry という米国人でした。週に1回の会話でしたけれども、実際の英語を教えてもらったのです。その中学校で、

get up は命令形、ぼくが起きるなら、I get up, 起きたなら I got up というふうに、get up の意味がはっきりしてきたのですが、そもそもその英語の意味は実生活の中で体得していました。

そういうようなことで私が英語というものを初めて知ったのは get up であります。脳溢血の stroke も同様で実際の situation の中で英語に接したのです。英文の証明書をすらすら読んだ有本先生のえらさというもの、実際の英語力のすばらしさ。それから自分の生活実践の中で get up を身につけたこと。これは私には非常に大きなことだったのです。理屈じゃないんですね、ちょっとも。

大学は同志社でしたが、何故同志社にはいったか、それがまた私の英語生活に結びついているんです。さっきの有本先生が同志社出身であったのです。同志社は近くもあり英語で知れた学校ではありました。私の入学動機は、一にかかって有本先生の学んだ学校というのにあったのです。一も二もなく私は同志社を志願し、幸いに英語会話の入試にもパスして入学できたのです。そして好きな英語をしゃにむに勉強したといつていいと思いますが、同志社の予科及び本科の学生時代に私に大きな英語の自信をつけてくれたものは、まず第1は Lombard 教授の Shakespeare であったと思います。当時博物館から出していた先生の text がありました。左の頁は本文、右の頁は先生の criticism と note、講義のときはほとんど説明をしない。セリフをみんなに受け持たせて読ませ、訂正し、しまいに先生がモデルの recitation をしてくれる。そうして1年のうちに3冊もやりました。Hamlet をやり、Macbeth をやり、King Lear をやるというふうに。Criticism や note の質問はしますけれども、授業の中心になっているのは、各 scene、各 situation にふさわしい、各性格になりきったセリフの読み方でした。Shakespeare の英語を生きた英語としてとらえさせることでした。創立記念日の前の晩に Doshisha Eve といって記念の英語劇をやる例になっていましたが私は予科時代に Julius Caesar の Brutus をやりました。配役は Lombard 先生がきめてくれるんでしたが、上級生があんな予科生に Brutus のような大役を持たすのはえこひ

いきだといって、先生のところにねじこんだのです。そしたら、彼の声とからだとか全てが Brutus に合っているからやらすんだとさとされたということでした。なつかしい思い出です。

Shakespeare だけでなく、近代劇殊に Galsworthy の *The Pigeon*, *The First and the Last*, J. M. Synge の *The Shadow of the Glen* などというような芝居をやりました。上級になってからは指導にもあたりました。英語劇は芸術的な演劇の立場よりも英語の実際修練という点で非常に大きな力となりました。従来沙翁劇ばかりであったのを近代劇を加えたのが私のときからであったのです。

同志社時代について第2に言いたいことは Union Church です。京都教会には日曜の午後は英語礼拝があるんです。英米人の礼拝で全部英語なんです。それにわれわれのような日本人も参加するので、説教のアウトラインができていました。日曜日の朝私は日本語の礼拝、昼からは Union Church というふうで、日曜日は忙しかったです。実際の場面において洗練された英語の勉強ができたことはありがたいことでした。おまけに、Lombard 先生がその Union Church のせわをしておられたので、アウトラインの贋写を私に託することもありして、この English service は、私にとって生きた英語を身につける絶好の場でしたよ。

同志社での第3のことは恩師石田憲次博士の指導です。先生の研究法が一生私の勉強の仕方となり、文学そのものへの肉薄以外にはない、そしてその文学がどんな意味を自己の人生にもつかを究明することが大切である。他人の説は第2だと教えてくれたのでした。それが私の今日ももっている文学研究の態度であります。

同志社を出て、中学校の先生になったわけですが、東京震災の年、大正12年、1923年でした。宮崎県立都城中学校の先生になったわけです。5月に文部省から教員免状が着きましたが、それは旧制高等学校の教員免状でした。校長の松原先生が早速宮崎県庁へ行ったのですが「高等学校の免状で中学校の先生はできませんよ」といわれたといって帰ってこられたのです。「中学校の免状のくるのを待たねばなりませんね」と残念そうでした。しかし先生が鼻高々として、うちの中学校には若い先生で高等学校の免状をもっているのがあるんだといって、方々で自慢なさったらしいのです。その年の9月、震災のあとになって、中学校、師範学校、高等女学校教員の免状が下付されました。

翌年の1月ごろだったか、同時に、恩師の2人の先生から手紙がきたのです。石田憲次先生からは西南学院の



英文科に吉岡義睦先生からは彦根高商に転ずるようにといってこられたのです。母と相談の結果、近いところがいいというので彦根高商…実際は西南学院というのはクリスチャン・スクールですね、だいぶ心が動いたのです。けれども結局母のいいなりで彦根高商に転じたのです。そんなことで松原校長先生には私は非常にやっかいになったのですが、私がやめるということを言いましたら、非常なご立腹でした。「ぼくは延岡中学でも、宮崎中学でも、高鍋中学でも、君のことを自慢してきた。うちには高等学校の先生の免状をもっている高橋がいるんだ」と。それをどうしてくれる!」と先生が言われるんです。「先生、ほめて下さいといっぺんも言ったことはない。ほめたのは先生の自分勝手じゃないですか。」今から考えると失礼なことを言ったものと思う。当時私は24才だったわけです。

松原先生にそういわせたもう1つの理由があるんですよ。先生になって間もなくのことでしたが県の視学が視察に来られたことがある。予告なしでした。校長さんが視学を案内して他の県役人を引き具してぞろぞろ数人私の教室に入ってきたが、1年生の授業で、ちょうど、私が教壇から降りて、いすを下に降ろし、「I sit down.」というのを教えていました。I sit down. はすわる動作だけの意味で、すわってしまうと I am sitting down. とはいわない、I am sitting. 同じように I stand up. というのは、立つという動作をいう。立っているというんだったら I am standing. で、I am standing up. とはいわないなど、いわば Oral Method で situation を重視しながら教えていたところでした、得意になって。私には極めて普通のこの教え方が県視学をびっくりさせたんです

ね。これはすばらしい教授法だと思われたらしい。Oral Method は勿論 Oral Approach の普及している今日からすると隔世の感ですね。授業が終わってから、校長室で県視学からべたほめにほめられましたよ。「あんなに県視学もほめてくれたのに君はどうして去るんだ。」と松原先生がおっしゃったのも無理はない、今当時を追憶して先生にすまぬことをしたと思うことです。

それから、やはり 5 月か 6 月頃でしたか、生徒をつれて桜島に 1 泊旅行をしましたが雨降りで登山を中途で思いきりました。仕方なくなく帰って来ましたが、そのちょうど 1 週間のうちに学芸会がありました。5 年生の肥田木（彼は翌年東大の法科に入学した）というのに英語演説をさせることにしていたが、私は先生も大いに模範を示すべきだと考えて、その学芸会に飛び入りで英語演説をすることにした。“Such is Life” という題で 5 分か 10 分話したと思いますが、われわれはこの間桜島に来た。けれどもあてにしない暴風雨でついに頂上をきわめられなかった。人生というのはこんなものだ。われわれは常に best を望み、peak をきわめようと思っているけれど果たせないこと屢々だ。Second best で満足せねばならぬことがある、失敗をする、思うようにならない。それが人生というものでないか。その教訓をわれわれはあの旅行によって得なければならんという意味の話をしたのです。そしたらあくる日の三州新聞という地方新聞が、都城中学校が創立以来 50 年になる。未だかってあの講堂で英語演説をしたものはない。生徒もない、先生が率先して模範を示し、生徒にもやらせたと、1 号活字で麗々しくその日の記事を載せた。そんなものかなと私は思ったのですが、「都中のためにそういうように君はやってくれた。それもぼくの自慢の一つであった。せめて今君の教えた 1 年が卒業のときまでとどまってくれれば進学率は一ぺんに上がると確信している」と松原先生が私をひきとめてくれたのでした。転任の許しの出るまで仲々でしたが、それは略するとして、とにかく都中を去って私は彦根高商の先生になったわけであります。

それで彦根高商、今の滋賀大学の経済学部に 22 年いましたが、明治学院に来て、専門学校及び大学を経て、教授、大学長、と明治学院に 20 年いました。それから現在の ELEC 英語研修所ということになりますが、小学校、中学校、大学、ELEC と英語を学び、教えること実に 60 年であります。彦根時代には学生英語大会の指導をしました。近代劇が主であります。Shaw の *Saint Joan* やれば *Blanco Posnet* もやった。R. Sheriff の *Journey's End* は私が留学中英國で観てきた通りに全篇をやらせたりして、学生とともに英語生活をたのしみました。明治

学院に来てからは学生の課外指導の時間もありませんでしたが、MESA の学内 English Debate に President's Cup を出して奨励しました。ELEC でもこの方面的活動を盛んにしたいものと思っています。

言語学とか文法とかいうものに対する興味はないのではないかけれども、私が英語をやっているゆえんのものは、あくまでも自分の社会と人生における実際面との結びつきがあるのです。そもそもは get up ということを実際の場面で習い、父の死亡証明書をすらすら読んだ有本先生に感動し、英語のできる人は偉い人だ、ああいうふうになりたい、と思ったことに発している私の英語教育なので、私の英語というものはことばそれ自体ではなくて、英語を tool として、手段あるいは道具として考え、その英語によって人生なり、社会なりに役立ちたいという極めて素朴な念願に発するんです。人生の中の英語、社会の中の英語、世界を結ぶ英語という考え方方が一貫して今日にきてるわけなんです。英文学の講義をするときも、作品と自分との関係、作者の思想がどのように自分の人生哲学に関連をもつか、それを読むことによってどれだけ自分は成長するか、変化するか、そういうことを研究の基本にしてきました。その点では文学の形式や構造よりも内容により多くひかれます。特に劇文学にふれたいんですが、ELEC の drama project などは大いに我が意を得たりというもので、そもそも、英語というものは drama だ、行動とともにあり、situation を離れては存在しないからであります。それに drama は人生や社会を全体としてとらえます。生きた社会の全貌をつかみます。文学のおもしろさというのもその辺にあるんです。

私の英語歴に一応の結論をつけたいと思います。第 1 にいいたいことは providence ということなのです。歴史というものを natural law で解釈する方法もあります。けれども、一方ではまた歴史が providence であるという歴史の見方もあります。私は 60 年の私の英語生涯を顧みて、やはりそこに目に見えない 1 筋の providence の糸が通っていたと思うのです。ということの発端は、父がアメリカで死ななかったら、そして英文の死亡証明書がこなかったら、私は英語の先生にならなかつたかもしれない。それから母が有本先生を友達に持っていたいなかったら、そして先生が同志社出身でなかつたら、私は同志社に行くことにならなかつたかもしれない。そういう仮定をして自分の英語を眺めると、providence のはたらきというものを考えざるをえないのです。

第 2 は、Emerson の “Man is a bundle of influences.” と思うのです。人間はまこと人さまの感化、影

響のたばであります。有本先生の influence, 中学校では内田先生らから、同志社では Lombard, 石田先生、明治学院では校祖ヘボン先生の見えざる influence. そう見えてくると自分自身というものは一体何か、それら先生方の感化が私という個人を通して現われていると観るべきで original な自分などというのはさらにはないのだ。先生方のおかげで今日まで英語とともに生きてくることができたのだというのが正直な私の思いであります。

第3は、私は英語を上述のようにして学んだということをありがたいことだと思っています。ですからたとえば同志社の卒業論文に “Galsworthy's Drama” というのを書いたのですが、結論のところに Galsworthy の小説など全作品の研究は卒業後に譲ると書いておいたのですが、社会へ出てから小説も読み、詩も、随筆も読んでひとつご恩を受けた先生方に見てもらわねばならぬというので『Galsworthy 研究』を英語で出したのであります。英語で書いてるので英米の研究者の間でも参考書に考えてくれば、こないだも米国のある大学の博士論文が本に出ているのを読んで、その中に私の本からの引用が随分沢山出ているのを知ったのです。日本人が英語英文学の研究を英語を用いて発表し世界の学界に貢献するという私の持論をいささかながら果たしているとひそかによろこんでいるのであります。そのことがいいかえるならば、英語を伝達の means, すなわち international communication の手段として教えることです。この国際伝道の手段を通して世界の各国が相互伝達をする。英語教育者にとってはこれに勝る使命感はないと考えます。「指導要領」の基本精神はそこにあるのです。言語行動、behavior としての英語の実際的 communication の効用をわが国英語教育の指導理念としています。その意味から私の受けた英語教育はまさにこの理念に合致するものであったことを感謝しています。そういう点で ELEC の仕事はさらに強化されねばなりません。国際伝道の手段としての英語、いわば国際語としての英語の教育にとって Oral Approach が最重要の基本線だからであります。

最後に第4として考えておきたいのは、今日のことばでいうと、英語の生態的訓練といいますか、 ecological approach であります。英語というのはただ単に文法とかことばとか発音とかというようなものではなくて、全体として、総合的な文化的生命体として、環境文化をも考えながら、生きた environment の中で教えられなければならないということであります。今日の時代に奉仕し得べき英語力はその立場からとらえられねばなりません。

ん。こう考えて、私の道は間違ってなかった、ありがたいことだ、こういうように考へておいであります。自分の英語歴をふりかえってみて、今も昔も変わりなくいえることは私の口癖になっている “I like being a teacher of English” ということに尽きましょうか。何の変哲もないしかし恵まれた英語の生涯でした。

(ELEC 専務理事・明治学院大学名誉教授)

---

(p. 5 よりつづく)

われわれ日本人が島国に育ち、人種的均質性という恩恵に浴しているだけに、自分を外国人のびとに理解させようとする場合に負うべき荷はそれだけ重いということであり、その荷の重さを忘れ経済大国という自負に誘われて方向違いの自己主張をする場合の危険がいかにも大きいということである。英語教育に携わる方々が、気違いに刃物を与えぬよう心から願う次第である。

(国際商科大学教授)

---

(p. 7 よりつづく)

このいざれも、非常に重要で広大な問題である。要はひとりひとりの市民が、主体性をもって環境の変化に対処しながら、障害物を取り除いていかなければならぬことがはっきりしているのであり、適応学もその必要に応じようとするささやかな努力の表われといえよう。

(日本総合研究所国際部長)

---

(p. 9 よりつづき)

hands of the foreign authors, whose information is sometimes extremely misleading.

With best wishes,

Yours sincerely

Phua Kia Tong

以上のはか彼は、日本では盗難の話を聞いたことがないがそれは日本に失業者が少ないと物語るものであること、しかし官庁の建物が大きいのに対して個人の住宅が貧弱なのは物価の割合に賃銀の低いことを示していること、日本人がはにかみがちであるのは彼らが伝統を重んずる保守的民族であることの表われであるが、それは日本人の短所であると同時に長所でもあることなど、総じて穏健な中にも厳しいものの見方をしており、短期間によくこれだけ日本を見たものだと感心させられる。

(静岡大学教授)



## —歴史と役割—

出席者 高橋 源次 (E L E C 英語研修所長)  
 黒田 巍 (大妻女子大学教授)  
 清水 譲 (国際基督教大学教授)  
 太田 朗 (東京教育大学教授)  
 山家 保 (E L E C 研究開発部長)

—いよいよ来年3月をもって *New Approach to English* が絶版になるわけでございますが、この教科書の歴史とその役割をお話し願うというのが今日の座談会の趣旨であります。

そこでまずははじめに、E L E C がなぜ英語の教科書を執筆しなければならなかったのか、その社会的背景、またはその動機というものからお話しをしていただきたいと思います。

## 教科書編さんの背景

**黒田** 終戦後、アメリカの指導幹部みたいな人が都道府県に配置されて、この人たちが日本の英語教育をいろいろ批評しておりました。その中に、当時の教科書はいずれも Translation Method にはよいかもしれないが、理想的な英語教育の立場から見ると、ずいぶん欠点が多いという意見が多かった。

こうした批判が世論としておきたころ、1956年に E L E C が「英語教育専門家会議」(The Specialists' Conference)を開催した。この会議での結論として出されたものの1つが、新しい教科書の作成ということだったのです。そこでさっそく当時の教科書を買い求めて一々こまかに検討をはじめた。これが、私どもが教科書を執筆することになるそもそもの始まりだったのです。

**高橋** 「英語教育専門家会議」の recommendation には4つの柱があったわけです。それは、教授法の改善、教材の作成、教師の再教育、入学試験問題の改善です。この中で教材の作成と教師の再教育は早く着手しなければならないというわけで、さっそく準備にとりかかったのでした。

**清水** 教材の作成の必要を感じたということは、Oral Approach という前提があったわけですね。当時の教科書は役に立ないというふうには私はいまでも毛頭思っ

ておりません。ただ Cultural Approach としての教科書としてはよかったです。Oral Approach の教材としてはたしかに扱いにくい点があつたんだろうと思います。

**太田** 日本では Palmer の伝統が戦前にはあって、その方法はごく限られた優秀な学校では行なわれたけれども、普通の学校では普及していなかった。それにはいろいろな理由がありますが、Palmer のようなやり方でやる場合、教師の能力が非常にすぐれていればいいけれども、普通の教師ではちょっとむりである。つまり、教科書そのものがそれに適したようにつくられていない。にもかかわらず、Palmer の方法でやろうとすると個々の教師の ingenuity に待つという点が非常に多くて、教師の負担が重すぎるということになる。

そこで、新しい教科書は、教師の能力がそれほど秀れていてなくても、それから準備のためにたいへんな努力を費さなくて使いやすいようなものをつくるという要求があったのです。それは、Twaddell とかそのほかの Consultants の方の意見でもあったわけですけれども、つまり、自動車の運転をやる場合に、アクセルをどうするか、ハンドルをどういうふうに動かせばよいかとか、ごくわずかの知識があれば実際に自動車の運転ができる。自動車のメカニズムを全部知っているとか、あるいは物理学や科学の知識がなくても自動車の運転ができる。

そういう意味で、"know-how" という知識さえあれば使えるような教科書をつくるべきだという考えが E L E C の教科書編さんの動機づけの中にあったように思います。

**黒田** 太田さんのおっしゃる通りでしてね、新しい方法で教えるのに教材と教師用書とが非常に詳しくできっていて、教えることがほとんど全部示されているような教科書をつくろうということだったのです。ですから教師

用書の役割に非常に重点をおきました。

太田 それから、もうひとつは、それまでの教授法というと、教室における教師の activity が主であって、教科書とか教材に対する関心にそれほどではなかった。教科書をどうやって料理するかという方向だけが教授法のもっぱらの中心点であって、もとになっいてる教科書の編さんをどうするかということはあまり注意の焦点になっていたなかった。

それで、Fries さんのいう Oral Approach では、もとの教材そのものをちゃんとしたものにしなければ、いくら教室での performance を問題にしたところで効果があがらないのではないかという考え方があったと思います。

高橋 英語を communication の手段として教えるという基本線があったと思うのです。そのためには Cultural Approach というような面ばかりではいけないので、とにかく、今日ほんとうに使われている英語、生きた英語の教科書をつくるなければならない。あくまでも communication ということを主にするということでした。

山家 Palmer が日本に新しい英語教授法を導入するのに貢献したことは認めなければならない。しかし当時の教材は語い中心の教材でしかなかった。Palmer 時代には母国語を教えるということと外国語を教えるということの違いが明確でなかった。ところが、戦後になって、外国語を教えるのと母国語を教えるのとでは根本的に違うということがわかった。したがって、日本語と外国語との構造分析をして違った点、つまり生徒にとっての学習上の困難点を主としてたたくという教材がなければならぬということが叫ばれてきた。戦前の語い中心の教材から、戦後は構造中心の教材をつくるなければならないということになって、それをやるのが ELEC ではないかということになったのだろうと思います。

### Idealism か Realism か

高橋 そこで、ELEC が理想的な教材を作成することになったわけですが、特に発音記号で phonemic なものにするか、phonetic なものにするかで議論がずいぶんされた。つまり idealism か realism かで意見がたたかわされた。

清水 徹底的に理想的な教科書をつくろう、全然売れなくてもいいからという意見。しかし、実際に採用する学校がなければ普及できないからだめだという考え方もある。

黒田 特にアメリカの consultants の先生方は、理想

的なものをつくるのならわざわざ日本にやって来た意味がないから帰国すると言いましたね。

太田 いまの idealism か realism かの産物が、Fries さんの *Foundations for English Teaching* だったと思います。

つまり、理想的なものを現実の検定教科書の中で実現するとすると、第一にひっかかるのは文部省の検定基準である。ページ数が非常に制限されているという中で、理想的な教科書はできそうにない。したがって、検定教科書ではある程度妥協したものを出そうじゃないか。そのかわり理想的なものは別の形で——これは売れても売れなくともいいから——とにかく一つの提案としてやつたらどうだろうということで Fries さんが *Foundations* を出したと思います。

山家 いまの idealism か realism かということは、その後いろいろなところまで尾を引いていますね。太田先生のおっしゃった *Foundations* のことですけれども、あれは1年の教材は教室内だけが場面になっていて、一步も教室外へ出ない。これでは指導要領に合致しないので検定教科書にはなり得ないわけですけれども、理想的な *Teachers' Guide* をつくろうというときに、実際につくってみると、それは普通の先生には高嶺の花にみえてきて、実際には使いこなせない。ほんとうに *New Approach to English* はいい教科書だと思うし、たくさんの学校で使ってほしいと思うけれども、それにはちょっと高嶺の花的なところがあったかもしれません。

太田 もしも Fries さんの *Foundations* みたいなものがそっくりそのまま検定教科書として採用され得るような状況を仮定してみても、あれでは現場の先生が使いこなせないと思いますね。それは題材がいまいわれたように、1年生は教室だけである。教室を一步も出ない。2年になるとその生徒の家とその周辺である町まで、3年になって初めて世界的なことがらが話題になってくる。つまり題材が非常に極限されているのです。

これは、ひとつのことをやりだすとそれをことんまでやらないと気がすまないという Fries 先生の気質のあらわれであると思うのです。生徒が1年間教室内のことだけやって、はたして満足できるだろうかという疑問が出てきますから、理想的な教科書の実現が困難だったのは必ずしも検定だけの問題ではないと思うのです。

### 編さん経過

——記録によると、1957年に1年用教材と教師用書の作成、1958年に2年用教材と教師用書の作成という



高橋 源次



黒田 魏



清水 護

ことになっているのですが、この作成経過についてお話しいただきたいのですが。

**清水** 1957年の夏に、中学校の若い先生方を集めて第1回の Summer Program をやったのですね。そのときに教材の tryout をした。

**高橋** Summer Program では in-service training をやったわけで、そのことをちょっとお話ししますと、第1回の準備をしたときに、私どもは名士の講演などを入れて3~4日のいわゆる講習会の企画をした。そしてそれを Fries さんに見せたら、彼はいたけだけになって、「これは in-service training じゃない。ELEC Summer Program は、我々が将来つくる textbook の confidentialな materials を tryout するところだ」としかられましてね。(笑) そこで、それなら考えなおそうというわけで、3週間の企画をしたわけです。

つまり、理想的と考えられる教材を執筆して、まず先生方に実験台になっていただくという態度が最初にあったわけです。それが tryout ということだったわけです。

**黒田** 1957年の夏に1年用の tryout をして、翌年の夏に2年用を、またその翌年には3年用の tryout をするという計画であったのですが、実際やってみると Summer Prorgam 用の教材が教科書の企画の線から離れてきました。そこから教科書をつくり出すということはたいへんなことで、どうなることかと不安に思えてきました。つまり Summer Program は教材の tryout からだんだん in-service training が主体になっていったと思います。

**太田** 当時 Twaddell さんがものすごくたくさん教材をつくったのですが、あれは in-service training のための教材であって、教科書の準備のためではなくたような気がしますね。

**黒田** ほんとうは57年から教科書に取り組んだつもり

だったのですけれども、その後指導要領が新しくなったりして、せっかく作った材料もいろいろな点でそれと一致しないものですから、結局59になって出なおしをしました。

まず、Kleinjans さんにお願いして、Fries さんの教材の骨組を利用して1年用の教材の執筆をしていただいた。それが1月から6月頃までかかったと思いますが、毎週編集会議を開いて検討をしたのです。

その夏には Haden さんと Haugen さんが来日して、それぞれ2年用と3年用の教科書を渋谷の高木八尺先生のお宅をお借りして執筆していただいた。我々日本人側の委員(黒田、太田、伊藤、池永、牧野)も渋谷に通って検討をしました。

**高橋** あの頃覚えたことばに“corpus”とか“check list”がありましたね。単語をたんねんに check list で調べたのですね。

**黒田** 同じ単語が何回出たかという繰り返しを調べて、それはそれは周到な編集を進めて行きました。

**山家** あのとき、Twaddell さんが“lacuna”ということばを使った。ひとつの単語がつぎに出てくるまでの間隔のことをいう。

**黒田** あれだけこまかく綿密に grading のことを考えた教材というのはまず例がないでしょう。

**高橋** ぼくは、あんなにこまかく基礎がためをした教科書はほかにないと思います。

**山家** 編集中にもっとも大きな問題は、どの発音記号を使うかということだったと思います。Consultants は Phonemic notation を使えと主張し、日本ではあまり使われていないから Jones 式がいいだろうとか。ずいぶん会議を重ねて、結果的には最近亡くなられた岩崎先生の『簡約英和辞典』の記号を採用することになった。

**高橋** そうだったですね。いろいろ discussion をやったね。



太田 朗



山家

保

清水 Haden さんが出席していた理事会だったかと思いますが、1つの二重母音の表記の仕方だけで一晩かかったことがありますね。

高橋 市河先生もだいぶん意見を出されたことをよく記憶していますね。

太田 それから contraction をどの程度にするかでだいぶ議論しましたね。それでかなり大幅な contractionを取り入れることになった。

山家 当時、contraction を教科書に採用したのは *New Approach* が初めてですね。そして教科書が出来上ったときに各出版社が盛んに悪口いいましたね。いまでも覚えているのは I'm Ted. とか、She's an American girl というのが出てくると、これを疑問文にすると、'M I Ted?' とか 'S she an American girl?' になるではないかと、ある出版社の雑誌に書いた大学教授がいました。ずいぶんひどいことを書いたものでした。

ところが、それから3年ほどたってから、その出版社が教科書の改訂版を出したときには、改訂趣旨の第一番目に「本書におきましては縮約形 (contraction) を大幅に取り入れました」と書いてあるのですね。

3年後には教科書がそんなに変わった。それだけ natural English を教える必要が理解され、そのためには contraction の採用が不可欠であることが理解されるようになりましたのだと思います。

### 採用部数

—1962年にいよいよ *New Approach* が使用されたわけですが、この年の採用校が130校、その後1965年と1968年に2回の改訂版が発行されたのですが、それぞれ採用校は101校と147校で、予期したほどの採用が得られなかつたのですが、この原因はどこにあったのか。ざっくりばらんにお話し願いたいのです。

高橋 よかうたからですよ。英語教育の先端をいったからだと思いますね。

黒田 ある先生のお話を聞いたことがあるのですが、「*New Approach* はあまりに進み過ぎた。もうちょっと手前でとまつたほうがたくさん採用されたのではなかろうか」といわれました。

清水 ところが、ある学校の校長先生でしたが、その逆のことを言わされましたね。「なぜ E L E C はあんな中途半ばなものをおしましたか、もっと徹底すればよかったです」と。だからほんとうの実情はわかりませんよ。

黒田 高校入試のためのテストに向かないという意見もありました。*New Approach* は英会話の教材で文法事項を扱っていないという偏見もあったようです。

山家 これは当たっているかどうかわかりませんけれども、*New Approach* の採用が決定されて、その次の年になって *Teachers' Guide* が出来たのですね。ということは、採用の展示会の段階では *Teachers' Guide* が出来ていなかった。ある人たちに言わせれば非常に急進的な教科書であったにかかわらず、*Teachers' Guide* が出来ていないのでどうやって使っていいかわからなかったということが一つの原因としてあるように思うのです。

それから、いまの教科書制度も一つの原因にあると思います。教科書を無償で配布するということのために、cost を下げることが主になって質を上げるということが二の次になっちゃった。そして、広域採択制度のために大きな出版社だけが残って小さな出版社は太刀打ちできないようなかっこくなってしまった。結局、いい教科書でも大会社のコマーシャルのために埋没させられてしまったというのが現状でしょう。ですから10年ぐらい前までは教科書会社（中学校の英語）は十何社あったと思いますが、現在ではわずかに5社になってしまった。

昔は展示会といういろいろな先生が行って自分で教科書を調べたのですが、いまは検定教科書が県定教科書になってしまって、先生方はもう教材選択のための研究をしなくなってしまっている。本来は自由競争の中からいい教科書が生れてくるはずなのだけれども、そうではなくなってしまっている。これは教科書の採択制度が災いしているものと思います。

高橋 いま山家さんが指摘した点と、もうひとつ「良薬は口に苦し」という点があったと思うのです。*New*

*Approach* が中途半ばだという人があったとしても、その時代としては、すなわち translation method で英語を教えていた時代に、ひとつのエポックメーリングな、means of communication としての英語を教えるべきだという大前提のもとに編さんしたところの教科書は絶対に fit in しませんね。そのことはさっき黒田さんの話にあった高校入試あるいは大学入試の問題の形態が旧来の grammar-conscious なものですから、そのための準備としては *New Approach* では足らないと思う人があったと思うのです。

そこで、こんどは先生の資質ということが問題になるわけですが、この *New Approach* をほんとうに means of communication としての教材として使いこなせる先生が非常に少なかったのではないかと思うのですがどうでしょうか。

太田 いま高橋先生がいわれた、教科書を使いこなせる先生が少なかったということと、山家さんがいわれた *Teachers' Guide* がおくれて出たということを考え合わせると、そこにひとつの理由があると思うのです。

つまり一番最初にぼくがいったように、Palmer のやり方というのは個々の先生に非常な負担がかかる。だから先生があまり準備しなくとも、*Teachers' Guide* があれば先生はそれをたよりにして、非常に少ない労力でできるはずであるという趣旨で発足したものが、*Teachers' Guide* ができないで教科書だけが先にできちゃった。だから、そもそも非常に新しい方法でやる場合に、その guideline になるようなものが教科書と同時に出てこないというのは致命的だったと思いますね。

それからもうひとつは、Oral Approach というものに対する誤解があったと思うのです。つまり Oral Approach は conversation を教える手段であるという誤解があったと思うのです。したがって中学校の英語教育というのは単に会話を教えるだけでなくて、ほかにいろいろな目的があり、Oral Approach だけではかたちんぱだという非難が出てきた。

しかし、実際に Oral Approach は会話を教える手段ではなくて、goal は別なんです。goal は別であっても oral でやることであったわけです。ところが goal が oral の conversation だけを目標にしているように誤解されていたということがあったのですね。

山家 しかし、なんといっても一番大きい原因は、commercialism だと思いますね。教科書採択以前の教科書会社のやる裏側の宣伝合戦というのはたいへんなものですからね。

高橋 そうした commercialism が案外決め手になっ

ているかもしれません。しかし、あらゆる人生かくのごとしで、これが原因で結果がこうなったというようなことはまずないわけです。それがこのごろ Ecology と呼ばれるものでして、*New Approach* の Ecological reason を言いだしたらたくさんあると思います。

太田 もうひとつ申し上げたいのは、Oral Approach では Pattern practice と Contrast が 2 つの main features であるというふうに思われて、Pattern practice というのは非常に mechanical な作業で、意味を考えない單に形式的な、機械的な drill であるというような誤解がかなりあったと思うのです。

ところが、Fries さんの Foundations では、Pattern practice は実際に situation の中で意味をもって展開されているわけで、Pattern practice は意味を伴って行なわれなければならないということは非常に明確になっているわけです。そのことは Fries さんが繰り返し繰り返し言っていたことでもあります。

山家 Pattern practice においても意味を教えるのだとということをね。これはたいへんいい指針だったと思いますね。

### 教科書の果たした役割

高橋 指導要領の基本線は、英語は International means of communication として教えなければならないということなんです。この考え方を全面的に打ち出して編さんしたわれわれの *New Approach* は quality の点からみて大きな influence を与えている。また、そればかりでなく、教科書出版会社にも大きな influence を与えて、pioneer としての大きな役割を果たしている。つまり、*New Approach* 以後のほとんどすべての教科書がわれわれと同じ編さん方針をとっているのです。このことは、当時文部事務次官であった福田繁さんがすでに指摘しているところでもあります。(ELEC Bulletin, No. 20, p. 5, 1967)

これをみても、*New Approach* の果たした役割というものは epoch-making な function を充分に果たしたと思っております。

清水 なんといっても、ほかの教科書に与えた刺激、影響は非常に大きいものがあると思います。一応ここで絶版にはなりますが、新しい教材として活用の道は大いにあると思います。

山家 ELEC ではこの教科書について、何校かの研究協力校にお願いして実践研究をしてもらったわけです  
(p. 20 へつづく)



# NEW APPROACH TO ENGLISH を使用して

SEE YOU AGAIN!

九州学院中学校

西 一郎  
谷 口 恭 教

NEW APPROACH が今年で絶版となると聞いた時の私達の驚きと失望は、表現し難い。これは、私達の英語科が長い間放浪の末、やっと探し当てた教科書だったからである。しかも、ようやく慣れ、いよいよ油も乗ろうという時に、絶版になるとは。

この教科書の良さは、教材の配列の妙にある。外国語を覚えるには、必ずしも何らかの抵抗がある。だからこそ、生徒の言語習得を効果的かつ能率的にするには、できるだけ学習上の抵抗を少なくしなければならない。この点に主眼を置いたこの教科書は、1年生用から3年生用まで、実に細かく考えられ、計算された配列がある。言語形成に是非必要な対称的な言葉及び文章が、必ず近くに伏せてある。そのコントラストの妙に、教えながら、「これだ、ここだ」と何度も膝をたたいたか知れない。

優れているのは、単にコントラストだけではない。また易から難へという単純なものでもない。大体教科書というものは、教える者にとっても教えられる者にとっても、無味乾燥で面白くないものだときめ込み勝ちである。ところが NEW APPROACH には feeling がある。3年の教科書の「次郎君のアメリカ生活」をとってみても、すべて生き生きとして、実地に役立つものばかりである。会話の教科書としても優れている。生徒達には、「NEW APPROACH の教科書は、決して人にゆずってはいけない。高校へ行っても、大学に行っても、いや社会人になっても、これを繰返して読みなさい。そうしたら、会話で困ることはない。」と常々いいきかせてきた。

Feeling を感じさせるのは、また、TEACHERS' GUIDE

についている全文の intonation である。また REVIEW の中の文型練習といい、前日に習った英語の内容についての selection による練習といい、new material の綿密な導入といい、意を尽してあります所がない。しかも、それが毎日、毎時間、同じ綿密さで書かれてあり、教師はそれに従っているだけで生徒の力がついていく。いや、英語が上手になったのは、生徒ばかりではなく、実は教師であったかも知れない。

この TEACHERS' GUIDE の最大の魅力は、たとえ教師が、未熟で自信のない新任教師であっても授業では、キャリアのあるベテラン教師の味を出すことができることであろう。教師が1冊の教科書を与えられた時、それをどう教えるかによって勝負が決まる。教育は、教師の熱意だけではどうにもならないものがある。教え方のまずい教師に当たったら、その生徒達は生涯浮かばれないであろう。特に、言語習得の基礎的な段階においては、教師の責任は重大である。この意味で、この優れた TEACHERS' GUIDE を与えられたことは、第一線の教師にとってこんな幸いなことはない。教師の幸いは、生徒の幸いである。

当熊本県では、この NEW APPROACH を使ったのは、ほんの数校に過ぎなかった。県内の多くの教師、特に ELEC の講習を受けたり、本校の授業を参観に来られた先生方からは、是非この教科書を使いたいという熱望も聞かれたが、広域採用という方針からか、遂に、現場の声は生かされなかった。

私達がこの教科書にめぐり逢ったのは、この本が大修館から出版された時であった。それ以来、我校の英語科には、大きな変革が起つて来た。採用2年目の夏、初めて ELEC の夏期講習会に出席し、NEW APPROACH を使用している教師が、旧来の授業の知識しか持ち合わせていないのでは、この教科書の意図している効果は半減していることを知った。大学では英米文学を専攻して来た教師が、言語学の何たるかも知らずに、ただ外人の発音を忠実に真似ていれば基礎英語を教えられる、信じていたことが、恥ずかしく感じられ始めた。その時以来、本校では、夏が来ると代わり合って講習会に出席し

た。中学校関係の教師ばかりでなく、高校の英語教師も出席した。残念ながら協力校までにはならなかつたが、ELEC から講師を招き、教授法の理論についての勉強会が重ねられた。本校の外人教師との協力態勢が益々密になり、高校での彼等の会話の授業にも、CONTROLLED CONVERSATION などの教材が、活用されるようになつた。更に 3 年前からは、高校の新入生に対しての 2 カ月間の口頭練習中心の教材を、英語科一致で作成するに致つた。現在、このような教材を 2 年にもと、研究が続けられている。

今春、3 年間の米国留学を終えて、1 人の教師が私達のグループにもどつて來た。ELEC の講習会、研修会に出席した彼が、オハイオ州立大学で、言語学のマスターの学位を取つてきたことは、当然の帰結として受け取られるかも知れない。しかし、熊大在学時代から米文学に打ち込んでいた彼のこの 180 度の転換は、實に NEW APPROACH との出会いに始まるのだ。

また、現在東京のある大学で、新進気鋭の言語心理学博士として活躍している B 教授も、本校が NEW APPROACH を初めて採用した当時、undergraduate の大学を卒業して着任して來た、米人教師であった。それまでの教科書の物語の内容について、語法について、また英語の授業に対する生徒の態度について、さまざまの不平不満を持っていた外人教師から、ビタリとその不満が聞かれなくなり、私達邦人教師との息がピッタリと合ひだしたものも、顧みると、この教科書採用以来である。また、毎年交代のために派遣されて來るこれらの米人教師の多くは、教師としての経験が乏しく、外国语としての英語の教授に未熟なのだが、この教科書と TEACHERS' GUIDE は、その点でも私達の良きヘルパーであった。

NEW APPROACH は、実用英語、生きた英語をその英語教育の主眼的目標として來た本校には、米人教師と語学練習ラボとともに、正に願つてもない大きな宝であり、誇りであった。

今、絶版ということによって、この宝が私達から奪い取られようとしている。中学の教科書で止まることなく、高校版の NEW APPROACH を、と願つていた私達にとって、慨嘆の念で胸一杯である。

この教科書が絶版になる理由は、知るよしもない。思うに、現在の読み書き偏重の入試に害された英語教育のあつい壁を、遂に破ることが出来なかつたからだろうか。「新しいブドウ酒は、新しい皮袋に」との言葉があるが、古い教科書を脱皮したこの教科書を入れる入れ物は、あまりにも古過ぎているのだろうか。口頭練習を主体とした教師再教育のテンポは、あまりにも遅々として

いるのではないだろうか。

絶版という現実を前にして、憤慨と失望はおおい難い。しかし、私達は全く希望を棄てたわけではない。十年前に、この教科書が初めて世に出た時に寄せられた夢と期待は、今、各地で花を咲かせ、実を結びつつあるのだ。この事実は、必ずや近い将来に、第 2、第 3 の NEW APPROACH の出現となつて私達の前に姿を見せる力強い徵であることを信じている。

NEW APPROACH よ、また会う日まで。

終わりに、この教科書を今日まで可能あらしめた関係諸先生方に、心からの感謝をこめて、お礼を言いたい。

(p. 18 よりつづき)

が、その先生方はこの教科書で指導すると生徒の成績があがるということを実に見事に実証してくださいました。ふつうは、教材が進み、文章が複雑になると生徒の発表能力は落ちるはずなんですが、これらの協力校のデータでは落ちるどころか、むしろ向上しているという結果が報告されている。

このことをみても、この教材なり、Oral Approach の考え方方が、もちろん反対すべき点はあります、大筋において間違つてはいなかつたということがいえるのではないかと思います。

黒田 この教科書は大勢の方々のお世話をなりまして、特に Fries, Twaddell, Haugen, Haden, Kleinjans 等の世界的な学者のたいへん献身的なご努力をいただいて出来上り、一方では大修館にても学研書籍にしてもずいぶん力を入れてくださいました、ことに感謝申し上げたいと思います。それほど多くの採用はありませんでしたが先ほどからお話のとおり、間接的に英語教育に貢献できたのではないかと思います。

そこで、New Approach は検定教科書としの壇はおりますけれども、何かの形でいつまでも残しておきたいというのが私の心からの希望であります。使用された先生方もずいぶん援助をしてくださいました。それらの方々はたいへんな賛辞をわれわれに与えてくださっております。それをはげみにして、今後これを生かして、さらに英語教育のために何かの形で役立たせたいものだと思っております。

太田 高橋先生、黒田先生のいわれたことに全く同感で、ほんとうにその通りだと思います。ただ自分だけのことをいいますと、Fries さんの Foundations のお手伝いと教科書の編さんをとおして、とにかくいろいろなことを勉強させてもらって、いまでもよく覚えております。その点で深く感謝したいと思うのです。（終）

# 名刀の切れ味

旭川市常盤中学校

森 博

「私にとって、一生心に残る英語の教科書は何かと問われたら、ちゅうちょなく *Kings Crown Readers* と *New Approach to English* の2教科書を挙げるであろう。前者は私が初步の英語を教わった立場から、後者は英語教育の何かを、そして英語学習指導の楽しさを教えてくれた教科書としてである。浅緑、黄、空色——表紙といい中味といい現代っ子にとっては、むしろ地味すぎるくらいの体裁であるが、一度これを手にして教室に臨むと、その真髓をいかんなく發揮してくれる。それは外装こそ目立たないが、いざという時にその切れ味を十分に示す実戦向きの名刀にたとえることができよう。しかも、その内容を仔細に調べると、それは、そりといい、においといい、心憎いまでに鍛えあげられた名刀工の業を彷彿とさせる。

ある時、著者のお一人に、この教科書編集の苦心の一端を伺ったことがある。「*Teachers' Guide* を作りながら、内容の瑕に気がつくと、それがどんなに些細なものであっても、教科書そのものにまで手を加えて、完全なものを作り上げていたものでした。」この述懐だけで、*New Approach* がいかに琢磨されていたかがわかった。 *Successive small steps of contrast* の意図がいかに巧妙にくみこまれ、学習の場に生かされているかは、一度この教科書を手に取って、1年から3年までの教材を音読してみたらわかるであろう。中学生のみならず、ある成人学校で戦中派の奥さんたちの学習用としてこの教科書を使って、素晴らしい効果を発揮している様子を何度か目撃して、驚嘆したものである。

*New Approach* の真価は *Oral Approach* の指導法と相まった時に倍加する。もともと Fries 教授の *Corpus*をお手本にし、日本の中学校の実情にあわせて、この教科書が作られたと聞いているが、その肌目の細かさ、配慮の周到さは、まさに絶品である。その著作者及び顧問の方々お名前を拝見しただけで、その一貫した編集方針と態度がうかがえる。1時間の授業中に導入すべき新語句、新文型を5~6項目程度におさえ、無理なく口頭導入ができるようにしてある。上述のように、この教科

書と表裏一体の立場にある *Teachers' Guide* を見ると、「defining sentence の構成が実際に巧みであることに気付く。学習理論通りに、既習の単語、文型中のスロットに新語が組みこまれ、(編集上、いちいろ外的な制約があったことと察せられるが)殆んど抵抗なく生徒たちがその意味を推理できるようになっている。これは実際に教室で扱ってきた私たちの等しく経験したことである。」

理解の check にしても、始めから新文型として平叙文ばかりではなく、関連疑問文などの応答文が現われているので、英問英答による理解の点検が容易にできるようになっている。このことは復習段階における variation 中の conversion や selection において有効に利用出来ることはもちろんのことである。また単語にしても、文章にても、contrastive features が絶えず意識されているので、対比によって発音や意味の明確化の一助になったことも少なくない。

この教科書の特徴の一つとして、いわゆる縮約形が多く用いられているが、これは speech を文法の基底におく立場から当然のことと言えよう。よく縮約形が多くて文章体を疎かにしているのではないかと非難めいた言葉を聞くことがあるが、*New Approach* の構成をよく見ると、この批判が正しいものでないことに気づく。なるほど対話文には生きた会話としての短縮形が存分に駆使され、いきいきと場面が展開されているが、説明文においては、きちんとした文章体が使われている。この2文体が1課中に巧妙に使いわけられていて、生徒が将来いずれの形の communication の場におかれても困らない配慮がなされている。

今日教えた2年生の教材に、たまたま、こんな場面が出てきた。

New Material (pp. 45—46)

(Lesson 8) 2

What are you doing, Ted?

I'm studying my English lesson for Monday.

What are you going to do tomorrow?

I'm going to go on a picnic.

...

How are you going to go there?

Dick's parents are going to take four of us in their car.

The rest are going to ride in Tom's uncle's car.

Intensive な choral reading を終ったあとで、聖通り sequence signals の探究に入らした。1行目を読んで、「Ted」と、質問している人は、「どこにいると思いますか?」「図書館です。ここでは現在進行形になっています

し, section 1 には I'm going to the library now. I'm going to study my English lesson for Monday. という文がありました.」2行目を読んで、「この文ではどこを強く読みましたか.」「English と Monday です.」「どうして.」「What で聞いているから English でしょう. それに \*英語の先生、English teacher というときには English に力を入れると 1年生の教科書で習いました.」「では、Monday に力を入れるのはなぜですか.」「きっとまだ金曜日なのに、もう月曜日の勉強をしているからでしょう.」3行目、「tomorrow を強く読んでいるわけは.」「前の2行の文が現在していることで、それと区別するためです.」4行目、「どこに力を入れて読みましたか.」「picnic です. What でたずねていますから.」云々.

こんな風にして最後の2行に達した。「最新の行は rest と uncle's に力を入れて読みましたね。これは、前の文のどの語に対比して強く発音しているのですか」「rest は four に、uncle's は parents に対比してです.」

文脈の中で、かぶせ音素の型も、文化的背景も、実にいきいきととらえることができて、非常に興味深い。思いつきで並べ立てられた教材配列とちがって、前の課が次の課に、前章が次章に有機的につながっていて、活字面にもあらわれない文の脈絡をみせてくれる。私はこの教科書を使って、改めて文章全体の音調（強勢、抑揚、段落など）の大切さを、如実に知った。

語は文脈の中でこそ意味を持つという証左を私は別の形で発見した。それは巻末の word list においてである。たいていは、単語または熟語に品詞と日本語の訳のみをあたえて終っているのが、従来の教科書の行き方であったが、New Approach には、新出語はもちろん、再出語でも意味のかわった場合、その意味と、その単語の含まれている文を掲げ、更にその文の出ている個所の課を示してある。いかにその主張を忠実につらぬいているかを物語る好例だと思う。

私がこの教科書から学んだ他の重要事項の一つに、1年生の初めから筆記体を指導することである。外国から手許に届く書信を開くと、ほとんど例外なく私信は筆記体による手書きで、公用文はタイプで印書されている。一部では手書きにもブロック体の採用が優勢になりつつあるとの説もあるが、タイプライターの普及と共に、書く文字からは活字体が姿を消してゆくのではなかろうか。さらに、期待に胸をはずませて第1時間目の英語のクラスにのぞむ1年生が、最もいきいきと目を輝かすのは、未知の音に接する時と、筆記体の書き方を習う

時ではないだろうか。数十年間定説のように受けつがれてきた通りに入門期の数週間（小学校のローマ字の時間で習熟してきた）ブロック体で書き続けさせるより、筆記体を初めから小出しに与えて生徒の興味を満足させてゆく方が学習効果のより大きいことを、私は経験で知った。この意味で、入門期の最初から1時間の授業中15分位筆記体の書き方にあてて、1学期中に筆記体を定着させるというこの教科書の指導方針に賛成である。

文法は、意味の理解、speech habit の確立のあと、その働きを帰納的にまとめて理解させる方がよいと確信しているが、この意味で各課末の Notes や、各单元末の Review を活用させていただいた。特にこれらの取扱い方の秀れている点は transformation や successive small steps of contrast の理論がよく活かされていて、生徒も既修事項から容易に文の働きを帰納的に理解し、整理できることである。

「聞く、話す、読む、書く」、更には、「recognition—imitation—repetition—variation—selection」の完全学習を目標にして1時間の学習項目を最小限に配分するため、各課末の exercises に時間がとれない場合があるが、そのほとんどが、variation, selection の段階で扱った応用練習の再現であり、かなりのスピードで exercises の口頭練習ができることに気がついた。また、挿絵は simple であるが、内容や、教師用の chart とよくマッチしていて、私の娘が中学1年のとき復習をみてやったことがあるが、variation や selection にそのまま挿絵が利用できた。

正しい言語理論と長い間の実証によって裏付けされた素晴らしい教科書も、来年度からは絶版になって姿を消すという。数年間、心魂を傾けてこの教科書にとり組んできた私たちにとって非常に淋しい別離の時があと半年後に訪れようとしている。私の脳裏には New Approach to English を使って充実した日々を送った思い出と、毎日行なってきた5分間テストのデータが永遠に残ることであろう。英語教育の歩みに大きな一時期を画したこの教科書の著者各位に深甚の敬意と感謝を捧げるとともに、愛惜の情をこめて私の感想を終わらせていただきたいと思う。



# 学力の目ざましい向上

佐賀大学付属中学校  
武藤 陽一

## I 出会い、そして実証

*New Approach to English* が最新の言語学の理論にもとづいて編さんされたすぐれた教科書であるということを知ったのは、昭和38年に ELEC の夏期講習会に参加したときでした。そしてそのとき、新しい英語教授法を学び、かなり心を動かされました。以後昭和39年から昭和46年3月まで同教科書を採用し、Oral Approach による指導法について研究を進めてきました。

ところで、表題についてですが、一口に言って、「全くすばらしい教科書であった。」とはっきりと自信をもって言えます。わたくしたち現場の者には、教科書を学問的に研究したり、批判するだけの高度な能力は持ち合わせておりませんし、また、教科書というものは、いわば Bible と同じく神聖なものと考えておりますので、語句や内容の詮索はできません。

教科書についての感想は、その指導法と表裏一体の関係にあると思いますので、生徒は具体的にどう変わったか、また、教師は何を学んだかなどを卒直にのべてみようと思います。

## II 生徒の学力はどう変わったか

(1) Reading と Writing の力が3年終了時において、全英連で作成した高校1年終了生を対象にした問題で評価した結果、平均点で全国高校のそれを上まわっているのに驚きました。これは文型練習を通して、相当長い文を耳に全神経を集中させながらおこなったドリルが直読直解力をつけさせたことだと思います。

(2) 3年生全員に、日本英語検定4級テストを9月になつてやってみた結果、36問中正答率90%以上が31問、70%以下が5問でした。その中の3問は発音符号に関する問題に抵抗を感じており、一番わるい問題は、26.8%の成就値しか示していない現在完了についての理解力を見るものでした。

John has gone to India. と近い意味をあらわす文の選択 (26.8%)

ア、John came back from India.

イ、John has left for India.

ウ、John was going to India.

エ、John has been in India once.

結果は、have gone と have been とを結びつけた者がほとんどで、教科書の最初の現在完了が Have you ever gone camping? の文からはいっていくので、このような結果がでたともいえましょうが、要は副詞の役割をもっと徹底して教えることと、ある時期にまぎらわしいことがらをしっかりと取扱わなければと考えております。

(3) この教科書は生徒にとって不思議なくらい暗誦しやすく編さんされているようです。このことは、いわゆる「教材が構造中心のもので、英語の構造がそれ互に密接な連関関係にあって、まとまった体系として提示され、しかも、連続する小さな段階をへて配列されている」ためでしょう。それに多くの場合、日本語の訳をしないでも生徒は文脈から意味を自然に把握できていくようです。

Palmer が “The study of a language is, in its essence, a series of acts of memorizing, and successful memorizing is the basis of all progress” という名言を残していることと関連して、生徒が示した顕著な成績は Oral Approach による教授法の科学性と、この教科書のもつ芸術性によるものだろうと確信しています。

(4) 1年から3年まで、同質同量の oral work がされうことや、上学年に進むほど生徒の response に迫力がでてきて、授業が活気づいていくことなども、教科書の持つメカニズムと、指導法との見事な連関によるものだろうと思います。

「音声言語の習得がいわゆる英語の技能を養う鍵である」ということが実践を通して、意義深い言葉であることを再認識いたしました。

(5) 教材の配列が自然な会話文の中で話を展開するようになっているために、いわゆる生きた言語活動がやりやすく、生徒は知らぬ間に話し言葉が身についていくようです。その2、3の例を教科書から抜萃してみましょう。

### Book I, Lesson 10

Do Betty and Dick have pencils?

No, they don't. They don't have pencils.

What do they have?

They have books and pens.

### Book II, Lesson 8

Aren't you going to study tomorrow?

No, I'm not. I'm not going to study tomorrow.  
Why aren't you going to study tomorrow?  
Because we're going to go on a picnic.

Book III, Lesson 14  
S: Your arm is broken, my friend.  
1: What's that?  
2: He says that your arm is broken.  
S: I'll use some new medicine to help you.  
2: He says he'll use some new medicine to help you.

(6) Free composition をさせてみて writing の力や、英語的発想法がひじょうに総合化されて身についていることに驚きます。

つぎに卒業直前の昭和46年3月10日に書かせました自由作文の中から3点だけ生徒の原文のまま掲載してみましょう。M. Shigetaさんはクラスで中位ぐらいの生徒で普通のテストで70点前後をとっており、T. Kobayashi君は上位の生徒で90点前後をとる成績です。題はいざれも「先生への手紙」という課題です。

March 10, 1971

Dear Mr. Muto:

I am thankful that you have taught me English for three years. I have learned a great deal at this school. I have studied English very hard among other subjects, but I couldn't understand it well. I am sorry that I couldn't understand English which you taught. But it doesn't mean that you are a bad teacher. It means that I am not a good girl.

So I will study English more and more, and I will be able to understand it.

Sincerely yours,  
Michie Shigeta

March 10, 1971

Dear Mr. Muto,

Thank you for your teaching us. I wish I would learn English any more with you.

Oh, my school life! However I can't stop time. Spring will come soon. And we will have to be far from you. If I were a bird, I could fly to you. I am looking forward to seeing you again. Good-by.

Sincerely yours,  
Tsukasa Kobayashi

さいごに最優秀の生徒の作文を紹介してみましょう。彼は現在鹿児島県のラサール高校1年生です。同じく3月10日に書いた自由作文の一つです。

#### About Music

I like music, especially to listen to music. My favorite composers are Bach, Beethoven, Mozart and so on. Whenever I listen to their works, my heart is filled with satisfaction which I cannot have when I'm studying or playing.

I also play the guitar myself. I make it a rule to play the guitar everyday. It's important for us to listen to music. We must grow our humanity by approaching music.

Hidehiro Inatomi

このように、この教科書で、しかも Oral Approach で3年間手塙にかけて育てられたクラスの、どの生徒をとっても結構自分が経験したことや、感想などを20分ぐらいの時間で、やさしい英語を使ってどうにか書けるようになっているようです。これこそ新指導要領で強調されている言語活動の総合化された、理想的な姿が出ているのではないかと考えております。

#### III 教師は何を学び、何を感じたか

今まで述べてきたいろいろのことからいっても、最新の構造言語学の理論に合わせて作られた *New Approach to English* や Oral Approach の指導原理自体が立派なものであるということが決してオーバーではないということをおわかりでしょう。

語学習得で一番大切といわれる memorization の習慣がつき自然と語り、構造、語順の定着がいちじるしく向上することは疑う余地がありません。かくてはじめて、「外国語の音声に慣れさせ、聞く能力および話す能力の基礎を養う」を達成し、さらに、「外国語の基本的な語法に慣れさせ、読む能力ならびに書く能力の基礎を養う」をも十分にみたすことになるのだと思っております。

こうして私はこの数年間に、英語教師として学んだことが山程あり、本当に有難いことでした。さいごに、心に残る四つのことを記して終わりにしたいと思います。

- (1) 「4技能のいざれにもあり、それがなければ4つの技能はすべて不可能になるものが1つある。それは acoustic image (聴覚心像) である」ということ。
- (2) 英語学習のすべての計画、努力は語順に集中されるべきこと、そして、教師は授業の終りに生徒が文としてどれ程運用能力ができたかに心しなくてはならないということ。

(p. 26 へつづく)

## 良い授業・良い教科書

新潟県大和中学校  
横溝邑市

英語教育の上で、教師のもつている言語観や言語教育観は重要な役割を占める。というのは、それによって英語教育の目的が決まるからである。目的が決定すれば、次に問題になるのは、如何に教えるか (how to teach) という教授法と、何を教えるか (what to teach) という教材内容である。そして、その目的達成のために、最も合理的と考えられる教授法で、その教授法に適するよう組織し配列した教材を用いて指導するのが、一番効果的であるのは当然である。

現在、中学校の英語教育に大きな影響を与えていているのは、高校の入学試験である。新潟県の中でも進学率の低い南魚沼郡の農山村地区でも進学志望者は60%位に上昇してきている。高校の入学試験日が近づく3年生の2学期ともなると、普通はあまり勉強しない生徒も、とにかく「高校の入学試験に合格したい」という強烈な欲望をもってくる。そして彼等がとびつくのは、いわゆる受験参考書であり、問題集である。教師達も動詞からはじまって、仮定法で終る文法体系 (school grammar) 中心の受験参考書で、短期養成をはかる。そして全く受験参考書の英語指導法にふりまわされる結果になる。

この場合、英語教育の目的は、高校の入学試験にパスする程度の英語の学力をつけることであり、その方法としては、伝統的な教授法 (grammar-translation method) で十分なのである。ましてこの方法は、教師自身の大部分が体験してきた学習法とも一致するから実に手取りばやく、また目的にかなった学習指導法でもある。このような言語観に基づいて編集されている教科書もある。教師は教室へむかって廊下を歩きながらペラペラと教科書のページを繰り、「ああ、今日は関係代名詞だな。」と教室へ入り、「今日は関係代名詞を教える。いいか、これは～するところ。」という意味だ。では、この文の意味を言ってみろ。」というような具合に授業がすすめられていく。これで入学試験には何んら差支えないものであるし、当地方の一般的授業風景でもある。

そんな実態のところへ、*New Approach to English* を広域採択の教科書として使用することになったのだか

ら、一番びっくりしたのは教師達であった。分厚い *Teachers' Guide* と *Teachers' Manual*。それをどう使うのかもわからず困惑し、結局は我流が一番ときめ込んだようである。だが、お得意の Grammar-translation method でやっつけようにも教科書をペラペラと見たぐらいでは文法項目がつかまらず、文句が続出することになる。その代表的な言葉が、「この教科書は良くない。地域の実態に合わない。農山村の生徒にはむかない。」などである。

しかし、これらの反論の最大の原因は、教師達が、*New Approach to English* が誕生した背景となる言語観、Oral approach の指導理論やその教材観を知らなかったことにある。たとえて言うならば、馬車が代表的交通機関であったところへ、自動車が現われたようなものである。「馬がつないでなければ、走れないじゃないか。」全くごもっともの批判である。

*New Approach to English* はアメリカの構造言語学の成果の上に立って、Fries の Oral approach の理論から生れたものである。

その理論は、*Teaching and Learning English as a Foreign Language* (Fries), *Foundation for English Teaching* (Fries), 『新しい英語教育』(山家保) 等に詳しい。

英語学習の目的は、英語をコミュニケーションの手段 (means of communication) として獲得することにある。つまり

- (1) Native speaker の話す英語を聞いてわかる。
  - (2) Native speaker がわかるように話す。
  - (3) Native speaker の書いた英文を理解する。
  - (4) Native speaker がわかる英文を書く。
- という4つの技能を獲得することである。

Fries は成人が英語を master するために必ず第1になすべきことは、限られた語いの範囲内で

(1) 音組織を習得すること——談話の流れ (stream of speech) を理解し、音の示差的特徴 (distinctive sound features) を聞き分け、自分の発音をそれに近づける——ことである。

(2) その言語の構造を形づくる所の配列の特徴を習得することである。

と主張している。

そのため教材 (教科書) は

- (1) 英語の構造を中心としたもの。
- (2) 連続する対立の小さな段階 (successive small steps of contrast) を経て指導されるよう配慮されたもの。

(3) 指導される教材内容が、現実の場面に密着していること、あるいは、Chart でまに合うように用意されていること。

(4) 1時間に導入する新教材が5～6項目におさえられたものであること。

(5) 日本語と英語との比較研究がなされ、日本人が学習するのに特に困難な部分が英語の contrast を通じて容易に学習できるようになっていること。

などの条件を満たすものであることが望ましい。こうして作られたのが *New Approach to English* であった。

Oral approach の理論にしたがい、*New Approach to English* を用いての実践研究に参加できたことは幸せであった。山家先生の作られた *Teachers' Guide* を用いて授業を進め、その Technique を習得すること。そして生徒の英語の学力を向上させることができることが夢であり、希望であった。このことに全力を打ち込んだ。Oral approach の正しさを証明するのは、理論を説くことではない。自分の実践を通して、教えた生徒の学力の向上を通して証明するのである。そんな意気込みであった。ELEC の準研究協力校、あるいは研究協力校（小千谷中学校）で、山家先生から直接のご指導をいただいた。またその折に、英語学習指導法の講習会を開催したりした。そして6年目の現在、若い教師達が Oral approach の研究に意欲的に参加しているのは實に頗らしい。

授業は必死の勝負である。教師と生徒が全知全能をしほることによって、一種の感動が流れる芸術品である。良い授業とはそんなものだと感じようになった。良い授業にはコツがある。より良い授業を求めて、私が ELEC の山家先生、松下先生から学びとさせていただいたコツを述べてみたい。

(1) 授業開始のベルは、授業開始のベルである。（ベルは教務室を出発する合図ではなくて、教室で授業が開始される合図なのである。）

(2) 良く学習し、良く練習したことは、良くできるようになる。またそうさせるのが学習指導である。(良く暗唱するためには、暗唱する練習が必要である。良く書くためには、書く練習をしなければならない。)

(3) Concentration と Participation. (授業にとって一番大切な要素は、全生徒が注意力を集中して、熱心に学習活動に参加することである。)

(4) Written test の採点は教師がする。答案を交換して行う相互採点、自分で採点する自己採点などがあるが、学習指導のためには、教師の採点が有効である。)

今述べたコツは何の変哲のない平凡なものである。しかし、平凡なことを当然のこととして実行する中に真理が存在するのかも知れない。

*New Approach to English* は今年度で絶版だそうである。そこで、この教科書の果した役割を述べてみたい。

英語教育界に対しての大なる貢献として、

(1) 英語の教科書の編集の仕方、特に教材の選択・配列に対して大きな影響を与えたこと。

(2) 英語教師に、英語教育とは何んであるかを深く考えさせた。また1時間の授業のあり方、展開の仕方を考えさせたこと。

(3) 英語の新鮮な表現、自然な英語を教材としたこと。

などがあげられよう。

(p. 24 よりつづき)

(3) 英語の教科書は暗誦しやすいものであるか、構造上の gap (差異) は少ないのであるか、内容は記憶に残るような話題か、文はできるだけ基本的な文で、生徒の生活経験に密着しているようなものか、そして使い易いかどうか。

(4) 教養的目的をも達成しうるようなより理想的な教科書ができるものだろうかということ。

(4月1日以降武藤陽一氏は佐賀市立城西中学に勤務しております。)

*This is one solution to the word game found on page 51. There may be others.*

HEAD

HELD

HOLD

FOLD

FOOD

FOOT



# 日英語の比較

## —時制と相について—

OTA, AKIRA

太田 朗

### 3. 日英語の時制と相の意味

3.1. Chomsky (1957) に次のような趣旨のルールがある。

Aux → Tense(M) (perfect) (progressive)

M というのは shall, will, can, may, must などのいわゆる法助動詞, perfect は 'have+en' (en は過去分詞屈折の代表), progressive は 'be+ing' という形で具現化される。()はそれを選んでも選ばなくともよいということ。Tense は過去形かいわゆる現在形のいずれかになる。未来の意味は法助動詞とか be going to とかにより示す。Chomsky (1957) では Aux の相棒は単一の V (動詞) であるとされていたが、今日ではそれは VP (動詞句), もしくは NP+VP 全体, もしくはそれを支配する S (proposition ともよばれる) であるとされている。どれをとってもこれから述べることに実質上かわりはない。これから述べることの中心は M を除いた Aux の構成要素のそれぞれの意味である。そしてその意味は、その相棒となる V もしくは VP もしくは S とからみ合っている。以下では上述の Chomsky ルールの Tense を Tense<sub>1</sub>, Perfect を Tense<sub>2</sub> とよぶことにする。

言語表現の中には、本質的に話者とか聴者が誰であるか、その場所がどこであり、話している時が何時であるか決らないと何を示すかが決らないという意味をもったものがある。I, you, he などの人称代名詞, this, that here, there など, now, yesterday, next Monday, tomorrow, today, two years ago などの時の表現, come, go, take, bring などの動詞などがその代表的なものである。それに対し President Nixon とか in Tokyo とか in 1921 とか, walk, eat などというのは、話者が誰であっても、話している場所がどこでも、話している時がいつでも、示しているものにかわりはない。今年1月ハワイ大学で開かれた Pacific Conference on Contrastive Linguistics and Language Universals で "A Questionnaire for Analyzing Systems of Deixis" と題して1時間にわたって行なわれた Fillmore の講演は、

話者、聴者の役割に関連するこのような問題（これを deixis という）をとりあげて広汎な言語にわたって調査し、その分類法を試みたものであるが、その中にはたとえば behind the tree というのは、話者がその木のどちら側にいるかに従って指す場所が決ってくるが、behind the car というのは、car 自体に前後があるから、話者がどこにいても指す場所は一定である、というような興味ある観察が多く含まれ、「deixis」の問題は上述の典型的なそうした表現以外に、相当広汎な問題を含んでいることを窺わせた。

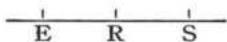
さて Tense<sub>1</sub> のあらわす意味は、話者の話している時に関連してはじめて規定できるという意味において deixis の一種である。話者の話している時 (Speech time) に関連して、ある出来事がそれより前であるか、それと同時であるか、それより後であるかということを示すのが Tense<sub>1</sub> の本質的な意味で、Speech time に refer するという意味で Tense<sub>1</sub> は Reference time を示すという。もっとも refer されるのが話者の時でなくて、聴者の時である場合もある。正月用のテレビ番組を暮の間にビデオでとるような場合は、視聴者が聞く時を予想して時制をえらぶべきであろう。従って話者の時 (encoding time) でも聴者の時 (decoding time) でもない、中立的な coding time といった方がよいという意見もある。話す場合でなく、書く場合を考えるとこの配慮は更に必要であろう。しかしここでは普通用いられている Speech time という用語を用いることにする。

Tense<sub>2</sub> (完了型) のあらわす意味は、その出来事が Reference time より前であるか否かということで、以下ではこのことを Tense<sub>2</sub> は Event time を示すという<sup>1</sup>。

今通例行なわれているように、時間を線で示し、前後関係を線上の左右の関係で示して、たとえば過去完了形の意味を図で示すと次のようになる。S は Speech time, R は Reference time, E は Event time の略であるが、

1. Speech time, Reference time, Event time の考え方 Reichenbach (1947) に負うものである。Coding time については Allen 1966, Kajita 1968.

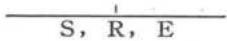
R は S に先立ち, E は R に先立つ. I had written a



letter by then という文の意味は、「私が手紙を書く」という出来事の時 (E) が, then という R に先立ち, then が S に先立っているということである。現在完了形の意味は下図のように S と R とが同時であるといふ

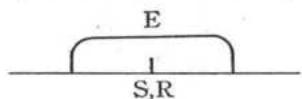


こと, E が R に先立つということである。従って I have written a letter yesterday のように R が S に先立つことを明らかに示す時の表現と共に用いられない。単純現在形 (例. I know him well) の意味は、下図のように S と R と E とがすべて同時であるということである。



以下(13)から(20)までにわたって、色々な時制と相の意味を、例文、用いられる動詞の種類、上に示したような図とともに示してある。この図の中で E が継続的であることを示すのに点でなく線を用いてある所がある (15a, 16a など)。また E が一回限りでなく、繰返されることを示すのに、E の点をいくつか並べて示した所がある (13c など)。

進行形の本質的な意味が何であるかについては必ずしも意見が一致していない。その主な意見、及びその批判については Ota 1963 参照。ここで用いられている進行形の図は次のようなものである。この図は、I am writing a letter を例にとると、S と R は同時 (現在



時制だから), そして「私が手紙を書く」という出来事 E の眞実性が R の所で最高に達し、その前後で落ちるということを示す。Joos (1964) は進行形の意味を「陳述の一時的眞実性」(temporary validity of predication) と規定したが、この図はそういうことを示す。

以下の(13)から(20)までについてなお若干の注が必要である。この注の中のあるものは(21)から(24)についても当てはまる。

'Now' というのは、Speech time を含み、過去、未来のどちらか、もしくは両方と境を接している時間領域で、その長さは随意である。しかしその極限概念とし

て、限度のない now, つまり過去、未来と対立せずに無限に広がるというものを考えうる。別のいい方をすれば、この場合は Speech time を云々することは意味がなく、従って Reference time も意味がないといえるかも知れない。このような場合は、陳述はあらゆる時を通じて眞実である、時を超越している (timeless) ものとなる。時を超越した陳述には通例現在時制が用いられる。現在完了形、現在進行形も現在時制であるから、時を超越した発言に用いられるが、これはきわめて限られている。下記(13d), (15c), (17d) 参照。

出来事がくりかえし行なわれたか否かを示す [±repetitive] というのは、時制の問題だけではなく、主語の名詞句、目的の名詞句、副詞など色々の要素のからみ合いで決って来る。時制に関する限りでいえば、I say, I promise などのいわゆる 'performative' な表現と、主語と動詞が倒置する感嘆文的 Here comes the man, Pop goes the weasel<sup>2</sup> などを除くと [-stative] な動詞の単純現在形は、現在の瞬間における单一の ([±repetitive] な) 出来事を示すことは余りない (13b 参照)。もっとも野球の実況放送などで、He runs, looks up, and catches, and the side retires. のようなのはある。単純過去形は、単純現在形と異なり、[-stative] な動詞でも [±repetitive] どちらも自由に示せる (14b 参照)。

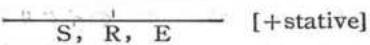
単純現在形または進行形が未来を示すことはあるが、これは [-stative] な動詞の一部に限られていることも注意する必要がある。これについて Jespersen は、「未来のことをいうのに現在時制を用いるのは、予言につきものの不確かさをいわば無視して、何かが本当に現在起こっているというのではなく、確實に起こるといっているだけなのである。現代英語では will と shall が広汎に用いられ、そして多くの場合に必要とされるから、主動詞の単純現在形は『未来のことが既に決っているプログラムの一部と考えられる』(Palmer, Gr. 144) 場合を除いては、未来を示すのに用いられることが多い。従って、たとえば 'Tomorrow it rains' などということは不可能である」(MEG IV, p.21)。特に [+stative] な動詞については、その単純現在形は、そういう状態が既に現在存在していることを示すのであるから、未来のことをいうのに使われることはない。日本語の [+psych] な動詞は [-stative] であるが、それに対

2. このような文は、否定詞が前に出たための倒置 Never did he visit the place などと異なり、助動詞が用いられない。Here has the man come, Here does the man come などはいけない。

応する英語の動詞は [+stative] なので、この点で特に困難な問題が生ずる。

(13) 単純現在形

- a. 現在の状態 I know him.



- b. 現在の出来事 (单一)

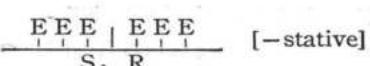
I say he is honest. Performative

Here comes the man. Exclamatory

\*He learns the new word right now.

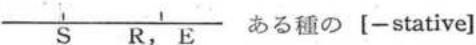
\*At this moment I write a letter.

- c. 繰り返し I go to church every Sunday.



- d. Timeless Dogs are faithful animals.

- e. 未来 He comes tomorrow.



\*He understands it tomorrow.

\*The letter is written tomorrow.

\*It rains tomorrow.

(14) 単純過去形

- a. 過去の状態 I knew him well.

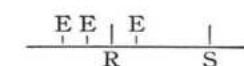


- b. 過去の出来事

单一 I wrote a letter yesterday.



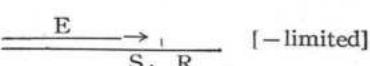
繰り返し In those days many people died of hunger.



(15) 現在完了形

- a. 現在までつづいている状態・出来事

I have known him for ten years.



I have lived here for two years.

\*I have written the letter for two hours.

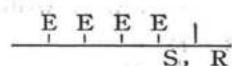
- b. 現在までつづいている時間領域内の出来事 (單

一, 繰り返し)

I have already written a letter.



Many people have died of hunger in the last couple of years.



\*I have written a letter yesterday.

c. Timeless

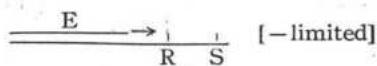
You've not lived until you've got a couple of daughters.

You've defined it when you've found the necessary criteria.

'Flops,' he said, 'who hasn't known them hasn't played.'—Steinbeck (失敗, そいつを経験しなかったような人間は, 芝居をやったとはいえないのだ, と彼はいった。)

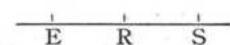
(16) 過去完了形

- a. 過去の一定時までつづいた状態, 出来事  
I had known him for ten years by then.



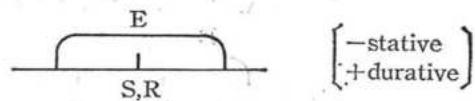
- b. 過去の一定時以前の出来事

I had written a letter by then.

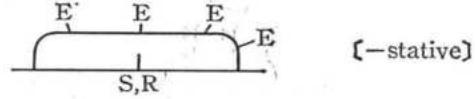


(17) 現在進行形

- a. 単一の出来事 He is writing a letter.

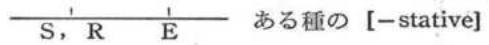


- b. 繰り返し He is always writing letters.



People are dying every day.

- c. 未来 He is coming tomorrow.

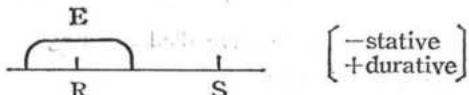


- d. Timeless

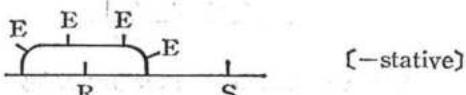
If you do this, you are shooting two birds with one stone.

(18) 過去進行形

- a. 単一の出来事 He was writing a letter.



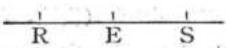
- b. 繰り返し He was always writing letters.



- c. 未来(過去から見た)  
He was coming tomorrow.<sup>3</sup>

ある種の [-stative]

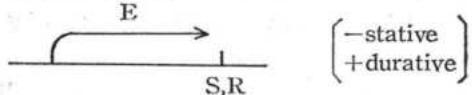
? He was coming the next day.



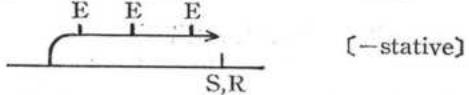
(19) 現在完了進行形

- a. 単一の出来事

I have been writing a letter for two hours.



- b. 繰り返し Many people have been dying.

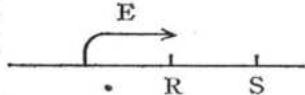


- c. 未来 He has always been coming, but has never come. ある種の [-stative]

(20) 過去完了進行形

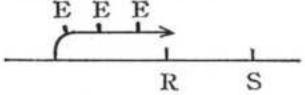
- a. 単一の出来事

He had been writing a letter till then.



- b. 繰り返し

He had been writing letters till then.



3.2. 当面の問題である時制と相に限って §3.1 のはじめにあげたルールのようなルールを日本語について示せば、次の通りになる。

Aux → (resultative) Tense

Tense には過去形(ta)と非過去形(ru)とがある。ta,

ru は代表形で、実際には tu は da となってあらわれることもあり (tonda 'jumped'), ru は u となってあらわれることもある (tatu). このような代表形を用いるのは、英語の過去屈折形の代表として ed, 過去分詞屈折形の代表として en を用いたのと同様である。結果形というのは tabete iru, tabete ita のイタリックの部分に相当し、英語の進行形が 'be-ing' であらわされるのと同様 te+i であらわせる。これを進行形とよんでもよいかも知れないが、進行はこの形のあらわす意味の一部にすぎない (後述(23)参照) ので、結果形とよぶことにする。形の上からいうと、英語と日本語とで Aux の中の構成要素の並べ方が鏡にうつった像のように逆になっていることに気付くが、これはこの場合だけに限らず、おしなべて日英両語の基本的違いである。

日本語には Tense と称せられるものが一つしかない。独立文の定動詞形としては日本語の Tense は、通例出来事が Speech time より前であるか否かの区別を示すが、本稿ではふれなかつたが従属文などにおける ta, ru の用法を見ると、日本語の Tense の区別は、英語の Tense<sub>2</sub> の区別により近い。日本語の Tense は、出来事が「ある時」より前に起つた否か、つまり Event time を示すものであって、独立文の定動詞形の場合は、たまたまその「ある時」が Speech time になるということなのであって、英語の Tense のようにもっぱら Reference time を示す形は日本語にはない。従つて「過去形」「非過去形」という名称は適当でないかも知れないが、これが一般的に用いられているようなので、それに従つておく。

下記(21)から(24)までは、日本語の時制と相の各々の意味を、例文、用いられる動詞の種類、意味の図式表示とともにかかげたものである。この図式表示は、英語のそれと同じ方式によっているが、一つだけ異なるのは、(23), (24)で用いられている E から発している波線である。これは「そのEの結果」ということをあらわす。

(21) 単純現在形

- a. 現在の状態 Tukue ga kokoni aru.



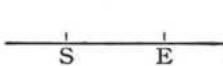
3. 次の Jespersen の言参照。「次のような場合には、表面にあらわれていない主动詞におんぶしている奇妙な過去形の用法が見られる。たとえば誰かが 'I am going to Bristol on Thursday' といったとする。しばらくして私は彼が行くことは思い出したが、何時だったか忘れてしまって、'What day were you going to Bristol?' (What day did you say you were...) と尋ねる。」(MEG IV, p. 155).

Watasi wa John o sinzuru. [+psych]

注: [+psych] の場合は、一人称の主語の平叙文か、二人称の主語の疑問文に限られるようである。  
Mary wa (kitto) John o sinzuru. のようなのは、この場合でなくて、むしろ次の b. の場合である。

b. 未来に必らず起るという確信<sup>4</sup>

Kyoo taberu.



[+stative]  
[+durative]  
を除くあらゆる動詞、形容詞. copula 表現.

\*Kinoo taberu.

Asu wa samui.

\*Kinoo wa samui.

Asu wa undokai ga aru.

c. 繰り返し



[−stative]  
[−psych]  
および iru, aru.

Mainiti kyookai ni ikimasu.

Mainiti no yooni undookai ga arimasu.

d. Timeless

Inu wa tyuuiztu na doobutu da.

注. [-stative] の否定は、現在や未来の状態を示すが、過去の状態は示せない。

\*Kinoo wa samusoo ni mienai.

\*Kinoo wa syusseki dekinai.

Asu wa samusoo ni mienai.

Asu wa syusseki dekinai.

[-stative] の否定は、過去のこととも示せる。<sup>5</sup>

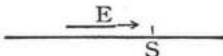
John wa mada sinanai. 'John has not died yet'

もしくは 'John will not die yet.'

(22) 単純過去形

a. 以前の状態

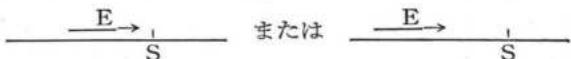
Isu wa kinoo kara koko ni atta (ga, moo nai).



[+stative]  
[+durative]

Isu wa kinoo kara koko ni aru (\*ga, moo nai).<sup>6</sup>

John wa 2nen mae kara yowakatta. 'John has been/had been weak for two years.'

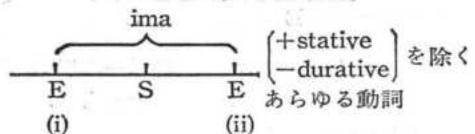


b. 以前の出来事

i. Ima tabeta. 'I have just eaten.'

ii. Ima taberu. 'I will eat now.'

Kinoo wa samukatta.



c. 現在、未来のことと既に決ったことの一部として覚えているべきだったのに、忘れてしまったことを思い出した時。

Asu wa undookai ga atta. [+stative]

Asu wa isogasikatta.

cf. (18c) He was coming tomorrow.

注 1. (省略された) 一人称主語をもつ平叙文および(省略された) 二人称主語をもつ疑問文においては [+psych, -durative] な動詞の単純過去形は、しばしば英語の単純現在形に相当する。この場合英語の単純現在形は大抵たいした意味の違なしに現在完了形におきかえうる。そして日本語の ta が英語の完了形に近いことを想起すべきである。

Odoroita 'I am surprised.' (You've surprised me.)

Tukareta. 'I am tired.' (I've got tired.)

Wakatta. 'I understand.' (I've understood.)

Omoidasita. 'I remember.' (I've remembered it.)  
Komatta. 'I am at a loss.'

注 2. Vta 形は、即座に反応することを要求する命令の意味で用いられることがあるが、これは法と関連して考えるべきである。

Doita, Doita.

(23) 現在結果形

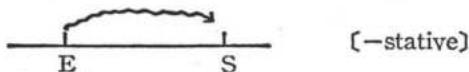
a. 以前の出来事の現在、未来における結果。

4. 一人称主語の平叙文もしくは二人称主語の疑問文では、 [+purposive] もしくは [+self-controllable] な動詞の単純現在形は、しばしば主語の意志、決心、約束を示す。これは (21b) の延長と見なせる。というのは、話者がある出来事が未来に起るという確信を表現することは、そのことが話者によって左右できることである限り、話者がそのことをやる意志がある、決心があるということの表明になるからである。Raisyuu okane o okurimasu.

5. これは John wa mada sinanai が...sinde inai から派生することがあると考えれば説明がつく。 [+stative] は te iru 形で用いられず、 [-stative] は用いられるからである。

6. a. の 2 つの文の図式的表示はどちらも同じように見えるであろうが、ga, moo nai をつけると、...koko ni atta の方は OK であるのに對し、...koko ni aru の方は矛盾した文になる。ただし Isu wa kinoo kara koko ni atta という文は、椅子が現在まだ眼前にある場合にも使える。

John wa kyonen hon o kaite imasu.



[ -stative ]

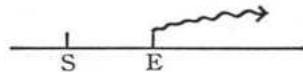
[ -stative ] が単一の出来事を示す場合  
[ -durative ] はいつも a.

John wa sinde imasu.

John wa imamade ni 2zikan mo aruite imasu.

Hara ga hette imasu.

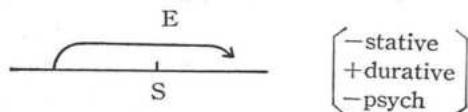
Myootyoo 5 zi niwa tootyaku site imasu.



#### b. 進行中の出来事

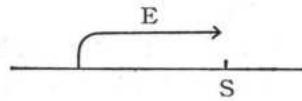
上述 a. の説明でいう「以前の出来事」というのは、出来事全体であってもよいし、出来事のはじまりだけで、そして出来事が現在まで続いているてもよい。前の場合が a. で取り扱われた場合で、後の場合は英語の進行形に相当する。

John wa ima hon o yonde iru.



[ -stative  
+durative  
-psych ]

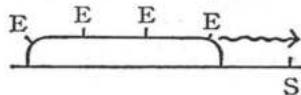
Imamade 2zikan tegami o kaite iru.



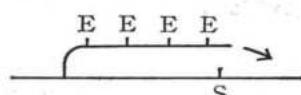
#### c. 繰り返し

单一でなく、一連の出来事の場合には、その一連の出来事全体を [ -stative, +durative ] と見なすこともできる。従って「以前の出来事」は一連の出来事全体でもありうるし、一連の出来事の中の最初のものでもありうる。前者は上述 a. に相当し、後者は b. に相当する。

Sensyuu wa ooku no hito ga sinde iru.



Mainiti no yooni ooku no hito ga sinde iru.



#### d. 現在の状態

Kimi wa otoosan ni nite ita.



[ +stative  
-durative ]  
または  
[ +psych ]

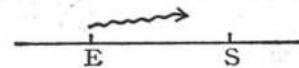
Boku wa kimi o sinzite iru.

Mary wa kimi o sinzite iru.

#### (24) 過去結果形

a. 過去におけるそれ以前の出来事の結果

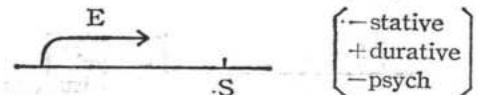
Watasi wa sono zenzu ni hon o kakiowatte ita.



John wa sinde ita.

b. 過去のある時における進行中の出来事

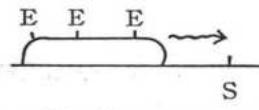
Watasi wa sono toki hon o kaite ita.



[ -stative  
+durative  
-psych ]

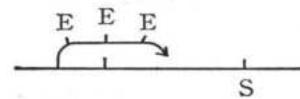
#### c. 繰り返し

Sono zennen ni ooku no hito ga tugizugi to sinde ita.



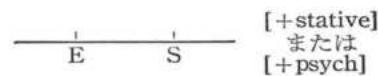
cf(23c)

Sono toki takusan no ressya ga tugizugi to tootyaku site ita.



#### d. 過去の状態

John wa otoosan ni nite ita.



[ +stative  
または  
[ +psych ]

Kimi o sinzite ita.

#### 4. 比較

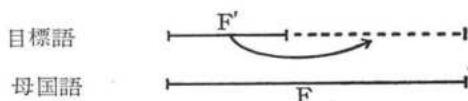
4.1. 比較は英語をもとにして日本語をこれと比較することもできれば、その逆も可能である。つまり英語の形を一つずつあげて、これに相当する日本語の形を求めて行くことも、その反対を行なうことができる。もし対応が一対一であれば一方からもう一方への転移 (transfer) は容易であるが、これはきわめて稀で、通例対応は一对多である。英語のある種の強制的範疇は、日本語では強制的範疇としては欠けていて、こうした場合は著しい困

難点となる。名詞(句)における数とか「定、不定」の範疇は、英語にあっては強制的範疇であるが、日本語には欠けている例で、それが日本人にとっていかに困難かはよく知られていることである。

私は日本語をもとにして英語の対応を求めて行くという方向をとった。これは Joos (1961, p. 13) の次のような見解による。

「[これから学習しようとする外国語の構造と学習者の母国語の構造との]二つの中で、母国語の構造の方が教育にとっては重要である。理由は、母国語構造全体は、常にそこにあって、磨擦を起すきっかけとなるのに対し、外国語の構造の方は、ばらばらにとり扱いうるからに他ならない。」

比較は何を目標とするかについても色々な意見がある。Kleinjans (1959) は、難易度を測定しようとし、そのため FMD (Form, Meaning, Distribution の略) という計量のための尺度を用意した。難易度の測定ではなくて、どんな種類の誤りが起りうるかという予測を目標とするものもある。きわめて素朴に困難点を指摘しようとするだけのものもある。本稿は、誤りのタイプの予測、それも「過度の一般化」(overgeneralization) による誤りの予測をしようとする。「過度の一般化」とは次のようなことである。通例母国語のある形 F に対し、目標語(学習しようとする外国語のこと)ではそれに相当するいくつかの形があり、その各々は F の意味領域の一部と重なり合っている。そこでこの部分的対応を学んだ学生は F の意味領域をもとにして、この正しい対応関係を、対応関係が存在しないような領域にまで拡大しようとする。これを「過度の一般化」といったのだが、この誤りはきわめて自然のように思われる。図示すると次のようになる。目標語のある形 F' は母国語のある形

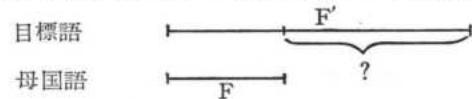


F の意味領域の一部と重なり合っている。その重なり合った部分の知識をもとにして学習者は F' の意味領域を点線で示した所まで不適に拡大して考えるというわけである。

「過度の一般化」の例として私がよくあげるのは You are welcome の意味領域を「どう致しまして」をもとにして不適に拡大した例であるが、これは何回か別の所で述べた(たとえば大修館『英語教育』1968年10月号, p. 3)ので、別の例をあげる。大学の理学部を出てあるアメリカの大学に留学することになった学生が、提出する英語の書類を見てくれともって来たが、その中に 'The

progress of nuclear physics in the coming years is due to the future development of mathematics' というような文があった。この場合は is due to は depends upon とか is dependent upon とかにしないといけないわけだが、誤りのもとは「～による」という日本語が is due to にも depends upon にもどちらにも使えるという所から来ている。これを書いた人は「～による」と 'be due to' と正しく重なり合う場合を知っていて、「～による」の意味領域をもとにして、be due to の意味領域を不適に拡大したわけである。「～による」という日本語が誤りの原因であったことは、これを書いた本人に直接確かめたことである。「過度の一般化」は、学習者がある程度の知識はもっているが、全貌は知らない場合に起る。これは自明のことであって、何も知らない人は、「過度の一般化」に起因する誤りをおかす危険性もなければ、そもそもどんな「誤り」もおかせないはずである。

「過度の一般化」の反対は「過少一般化」(undergeneralization) と称すべきもので、これに最初に筆者の注意を向けてくれたのはハワイ大学の Whitman で、彼が東京教育大の英語学講話会で話した際である。「過少一般化」というのは、母国語のある形 F が目標語の F' に相当することを学んだ学習者が、F が F' の意味領域の一部としか重なり合わないため、F' の意味領域全部を利用しない場合をいう。つまり下図の F' の意味領域の



中で? のついた部分を用いないという結果になるわけである。「過少一般化」は、目標語で許されている可能性全部を十分利用しないという結果になるので、表面だった誤りの形となってはあらわれない。「過度の一般化」と「過少一般化」とは、盾の表裏であって、一方の方向に「過度の一般化」があれば、その逆方向に「過少一般化」があるといえる。

比較は本来ならば一つ一つ項目をあげて対応関係を述べるわけだが、以下では、特に目立つ相違点だけを指摘し、その際「過度の一般化」に起因する誤りのタイプを予測しようとする。

4.2. 日本語では [+stative, -durative] 以外の動詞、形容詞、copula 表現の単純現在形は、話者がそのことが起るということに確信をもっていれば、未来のことを示しうる (cf. 21b.). しかし英語の単純現在形は、ごく限られた動詞表現しか未来のことを示し得ない (cf. 13 e.). 特に英語の [+stative] の単純現在形は未来のこと

を示せない。そこで英語を学んでいる日本人は、「過度の一般化」により、(25)の星印のついた文を用いる危険性があり、逆に日本語を学んでいる英語国民は、「過少一般化」のために、(25)の星印のついた英語の文に相当する日本語の文で単純現在形を用いるのを避けるであろう。

(25a.) の比例式まがいは、「過度の一般化」の働く過程を図式的に示したもので、この左辺はここでは一例しかあげてないが、かなり多くの同様な例があって、それが「一般化」の支えになっていることはいうまでもない。(25b.) は(25a.) を略式であらわしたものであって(26)以下ではもっぱら略式表示を用いることにする。

(25) J simple present—E simple present, future

- a. *Kare wa asu kimasu.*: He *comes* tomorrow. = *Setumei sureba kitto wakarimasu.*: \*If you (will) explain it, he surely *understands* it.
- b. He *comes* tomorrow. → \*If you will explain it, he surely *understands* it.  
→ \*Some day he surely becomes a fine player.  
→ \*Some day he is loved by everybody.  
→ \*It is cold tomorrow.

表 3 J present resultative

J	E
a. action in progress: [-stative, -psych] If [-durative], then the event is repetitive.	1. present progressive: [-stative] 2. present perfect progressive: [-stative] If [-durative], then repetitive
b. result: [-stative] A single event with a [-durative] verb is always b).	3. present perfect 4. simple past
c. present state: [+stative, -durative] 又は [+psych]	5. simple present: [+stative]

(27) a. 1 → 2

*I am reading* this book now. → \**I am reading* this book for the last two days.

A good many people are dying nowadays. → \*A good many people are dying in the last several years.

b. 1 → 3

John is reading the book. → \*John is departing. (for 'John has departed.')

4.3. 大きな困難点の一つは、英語の過去形と完了形の区別で、日本語には Tense は一つしかないから、日本語の一つの範疇が英語の二つの範疇に対応することになる。通例英語の過去形と日本語の ta 形の対応が、英語なら完了形が適当な所にまで過度に一般化される(26a)。

また日本語の [+stative, +durative] な動詞、形容詞、copula 表現の単純過去形は、英語の単純過去形、および過去完了形に相應する(22a. の 3 番目の文参照)ので、「過度の一般化」はその一方から他方に働く(26b.)。

(26) J simple past—E past, perfect

- a. She was a student a few years ago. → \*She was a student for the last few years.
- b. She was sick last year. → \*She was sick for two years by then.

4.4. 下記表 3 は(23)で述べたことをまとめ、それに相應する英語の形をあげたものである。表 3 で、日本語の a は英語の 1, 2 に、日本語の b は英語の 3, 4 に、日本語の c は英語の 5 に相当する。「過度の一般化」は理論上、英語の欄のどの二つの項目をとっても、その相互間に働く。3 と 4 との間の混同は既に § 4.3 で扱われたので、(27)では、その他の問題点を可能な誤りのサンプルとともにあげる。

c. 1 → 4

He is reading the book. → \*He is visiting Japan in 1921. (for 'He visited Japan in 1921.')

d. 1 → 5

John is reading the book. → \*John is resembling his father./\*John is belonging to this club.

c. 5 → 1

John resembles his father. → \*John reads the book. (for 'John is reading the book.')

f. 2 → 3

The trains have been perpetually arriving. → \*The train has been arriving. (for 'The train has arrived.)

He has been reading the book for two hours. → \*He has been belonging to this club for two years.

g. 3 → 2

He has already written the letter. → \*He has written the letter for two hours. (This is especially difficult because the compatibility with *for* expressions is dependent upon [±limited].)

h. 2 → 4

A good many people have been dying in the last two years. → \*A good many people have been dying in 1921. (for 'A good many people died in 1921.')

i. 3 → 5

He has departed. → \*He has known me. (for 'He knows me.')

J. 5 → 3

He knows me. → \*He masters English. (for \*He has mastered English.)

(27a)–(27c)の反対の一般化、すなわち2→1, 3→1, 4→1は起りそうにないと思われる。というのは現在進行形が完了形もしくは完了進行形よりも前に教えられるのが普通だから、te iru の形は英語の進行形と先ず結びつけられるからである。

最後に日本語を学んでいる英語国民のおかす誤りの例として次の文をかかげる。これは日本語を学んでいるアメリカの大学生の作文の中からとったものである<sup>7</sup>。

Kare wa byooki ni natte isya e ikimasita. Asoko de kare wa gan ga atte, *sinde iru* no o narai masu. 'He became sick and went to the doctor. There he learns that he has cancer and has died / is dead.' (for '... is dying')

この文は黒沢明監督の「生きる」という映画を見ての感想文である。「生きる」というのは、市役所か何かの凡々たる小役人が、ある日医者にがんであと半年くらいしか生きられないとつげられる。そこで彼は非常に悩み、自分の一生をかえりみ、何ら意味のあることをしなかったことに気付き、せめて死ぬ前に一つだけでも有意義なことをしようと懸命になって子供のための小公園をつくり、満足して死んで行くという筋である。上の日本文には3カ所誤りがある。asoko de は sokode (つまり

「医者の所で」の意) としなければいけないし、最後の *naraimasu* は *sirimasu* にしなければいけない。しかし、今問題になるのは斜字体にした *sinde iru* という部分で、これは(3)の表の b の所に書いてあるように「[–stative, –durative]の動詞が单一の出来事を示す時はいつもそのことの結果」を示すので、その場合の英語の対応表現は完了形もしくは過去形になる。つまり *sinde iru* は、单一の出来事を示す場合は *has died* に相当するので、*is dying* に相当することはない。(单一の出来事でなく、くり返しの時、たとえば「多勢の人が毎日死んでいる」なら *are dying* に相当しうる。cf. (3)の表の a.) 所がこのアメリカ人の学生は進行形に相当するのは *te iru* であると習い、英語の進行形の意味領域をもとにして *He is dying* に相当するのは *Kare wa sinde iru* であると不當に *te iru* の領域を拡大したわけである。

最後に、ちょっと脇道にそれるが、英語の [+stative] の単純現在形、進行形、完了形、いわゆる「状態受動形」には次のような共通な点がある。

1) これらは命令文に用いられない。また tell NP to V, try to V, be able to V などの V の位置に用いられない。

2) これらは seem to V の V の位置に用いられるが、单一の出来事を示す [–stative] はそこでは起らない。くり返しを示す [–stative] は起りうる。これは seem が深層で名詞句補文を主語としてとることを考えれば理解できることである。(13)で示したように独立文の定動詞が [–stative] である時はその単純現在形が單一の出来事を示すことは通例できない(13b)のに対し、くり返しの方はよい(13c)のだから、独立文におけるこのような制限が名詞句補文となってはめ込まれた時にもそのまま存在しているわけである。I wish のあとにはめ込まれる文の定動詞にも、実質上同じような制限が存在する。

He seems to/have come/be coming/be honest/know it/come here every day.

\*He seems to come right now.

I wish he/owned a new car/were coming/had arrived there/knew it/arrived there on time every day.

\*I wish he arrived there.

3) Already と yet は完了形は勿論だが [+stative]

7. この例はプリンストン、ハーバードに4年間日本語を教えた梶田優氏の蒐集したアメリカの大学生の日本語の作文集の中から借用したものである。

な動詞、「状態受動態」、進行形と共に自然に用いられる。しかし [-stative] な動詞の単純形は、單一の出来事を示す場合は、already と共に起らぬようである。この点について Ota 1963, p. 88.

He already knows it. He is already coming.

He does not know it yet. He is not coming yet.

The door is already shut. (「閉じている」の意の場合、「ドアは既に閉じられる」の意ではない)。

? He already comes home.<sup>8</sup> ? He already came home. ? He does not come home yet.

日本語の現在結果形が、表 3 で示したように英語の完了形、[+stative] の単純現在形、進行形に相応するものは、上述のことを考えれば、決して偶然ではない。

Traugott-Waterhouse(1969) は、already はPERFECT という feature を有する文に起こると説明できると主張しているが、その中で already は「動作、状態が既にはじまっていること」(completed initiation of action or state) を示す何かを文中に必要とするとして述べている。この「動作、状態が既にはじまっていること」というのが、完了形、[+stative] の単純現在形、「状態受動態」、進行形が共通にもつてゐる意味であって<sup>9</sup>、これが(23)で Vte iru の根本的意味として考えられたものである。

## 5. テスト

5.1. 実際の誤りには色々の要因がある。單なる不注意、誤った、もしくは不充分な教授、目標語自体の内部に働く「過度的一般化」など。従ってある特定の誤りについて、何がその原因であるのかをつきとめるのは容易でない。私は「過度的一般化」が誤りの重要な要因であると仮定したが、ある特定の誤りについて「過度的一般化」だけがその原因であると決定するのは困難である。

従って二言語の比較から誤りを「予測」しようとするのは、できない相談で、できることは既におかされた誤りを「説明」することだけであるという意見がある。「予測」というのは「他の条件が同じなら」という前提に立つが、自然科学の実験と違って、人間相手では「他の条件」は決して「同じで」ないからである。従って次にかかげるテストの結果の報告は、参考までにというくらいのもので、これで私の仮説が検証されたと主張する程のつもりはない。

5.2. 10年程前に私は高等学校の生徒を対象として、私の仮説をためすためのテストをした。テストは50の短文の和文英訳で、一つの困難点につき2つか3つの短文を用意した。また困難な点がないと思われる短文もいくつか用意した。問題になっている時制と相に焦点をあてる

ために、日本文の表現には詳しく英語の注をつけて、生徒はその注の英語を使うように要求された。注の動詞は to のついた原形で与えられ、従って生徒はそれを適當な形に改めて使わねばならなかった。テストは東京教育大附属高校の1年生、2年生それぞれ1クラスに対し行なわれた。(29)は50の和文の中からサンプルとして10題を選んだものである。

(29) 次の日本文の意味を英語であらわしなさい。

注意 1. 注にある英語を必ず使うこと。

2. 動詞は to のついた原形で注に書いてありますから、適當な形に改めて下さい。

1. 僕が説明すれば、彼は多分了解しますよ。

説明する to explain 多分 probably  
了解する to understand

2. 父は毎日曜日教会に行きます。

教会に行く to go to church

3. 彼女は今まで2年間も病気だった。

病気だ to be sick 今まで2年間も for the last two years

4. 僕は昨年は受験準備で大層忙しかった。

受験準備で preparing for the examination  
忙しい to be busy

5. ほんとに疲れたね。もう歩けない。

疲れる to be tired 歩く to walk

6. 彼等は今その問題を論議しています。

問題 problem 論議する to discuss

7. 彼は英語を完全に自分のものにしています。

完全に thoroughly 自分のものにする to master

8. 僕は2時間も手紙を書いていますが、未だ書きおわりません。

書く to write 手紙 letter おわる to finish

9. この親達は子供達を大変可愛がっています。

親 parent 子供達 children 可愛がる to love

10. 彼は1920年と1930年に日本を訪れています。

訪れる to visit

5.3. 表 4 はテストの結果である。今問題になっている動詞形に関する誤りのみを「誤り」として計算した。主語と動詞の呼応とか綴りとかの純粹に形態上の、いわば機械的な誤りは 'Formal' という所に数えられている。

8. 文の前につけた? は、完全に非文法的でもないが、完全に文法的ともいえない、怪しげな文ということを示す。

9. [-stative] の単純現在形の單一の出来事を示す場合と、くり返しの場合との区別もこの点から考へると了解できる。すなわち一連の出来事の場合はその最初の方の出来事は既にはじまっているのに対し、單一の出来事はそうでないからである。

表 4

Question No.	Correct	Errors			Blank
		Formal	Semantic	Miscellaneous	
1.	52 68	0 0	41 9	7 20	0 0
2.	72 48	20 25	7 0	2 27	0 0
3.	52 68	2 5	46 18	0 9	0 0
4.	91 91	0 0	4 2	4 7	0 0
5.	67 70	0 5	22 18	4 0	7 8
6.	87 78	2 0	7 7	4 16	0 0
7.	7 11	2 5	78 68	9 16	4 0
8.	28 66	0 2	66 23	4 9	2 0
9.	76 60	9 13	11 18	2 8	2 3
10.	74 75	2 0	17 18	2 5	4 3
1.			understand(s) 41, 9	to understand is understand must understand	
2.		go	went 7, 0	would go. is used to go	
3.		have been	was sick 24, 2 had been sick 20, 24		
4.			am busy 4, 0 had been busy 0, 2	was to be busy	
5.		tireed, I are	was tired 20, 11		
6.		is discussing	discuss 7, 5	are to discuss	
7.		have mastered has master	masters 70, 64 is mastering 4, 0 mastered 4, 2	is to master	
8.		has been writing	have written 22, 11 am writing 40, 5	am } to write was }	
9.		parents loves	are loving 9, 9 loved 2, 5		
10.			visit(s) 9, 2 has } visit(ed) 2, 14 have } is visiting 2, 0		

正しい動詞形の選択に関する誤りは ‘semantic’ の項下に数えられている。Formal, semantic 両方にまたがる誤りは semantic の方に入っている。その他は ‘Miscellaneous’ である。‘Blank’ というのはその問題について解答なしということ。数字はすべて百分率で示してある。表の下半分に上半分の表のそれぞれの項目に相当する誤りの例があげられている。semantic な誤りについては、各々の誤りの数字もあげてある。そこあげてある 2 つずつの数字は、先のものが 1 年生のクラス、後のものが 2 年生のクラスの数字である。同様に上半分のそれぞれの問題につき、横に 2 行ずつの数字があがっているが、その上の行の数字は 1 年生のクラス、下の行の数字は 2 年生のクラスの成績である。

この表を見ると分るように、問 2 で Formal な誤りが 1 年生で 20%, 2 年生で 25% で、 semantic な誤りの 7%, 0% よりはるかに多いのを除いて、純粹に formal な誤りは semantic もしくは formal-semantic な誤りよりはるかに少ない。これらの生徒は、純粹に形式上の問題はかなりよくマスターしていて、いつまでたっても難しいのは意味上の問題、すなわち前に引用した Kufner のいうように、何時、何故ある形を、他の形を斥けて、選ぶかという問題である。問 2, 問 4 は、意味に関する限りほとんど問題がない、この場合は日英両語がマッチしているからである。問 6 から問 10 までは、te iru に関する問題である。問 6 が易しいのは、おそらく現在進行形が最初に教えられ、それと te iru とが結びつくからであって、そして完了形は完了、継続、結果を意味すると教えられて、Vte simatta/Vta tokoro da, Vte kita, Vta koto ga aru などと結びつくからであろう。ともかくこの表は、「過度的一般化」による誤りの予測がかなり当っていることを示すように思う<sup>10</sup>。

## 6. 結 び

私は § 3.1 および § 3.2 にあげた ルールに示されている時制と相の形に限って比較を試みた。もしこれ以上の構造を考慮に入れたら、更に多くの対応関係が発見でき、その各々の対応のカバーする意味領域はもっと限定されたものになったのであろう。たとえば § 5.3 のおわりの方で、文脈次第で英語の 完了形は 日本語の Vte simatta, Vta tokoroda, Vta koto ga aru, などに翻訳可能であるといったが、それぞれの対応する意味領域は、Vta や Vte iru の場合より、せまく限定されて来る。

純粹に日本語だけの 構造から いうと、Vta koto ga aru というのは、koto という形式名詞を伴なって名詞

化された構造に ga aru がついたので、この場合の Vta は Vru, Vte iru, Vte ita と対立し、Vru koto ga aru, Vte iru koto ga aru, Vte ita koto ga aru も可能であり、最後の aru は atta ともなりうる。koto ga aru というのは、koto の前にはめ込まれた S のあらわす出来事が起こるか、起らないか、どのくらいの回数起こるかということに注意を向ける表現であって、ga と aru の間に yoku ‘often’, sando, tokidoki など頻度を示す副詞を挿入しうる。Vta tokoro da も同じように分析できる。この構造の Vta も、他の 3 つの形 (Vru, Vte iru, Vte ita) と対立し、tokoro da は tokoro datta と対立しうる。tokoro da はその前にはめ込まれた S の示す出来事が Speech time と時間的に近接していることを示す。従って、Vte iru tokoro da は、(23) に示した Vte iru にくらべてはるかに意味領域が限定されて、まさに進行中のことだけを示す。Vte simatta は Vte kuru や Vte iku などと対比できる相を示す形である。これらと Vte iru とくらべると、Vte iru の方がより基本的な形であるといえる。というのはこれらのあとに te iru をつけて、Vte simatte iru, Vte kite iru, Vte itte iru は可能だが、この逆に Vte ite kuru, Vte ite iku, Vte ite simau は不可能であるからである。このような日本語の構造を考慮して、もっとも基本的な Vru, Vta, Vte iru, Vte ita の 4 つを比較の対象としたわけである。

このように、英語と日本語の構造を別々に、そしてパラレルに分析し、その結果を項目ごとに比較するというのは、Fries 1945, Lado 1957, Kleinjans 1959 などの唱えたオーソドックスな方法であって、私はその点においてそれに従ったわけであるが、しかし二言語を別々に組織的に記述するという段階を省いて、一方の言語の項目を順々にとりあげて、もう一方の言語でそれに翻訳上対応する項目を、その構造に関係なく、とりあげるという方法も可能かも知れない。その場合には、完了形の対応形として上にあげた表現はすべて、Vta, Vte iru と同じ立場でとり扱うことになる。このような方法を組織的に試みたことはないが試みて見る価値はあるかも知れない。

さて方法はともかくとして、このような誤りの予測が信頼できるものと仮定して、何か外国語教育に役に立つであろうか。しばしば主張されているように、それは教

10. *Miscellaneous* の中に、数名の同じ生徒がどの問題に対しても、注に与えられている「to+原形」の前に be 動詞の適当な形をつけた解答をしていて、これが *Miscellaneous* の百分率をかなり高くしている。

材やテストの作成に役立つかも知れない。あるいは教授技術を考える上に役に立つかも知れない。私自身は、経験上、上述のような誤りの予測なり説明なりは、生徒がある程度の訓練をつんだ後で——高等学校とか大学の段階で——役に立つのではないかと思う。高等学校や大学の学生がくり返しあかず誤りで、どう見ても目標語と母国語との喰い違いから起こると思われるようなものがある。このような場合には、やみくもに正しいモデルだけをくり返し与えて、生徒が暗黙のうちにルールを探りあてることを期待するより、何故誤りなのかを指摘してやる方が効果的ではないかと思われる。勿論その説明は簡潔で要領よいものでないといけない。英語を覚えるより説明の方が主目的であるような観を呈してはいけない。もしこのように指摘される誤りが、特定の語い項目だけでなく、ある範疇全体に通用するようなものであれば、それに関する正しい知識は、同じ誤りの再発を防ぐというより、同じタイプの誤りの再発を防ぐであろうから、特に有益であろうと思われる。

しかし外国语教育ということを別としても、二国語の比較というのはすこぶる理論的興味のあるものである。「はしがき」で言語普遍性のことを述べたが、仮説としての言語普遍性は多くの個別言語にあたって検証される必要がある。その際日英両語のように歴史的になんらのつながりのない言語にあたる方が普遍性の検証に有効である。またその違いという点をとっても、違っている点がばらばらに記述されるのでなく、違いについても一般論化が可能であれば、これは各個別言語の特徴をいうにきわめて有効であろうと思われる。「英語らしさ」、「日本語らしさ」というのは、英語なり日本語なりを単独で考えていては分らない。それと違う言語と対照することによって、その言語の「らしさ」が浮び上って来るのである。

特に2つの言語が1つの頭脳もしくは頭脳の集団の中で接触した場合は、言語学もしくはその関連分野に興味のある研究分野を提供する。Pikeはこのことを次のような比喩を使って巧みに説明している。

「物理学では、粒子を他の粒子にぶつけることによって、目に見えない粒子の構造に関する多くの知識が得られる。衝撃される粒子におこる変化、衝撃する粒子の変化、あるいは新しい粒子の創成などすべてが、これらの粒子の性質をより十分に理解させる上に役立つ。物理学におけるこの方法は2つの言語もしくはその要素が接触することから、観察者がその両方の構造について学びうるチャンスをうるのはどうしてなのかということを理解するための比喩として役立つであろう」(Pike 1954,

p. 24).

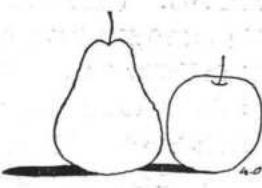
この論考は、このような興味ある領域を探求したささやかな試みである。

#### References

- Allen, Robert Livingston. 1966. The verb system of present-day American English. The Hague, Mouton and Co.
- Bach, Emmon. 1965. On some recurrent types of transformations. Georgetwon Monograph Series No. 18, 3-18.
- . 1967. *Have and be in English syntax*. Lg. 43.2, 462-85.
- . 1968. Nouns and noun phrases. Bach-Harms (eds.), 91-122.
- Bach, Emmon and Robert T. Harms (eds.). 1968. Universals in linguistic theory. Holt, Rinehart and Winston, Inc.
- Berman, Arlene. 1970. Agent, experiencer, and controllability. NSF-24, 203-38.
- CLS/Papers from the nth regional meeting. Chicago Linguistic Society
- Cantrall, W. R. 1970. If you hiss or anything, I'll do it back. 6th CLS, 168-77.
- Elliott, Dale E. 1969. The syntax of the verb 'happen'. WPL 3, 22-35.
- Fillmore, Charles J. 1968. The case for case. Bach-Harms (eds.), 1-88.
- Fraser, James B. 1965. Ad examination of the verb-particle construction in English. Unpublished.
- Fries, Charles C. 1945. Teaching and learning English as a foreign language. Ann Arbor, Mich.: University of Michigan Press.
- Gruber, Jeffrey S. 1967. Look and see. Lg. 43.4, 937-47.
- Joos, Martin. 1961. Linguistic prospects in the United States. Mohrman et al. (eds.), 11-20.
- . 1964. The English verb: Form and meanings. Madison, Wisconsin: The University of Wisconsin Press.
- Kajita, Masaru. 1968. A generative-transformational study of semi-auxiliaries in present-day American English. Tokyo, Sanseido.
- Kindaiti, Haruhiko. 1950. Kokugo doosi no itibunrui 'A classification of Japanese verbs'. Gengo kenkyuu 15, 48-63.
- . 1955. Nihongo doosi no tense to aspect 'Tense and aspect in Japanese verbs'. Nagoya daigaku bungakubu kenkyuu ronsyuu 10.
- Kleinjans, Everett. 1959. A descriptive-comparative study predicting interference for Japanese learning English noun-head modification patterns. Tokyo, Taishukan Publishing Co.
- Kufner, Herbert L. 1962. The grammatical structure

- of English and German: A contrastive sketch. The University of Chicago Press.
- Kuno, Susumu. 1970. Feature-changing rules in semantics. *NSF-24* 1970, 69-89.
- . 1970<sup>b</sup>. Notes on Japanese grammar (Part 1). MLAT No. 24.
- Lado, Robert. 1957. Linguistics across cultures: Applied linguistics for language teachers. Ann Arbor, Mich.: University of Michigan Press.
- Lakoff, George. 1969. On generative semantics. To appear in Danny D. Steinberg and Leon A. Jakobovits (eds.), *Semantics: an interdisciplinary reader in philosophy, linguistics, anthropology, and psychology*. London; Cambridge University Press.
- . 1970. Linguistics and natural logic. *University of Michigan studies in generative semantics* No. 1.
- Lee, P. Gregory. 1969<sup>a</sup>. *Do from occur*. WPL 3, 1-21.
- . 1969<sup>b</sup>. Subjects and agents. WPL 3, 36-113.
- MLAT/Mathematical linguistics and automatic translation. Cambridge, Mass: The Computation Laboratory of Harvard University.
- McCawley, James D. 1969. Semantic representation. Unpublished.
- . 1970. English as a VSO language. Lg. 46.2, 286-99.
- Mohrman, Christine, Alf Sommerfelt, and Joshua Whatmough (eds.). 1961. Trends in European and American linguistics 1930-1960. Utrecht, Spectrum Publishers.
- Muraki, Masatake. 1970. Presupposition, pseudo-cleffing and thematization. Ph. D thesis presented to Univ. of Texas.
- Ota, Akira. 1963. Tense and aspect of Present-day American English. Tokyo, Kenkyusha.
- Pike, Kenneth L. 1954. Language in relation to a unified theory of the structure of human behavior (Part 1). Glendale, Cal: Summer Institute of Linguistics.
- Reichenbach, Hans. 1947. Elements of symbolic logic. New York, Macmillan.
- Ross, John Robert. 1967. Auxiliaries as main verbs. Unpublished.
- . 1968. On declarative sentences. Roderick Jacobs and Peter Rosenbaum (eds.), *Readings in transformational grammar*, 222-72.
- Seuren, Pieter A. M. 1969. Operators and nucleus: A contribution to the theory of grammar. Cambridge University Press.
- Smith, Donald Lewis. 1970. A study of Japanese sentence complement constructions. Ph. D. thesis presented to the University of Michigan.
- . 1970<sup>b</sup>. The utility of ungrammatical sentences in teaching English. *The Bulletin of the Institute for Research in Language Teaching* No. 294, 1-13. Tokyo.
- Traugott, Elizabeth Closs and John Waterhouse. 1969. 'Already' and 'yet': a suppletive set of aspect-markers? *Journal of Linguistics* 5.2, 287-304.
- Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics in philosophy*. Ithaca, Cornell University Press.
- WPL/Working Papers in Linguistics. Ohio State University Research Foundation.
- Whorf, Benjamin Lee. 1937. Grammatical categories. Lg. 21, 1-11. John B. Carroll (ed.), *Language, thought, and reality: selected writings of Benjamin Lee Whorf*, 87-101.

(東京教育大学教授)



# Mother Goose の世界

—雑感的序説(その 8)—

HIRANO, KEIICHI

平野敬一

## 日の下に新しきものなし

アメリカの漫画家 Al Capp (1909— ) の傑作 *L'il Abner* に、わたくしは、戦争まえの子どものころから親しんでいるから、もうずいぶん古いつきあいになる。戦争中の中断はあったが、戦後 *Asahi Evening News* で読めるようになって以来、わたくしは国内にいるときはもちろん、海外にあっても、まず読み落としたことはないように思う。この連載漫画の内容が特別に高級で知的というわけないじ<sup>1)</sup>、作者 Al Capp のどちらかといふと右寄りの政治観もそれほどいただけないし、だいたいこういうものを愛読するのは知識人や文化人の沾券(けん)にかかるかもしれないが、どこか Appalachians の山間部とおぼしき架空の部落 Dogpatch に住むこのヒルビリー (hillbilly) たち、特に中心の Yokum 家の面々の一挙手一投足には、捨てがたい愛きょうと泥くさと天衣無縫性とがあって、とにかく読むことをやめられない。そのうえこの漫画は骨の髓までアメリカ的である。アメリカ文学やアメリカ文化をあげつらう人たちが、どうしてこの典型的にアメリカ的な漫画をもっと問題にしないのか、わたくしは、かねがねふしげに、そして不満にも、思っている——研究書の出ているものだけを取り上げるのが「研究」というのなら、話はおのずから別になるだろうが。

わたくしがこの *L'il Abner* と何十年つきあってもあきないのは、Yokum 家の人たちには安心してみてられる行動や反応のパターンがあり、作者 Al Capp がじつに適確にとらえているそぼくな生木(?)のようなアメリカの genius が、そこにいきいきと描かれているからかもしれない。もちろん長く続いているだけに若干のマンネリ化はまぬがれないし、同工異曲の筋立ても多いし、単純なくくりかえし(たとえば毎年の Sadie Hawkins Day の行事など)もあり、ばかばかしいと思いつながらもわたくしは読みづけているのである。

しかし Al Capp が倦むことを知らず、くりかえし描きづけた世界は、作者のたんなる想像の所産ではな

く、じつはもっと深い、作者の恣意をこえた世界に根を下ろしているという点を見落とすわけにいかないように思う。その世界を<土俗的アメリカ>といつていいかも知れないが、そのアメリカは、地理的な definition としてのアメリカとは異なるのである。もっと広く、イギリスの伝承世界をもうちに含めたものである。だいたいアメリカ的なもの、カナダ的なもの、といつても、ひと皮むけば、そこにはイギリスの伝承世界——くもと歌の世界——が脈々と生きているばかりが多いのである。ことに Al Capp の描く世界——このうえもなくアメリカ的な、あるいは hillbilly 的な世界——は、じつは古いイギリスの伝承世界と深くつながっていることを、感じさせことが多いのである。

いま筆をとっているこの時点(7月下旬)でちょうど進行中の *L'il Abner* の挿話は、かりに題をつけてみるなら “Miss Dateless and the Crooked Miles” ということにでもなろうが、Dogpatch へある日とつぜんやってきたおよそ男性にもてそうもない醜(?)女(したがって “dateless”)が亡父の遺言書の指示にしたがい、その遺産と、そしてついでに男性とを求めて Daisy Mae (*L'il Abner* 夫人) をともなって旅に出る、という筋立てで



漫画 *L'il Abner* の一コマ

1) 知的 sophistication という点では Walt Kelly の *Pogo* がはるかにまさる。

ある。この話がどういう結末になるのか、いまのところ、かいもくわからない。Miss Dateless の亡父の遺言は “Soon's you travels 1700 crooked miles straight ahead you'll come to the acre I own, which is burstin' wif Gold...” (原文のまま。's=as; wif=with) (曲がった1700マイルをまっすぐ行けば、黄金(金)ざくざくのわしの土地に着く) となっている。“crooked miles” をまっすぐ (straight) に行くというのが、この指示のいわばミソなのである。

ところで、この筋立てを、作者 Al Capp の独創、あるいは奔放な想像力の所産、というふうに考えると誤るのである。ふんだんにはいっている現代世相への風刺は、もちろん作者に帰していいが、挿話全体の発想は、借りものー伝承の世界からの借りものーなのである。

イギリスの伝承童謡のなかに次のような唄がある。

There was a crooked man, and  
he walked a crooked mile,  
He found a crooked sixpence  
against a crooked stile;  
He bought a crooked cat, which  
caught a crooked mouse,  
And they all lived together  
in a little crooked house.<sup>2)</sup>

これは J. O. Halliwell 編の *The Nursery Rhymes of England* (1842) に初出のもので、Robert Graves などは、どういうわけか、これを “less familiar nursery rhymes” のなかにいれているが、B. F. Wright の *The Real Mother Goose* (1916) その他わたくしの手もとにある現在市販されているマザー・グース絵本の Brian Wildsmith (1964) や Raymond Briggs (1966) のものなどのいずれにも収録されており、むしろ familiar な唄のひとつといつていいものである。わが白秋もつとこれを訳しているのである。

背骨曲りの天(空)の邪鬼(魔),  
背骨曲りの旅をして,  
背骨曲りの石段で,  
背骨曲りの六ペンスを拾ひ,  
背骨曲りの猫を買ひ,  
背骨曲りの鼠をとらせ,  
背骨曲りの豆んちょの家に,  
背骨曲げ曲げ納(まつ)まった。<sup>3)</sup>

これに白秋みずから「あちらでは、つむじ曲りの事を背

骨曲りと申します」と注を加えている。(なお stile の訳語としては石段より「踏み段」のほうがまさるよう思う。) この唄をはじめて採録した Halliwell は、彼独自の分類法により ‘Third Class: Tales’ のなかにこの唄を入れているが、物語りとしてこれという背景もなさそうである。とにかく、Al Capp は、この唄の ‘crooked mile’ をその漫画に取りいれているのである。

もうひとつ、*L'il Abner* の現在進行中の挿話の下敷きになっているものに、次の唄がある。やはりイギリスの伝承童謡のひとつである。

Peter White will ne'er go right,  
Would you know the reason why?  
He follows his nose where'er he goes,  
And that stands all awry.<sup>4)</sup>  
(彼奴(かれ)やよっぽど妙だ、真(ま)っ直(直)ぐにや行  
かぬ。

その訳知ってるか,  
鼻の向いた方へ向いて行く。  
道理で、奴(やつ)さん、鼻曲り。

一北原白秋訳<sup>5)</sup>

(4行目の that は3行目の his nose をさす。白秋訳の「道理で」は「ところが」のほうがよさそう。) Peter White 君、鼻がすっかり曲がっている (all awry) ものだから、その曲がった鼻のさしめす方向へ行くと、歩む道もおのずから曲がる、というわけ。

この唄の初出例は1701年になっており、18世紀の子どもの本にも採録されているという。1842年にこの唄を自分の童謡集のなかに採録した Halliwell は “I am not aware that it is still current” (いまでも歌われているか不明)<sup>6)</sup> と注解しているが、Opie は “They (: the lines) are well known in the present day both in England and America” (この唄は現在イギリスでもアメリカでもよく知られている)<sup>7)</sup> と19世紀中葉の Halliwell と反対のことをいっている。現在流布のマザー・グースの絵本では、たとえば Raymond Briggs のもの<sup>8)</sup>

2) Opie, *ODNR*, p. 289

3) 北原白秋『まざあ・ぐうす』(筑摩書房版現代日本文学全集93『現代訳詩集』に所載), p. 225

4) *ODNR*, p. 347.

5) 『まざあ・ぐうす』, p. 216.

6) *Popular Rhymes and Nursery Tales of England* (1849), p. 19.

7) *ODNR*, p. 347.

8) Raymond Briggs, *The Mother Goose Treasury* (London: Hamish Hamilton, 1966). 現在市販のマザー・グース絵本では収録数がいちばん多い。408篇。

などに “Peter White's Nose” という題ではいっており、格別めずらしい唄ではないのである。

漫画の Dogpatch には “Crooked Miles” という実在の人物（もっともかなり sub-human に描かれているが）が住んでおり、例の Miss Dateless と Daisy Mae は、この男をだまして連れだし、その曲がった鼻先のさしめす方向にそのまま従って（これが “crooked miles” を「まっすぐ」行くことになる）、探索の旅をつづけているのである。この挿話が、上の 2 つの伝承童謡を下敷きにしていることは、あきらかである。いってみれば、この 2 つの伝承の唄の modern version が Al Capp の漫画であって、作者が新しく構想したというものではけっしてないのである。わたくしは、いま謡曲の「班女」と三島由紀夫の「班女」（『近代能楽集』のうち）との関係のことを想起するのだが、伝承童謡と Al Capp の漫画との関係は、いくぶんそれに似ていないとはいえない。もっとも三島の才知と洗練は、Al Capp のそぼくな泥くささとは、かなり次元を異にするものではあるが。

古い伝承童謡がその生命の新しさをいつまでも失わないといつてもいいし、あるいは連載漫画というすぐれて現代的なものが、意外に古い発想のうえに立っているといつてもいいが、要するに「新しい」とか「古い」とかいう表示は、人間の imagination にとって、じつはどうでもいい、という結論になってくるのである。日の下に新しいものはない。新しいのは、それに向けるわたくしたちの眼差しだけである。時の流れに即して、「古い」とか「新しい」とかの弁別をするより、漫画といわず、童謡といわず、あるいはもっと洗練された文学作品といわず、そのなかにある人間の想像力の時間を超えた共通性——いわば非通時的 (non-diachronic) なパターン——を見出し、読者の注意を換起するのが研究者や注解者のひとつの任務であるように思われる。（カナダの批評家 Northrop Frye の批評の根底には、こういう考え方がある。）イギリスの伝承童謡は、こういう人間の想像力——analogy や simile のパターン——の汲めど尽きせぬ源泉のひとつ、といつても過言でない。

### Old King Cole について

イギリスの伝承童謡のなかには愉快な人物が多い。そのなかでも、まず筆頭格にあげなければならないのは、あの陽気な Old King Cole であろう。その唄を引用してみよう。

Old King Cole  
Was a merry old soul,  
And a merry old soul was he;  
He called for his pipe,  
And he called for his bowl,  
And he called for his fiddlers three.  
Every fiddler, he had a fiddle,  
And a very fine fiddle had he;  
Twee tweedle dee, tweedle dee, went the fiddlers.  
Oh, there's none so rare  
As can compare  
With King Cole and his fiddlers three.<sup>9)</sup>  
(コールのおうさま  
ゆかいなおうさま  
ほんとにゆかいなおひとがら  
パイプもってこさせ  
おさけもってこさせ  
おまけにヴァイオリンひき 3 にんよんだ  
ヴァイオリンひきの ヴァイオリンは  
どれもこれも とびきりじょうとう  
ティーラ リーラ ティーラ リーと  
かなでれば  
ああ これこそてんかいっぴん  
くらべるものなし  
コールのおうさま そのがくだん

谷川俊太郎訳<sup>10)</sup>

この唄は白秋も訳している。白秋訳には原詩の 8 行目を誤訳しているという難があるが、谷川訳に比べると、いかにも時代の差が歴然としており、ここ数十年間の日本語の移り変わりの激しさを如実にしめしているので、参考までにあげてみよう。「お年寄りのコオル王は愉快なお爺(おじ), / 愉快なお爺(おじ), / すぐに煙管(パイ)召して, お酒杯(ミル)召してね, / そして胡弓弾者(ハキョウ)を三人ほどお召しで. / どのどの胡弓弾者もいい胡弓持ちでよ, / 中で一番なは王様の胡弓よ, / ツウイ・ツウイヅル・デイ, ツウイヅル・デイ. …/ それそれ 胡弓弾者(ハキョウ)が弾き出したよ, おききな. / 誰に較(くらべ)うか, 滅多(たゞ)にまた無かる, / コオル王様とその胡弓弾者よね.<sup>11)</sup>」

9) ODNR, p. 134.

10) 『スカーリーおじさんのマザー・グース』(中央公論社, 昭和45年), 別冊日本語対訳テキスト, pp. 56—7.

11) 『まさあ・ぐうす』, p. 209.

さて、この唄は、イギリスの風刺作家 William King (1663—1712) の著作 (1708—9) に、その原形とおぼしきものが引用されており、かなり古い唄であることが判明している。しかし、かんじんの King Cole がだれであるかとなると、どうも判断としない。3世紀ごろ、ブリテン島を支配していた王、というのが12世紀の年代記作者 Geoffrey of Monmouth の『イギリス列王紀伝』(Historia Regum Britanniae) をよりどころにした通説であるが、史実の裏づけがあるわけではない。『列王紀伝』は、King Cole の王女の音楽の才に言及しているのに、父王の音楽愛好について言及がない、と19世紀の Halliwell は、いさか首をかしげているのである<sup>12)</sup>。Opie は、年代記作者としての Geoffrey of Monmouth を信用できないと断定して、この通説をしりぞけている<sup>13)</sup>。どうもこの King Cole というのは、ほんものの王様ではなく、16世紀の大金持ちの俗称でなかろうかという説が有力である ('King' は、したがって日本語で鉱山王とか米作王といふあいの王に近い。) (William Chappell 説)。また 'Old Cole' という表現には、現在ではもはや明らかにしがたいニュアンスがエリザ朝時代にあったらしい、と Opie は推定している。ケルト伝説の巨人 Fyn M'Coule の父おやに King Cole を擬する説 (Sir Walter Scott 説) もあり、スコットランドでこの唄がことのほか愛好されるのは、そのせいだという。諸説紛糾、もとより結論は出そうもない。史実のせんさくはさておき、この唄が愛唱されることはないへんなもので、その人気は 'Sing a Song of Sixpence' の唄と比肩しるように思われる。したがって替え唄の材にされることも多く、たとえば第一次大戦中次のような唄が英軍兵士のあいだではやったという——'There's none so rare/As can compare/With Kitchener's New Armee'<sup>14)</sup> かつての桂冠詩人 John Masefield (1878—1967) の詩集 *King Cole and Other Poems* (1923) にもコール王を題材にした1篇がある。

ところが、この伝承童謡の 'Old King Cole' の variation として、わたくしがいちばん好きなのは、アメリカは Kentucky の Ritchie 家に伝わっている 'Old King Cole'<sup>15)</sup> である。この唄は、前回この稿で紹介した Play-party などにおいて、まだなんとなく参会者の気分がほぐれてないようなときに、いわば 'to break the ice' 用に使われるのだという。この Ritchie 版 'Old King Cole' の歌詞は伝承童謡のとは、かなり違う。はじめの4行だけを引用してみると

Old King Cole was a jolly old soul,

And that you may know by his larnin';  
He eat corn bread till his head turned red,  
And his old yaller cap needs darnin'<sup>16)</sup>.

(コール王さま すてきなお方  
学のあるのが その証拠。  
唐きびパンの 食べすぎて、  
頭の髪が まっかっか、  
黄色い帽子も ほころびた)

歌詞はさらに一転、およそもと歌と無縁の悲恋の歌になるが、陽気と哀愁とが交錯したその美しいメロディーは聞く人の心をとらえてはなさない。

イギリスの伝承歌謡が大西洋を超える、たとえば Kentucky の山あいなどに土着し、アメリカ化し、歌詞、歌曲ともに独自の発達をとげることは珍しくないが、そのもっとも美しいみごとな例を、わたくしたちは Jean Ritchie (1922— ) の歌の中にみることができるようと思う。時流に乗っては、いつのまにか消えてゆく、たとえば protest song などの歌い手とは異なった世界に住むこの歌手の大地に根ざした健康な美しさは、たとえようがない。Al Capp の描く世界から、あの悪ふざけやへたな世相批判といった夾雜物をとりのぞけば、Ritchie の歌う世界とそうへだたっていないことが判明する。両者は、ふしぎに共通する魅力をもっているのである。

つまり、こういうことなのである。アメリカの新大陸で、旧世界のマザー・グースの世界が、とりわけ豊かな生命力をもって生きていると思われるのは、Jean Ritchie の Kentucky であり、Al Capp の Dogpatch なのである (もちろんこの2つに限らない)。牽強付会、とひとはいうかもしれないが、わたくしにはそう感じられるのである。正確な一字一句たがわない固定した伝承 (たとえばわが国の謡曲各流派の伝承のごとき) が、かならずしも生きた伝承とはいえないでのある。わたくしは、伝承童謡のもの形に強い関心をもちろんもっているが、伝承童謡の、いってみれば崩れた形にも、同じく心ひかれるのである。土着し風化することも、伝承のひとつのかきかたなのである。イギリス伝承童謡のなかで、'Old King Cole' のほかに Ritchie 流の version が、たとえ

12) J. O. Halliwell, *The Nursery Rhymes of England* (1842), p. 2.

13) Opie, *ODNP*, p. 134.

14) *ibid.*, p. 135.

15) cf. *Children's Songs and Games from the Southern Mountains*, by Jean Ritchie (Folkways Records).

16) (larnin' = learning; yaller = yellow) See *Folk Songs of the Southern Appalachians as Sung by Jean Ritchie* (New York: Oak Publications, 1965), p. 87.

ば 'Darby Ram', 'The Death of Cock Robin', 'London Bridge', 'The Swapping Song' などにみられるが、いずれそれらに触れる機会もあろうかと思う。

'Old King Cole' の唄が parody の材になることは、すでにのべた。しかし、たとえば次のような表現も、唄そのものの parody ではないとしても、この万人愛好の伝承童謡をぬきにしては、成り立ちえないものである。アメリカで久しく斜陽をかこっていた石炭業が、さいきん露天掘り (strip mining) の復活で息を吹き返し、こんどは環境破壊に一役買つようになったといわれているが、そのことをレポートした週刊誌<sup>17)</sup> の記事の書き出しに

After two decades of dwindling status, *King Coal* is coming back. (italics は筆者)

(過去20年斜陽状態を続けていた石炭業は再び生気を取りもどしてきた)

とあった。石炭 (coal) を唄の King Cole にかけるのは、ことあたらしいことではないらしいが<sup>18)</sup>、伝承童謡に親しんでいないと、わたくしたちは、こんなところに King を使う理由がのみこめず、またなんとなく読みすごしてしまうかもしれない。これは 'Old King Cole' という唄があるからこそ成立する表現なのである。英語で King Gas とか King Oil とかいう表現が、まず成立しないのも、そのためである。

### 新聞雑誌の見出し

上記の King Coal の例は、雑誌記事の本文からの引用だが、伝承童謡の表現がことに愛好されるのは、むしろ見出しにおいてである。見出しというものは、読者の目につきやすいし、伝承童謡由来の表現は、言外の（ときには英語国民にのみ通じるような）含みをもっているからである。前回の本稿で扱った "And then there was one" は、その1例だったが、もっと前に紹介した "All the King's Men" も、やはり見出し用としては、出場回数の多いほうであろう。さきほどモロッコの King Hassan II にたいするクーデター失敗事件が起こったときの新聞の見出しに

A Bit of Disloyalty Among All the King's Men<sup>19)</sup> というのがあった。童謡の下敷きがなかったら、英語としては、この All は無理で Some of としたほうが自然であり、かつ事実に即している、という難癖をつけることも可能だが、もちろんこのばあいには通じない。'All the King's Men' とひとかたまりになつてゐるからこそ効果があるのであって、all という単語ひとつ取りはず

しても、見出しとして使用した意味はなくなってしまう。含みが消え去り、なんのへんてつもない bland な見出しになってしまうであろう。

ついでにもう1例。Maclean's というカナダの大衆誌の本年6月号の読者欄に、ALL THE KING'S MEN…という見出しの下に投書が2通掲載されている。どちらも環境汚染を論じているのだが、この見出しとなった表現を文中に使っているわけではない。環境汚染によっていたん種 (species) が絶滅したらさいご、どんなに人が努力しても2度と地球上にもどつてこないと訴えている間のだが、こういう趣旨の投書の見出しとして、All the King's Men…は、いかにもうつつけなのである。墜落した Humpty Dumpty が2度ともとにかくえらぬごく、環境汚染の犠牲者もよみがえるすべはない、という気持ちが、なんのあいまいさもなく、しかも無限の含蓄をこめて表現されるのである。（この項、前説の繰り返しで申しわけなし。）

新聞や雑誌の見出しは、おおげさにいえば、その言語がもつ過去の遺産の結晶であり、伝承や俗信、あるいは時代の流行表現などがそこに凝集されているばあいが少なくない。見出しのつけかたに編集者やいわゆるデスクの見識や学識が端的にうかがえるので、研究の対象としても、じゅうぶん手ごたえがあり、やりがいがあるのでないかと思われる。見出しの英語の文法（あるいは文体）的観点からの研究は、今までにも出ていたように記憶しているが、見出しのもつてゐるいわば文化的なニュアンス、とくに伝承とのかかわりあい、に触れたものは、皆無でなかろうか。

伝承童謡の表現がそのまま使われているわけがないが、なんとなくその影が感じられるばあいもある。たとえば次のような見出しひればあいは、どうであろう。記事はソ連のソユーズ11号の宇宙飛行士3名の悲劇的最期を扱つたものである。

When the Hatch Was Opened, The Men Were Dead<sup>20)</sup>

新聞の見出しとしてはやや長すぎるし、わざわざ complex sentence を使わなくても、記事内容からすれば The Death of the Three Cosmonauts ぐらいですみそくに思えるのだが、それでは曲がなさすぎるのだろう。

この見出しを見てまず私の念頭、というよりは口もと、に浮かんできたのは、いつか解説した 'Sing a

17. Newsweek, June 28, 1971.

18. cf. ODNR, p. 135.

19. The New York Times (Weekly Review), July 18, 1971.

20. ibid., July 4, 1971.

## POEMS

(4)

The world must be  
A casket, and I  
Its very corner—  
No wonder I can never  
Seize this world.

(10)

A joy, a pleasure, and a happiness  
Would be an ending of your awareness  
Of what you begin with.  
To me, an ending is my awareness—  
This is my love letter.

(11)

Let me adore  
What I think is beautiful—  
I would reheat this world  
Otherwise.

(13)

They say the sky  
Is always above you,  
But I have never seen it,  
The sky is nowhere—  
Neither above, nor underneath.

The blue thing you see  
Is not the sky at all:  
It is the color in blue.

(14)

I typed  
My life up.  
It took only  
One piece of paper  
And a single line.  
The date of my birth  
Did it.

(18)

In the morning  
I put the world  
Upside-down  
To make my life last—  
Then, I knock on the door.  
Which never responds.  
My footsteps on the street  
Make the sun blaze: I come home with  
the flame,  
That secures my sleep in the night.

by Mieko Tanahashi (New York)

song of sixpence' の唄のなかの 'When the pie was opened/The birds began to fly' という箇所だった。あの童謡のメロディーについてこの見出しの前半を口ずさみたくなるのである。pie をあけてみたら、思いがけないことが出来た（たぶつ）した——あの唄の気持ちがこの見出しと二重かさねになっているのである。

見出しの後半は、童謡と直接の関係はない。しかし、これは、たとえば folk ballad の最終のしめくくりのひびきに近いのである。'When the hatch was opened...' とメロディーにのっていた見出しが、ここで一息入れ、あとはメロディーなしで事実をはだかで聴衆にぶつける感じなのである。ほかにもっと適當な例がありそうだが、たとえば19世紀末にカナダのオンタリオ州で行なわれた有名な殺人事件を材にした ballad が伝わっているが、その最終行 (l. 24) は次のようになっている。

The trap door it flew open — and Birchall he was hung.

(絞首台の落し戸がパットと開き、殺人犯バーチルは処刑された)

行のまんなかで唄も伴奏もビタッととまり、以下たんてんとした朗読口調になってこの ballad は終わるのだが、上掲の見出しも、なんとなくそれと感じが近いのである。

見出しを書いた人がそこまではっきり意識していたとは、もちろんわたくしも思わない。また、たかが新聞の見出しに、こんなもってまわった注解を加える必要があるのか、という批判も出るかと思うが、こういう表現が無造作に、あるいはほとんど無意識に生まれるところに、かえって英語の日常的表現が担っているある種の重さ——伝承の世界の影の大きさといつてもいい——をわたくしは感じないわけにいかないのである。

(東京大学教授)

## I told you so 考

KUNIHIRO, MASAO

國 弘 正 雄

文字どおりの意味である。そして会話の折によくきかれる慣用表現である。ただやたらにこの表現をふりまわすことは禁物である。とくに男性が、なにかというと I told you so というのは、男らしくない sissy なことだと考えられている。そして manliness がなによりも貴ばれるアメリカでは、女々しいとみなされることは致命的ですらある。だからあまり頻用しない方がよい。したがってどうしてもいわねばならない場合にも、ある種のためらいがともなってくる。以下の用例をごらんいただきたい。

Such isolated mishaps aside, all over the U.S. last week the reaction to the government's new medicare program seemed good. With 19 million Americans over 65 eligible for health care, pessimists had warned of a crush of patients in hospitals after July 1. None materialized. "I don't want to say 'I told you so,'" said Arthur E. Hess, director of the Social Security Administration's Bureau of Health Insurance, "but we were hoping and expecting that there would be no crises." (*Newsweek*: June 18, 1966)

(大意：このような手ちがいは散発したが、政府のあたらしい医療保証制度に対する全米の反応は概して良好であった。この制度の対象になる65才以上のアメリカ人が1千900万もいることとて、悲観論者たちは、7月1日以降になれば全病院がすしすめになろうという予測を立てていたが、それは全部杞憂におわった。社会保障庁の健康保険局長、アーサー・E・ヘスは、「私の先見の明をほこるわけではないが、危機的な状況がおきることはあるまいと考えていた」と語った。)

I don't want to say ということばが、枕についている点にご注意いただきたい。心理的な躊躇がある証拠である。

以下の用例からも同様のニュアンスをお察しいただけようかと思う。少し長いが文脈を明らかにする意味で引用させていただく。

Besides the problem of speed, there are other dif-

ficulties arising from the basic difference between the male and female nature. The female of the species is protective from the tips of her pointed shoes to the top of her teased hair. Walking along a street or path, she is wont to sprinkle the conversation with frequent admonitions to "Watch your step" at the curb, "Look out for that puddle," "Careful, the light just turned," and so forth. Not so the young man. He will stride forth in the teeth of all such dangers in stolid silence or unbroken monologue, only coming to an abrupt halt when about to cross the path of an oncoming truck. Through it all, he will expect you to stay by his side and heel like a well-trained dog. Moreover, he will not appreciate your solicitude about curbs and puddles at all, especially if you must interrupt him to show it. Under circumstances like this, you may be tempted to let him get run over or break a leg so you can say, "I told you so," but keep in mind you'll have to walk home alone. (BARBARA LANG: *Boys and Other Beasts*, pp. 57—58)

(大意：スピード以外にも、男性と女性の本質的な相違に由来するいくつかの問題がある。女性というのは本来、頭のさきからつまさきまで用心ぶかいものである。道を歩いているときでも、カーブにさしかかったといつては、「あなたの足もとに気をつけて」とか、「ほら水たまりがあるわよ」とか、いちいち口をさしはさむ。ところが若い男は無頓着に、だまって大またで歩きつづける。わずかに止まるときといったら、トラックが向こうからやってくるときぐらいなのだ。とにかく飼い馴らされた犬のように、彼につきしたがうのが女性だと思いこんでいる。のみならず、女性がカーブや水たまりについて、とくに彼にここよなどといって指さしでもしようものなら、余計なことをとウルサがられるぐらいがオチである。せっかくいってあげたのに、と腹を立てて、勝手にひかれるか、足の1本もおったらしい気味だわ、と思うこともあるが、そうなると1人で家まで歩いて帰ること

になってしまう。)

もちろんこの文章には、ヒューモラスな誇張があるが I told you so. という慣用句のもつ implication はこれではっきりするものと思われる。

いま一つの用例を掲げよう。

Mumford betrays no *I-told-you-so* satisfaction that pollution, congestion and violence have borne out his dire prophecies. He is too concerned with preventing further ravages by what he refers to as the "mechanical world view," the "megamachine," "technological exhibitionism"—never, thank God, the military-industrial complex. He has nothing but contempt for scientists who dream about dashing off into space or recreating life on another planet, when they have made such a botch of this one. (*Time*: Nov. 16, 1970, p. 61)

(マムフォードは汚染や混雑や暴力が彼の予言のとおりだったからといって、先見の明を誇ろうとしてはいない。それどころではないのだ。彼のいう「機械的な世界観」「巨大機械」「これみよがしな技術」それに「産軍複合体」がもたらす惨害を防ぐことで頭が一杯なのである。宇宙に飛び出すことや、他の恒星に新しい生命をつくることを夢想している科学者に対しては、軽蔑以外のなにものも寄せてはいない。この地球をこんなザマにしていてなにごとだ、というのである。)

マムフォードとは Lewis Mumford のことで、アメリカが世界に誇る文明批評家で、とくにその大冊の都市史は画期的な業績といわれている。

ついでにもう一つ用例を。

"She'll give me hell when I get home. She told me not to come out here and that I would be asking for trouble. How will I ever live this down?" I was tempted to ask him whether the alternative of not coming back alive was a better solution. But I didn't and just smiled. As a married man I well understood all the philosophy involved in the situation when your wife remarks, "I told you so." When the men left we all shook hands and they thanked us for what we had done. (Martin Ebon: *True Experience in Prophecy*, p. 50)

(大意:「家に帰ったらコッテリやられるさ。ここに来たらひどい目に会うからって家の奴はいってたんだから。ああ、どうしてこれを生き抜けようか」

いっそのこと、生きて帰らなければいいんじゃないかといおうと思ったが、思いとどまり、笑いを返すにとめた。ぼくだって妻ある身だから、ワifの奴に、だか

らいわないとこっちゃない、といわれたときのやるせなさは、とくと納得がいったからである。)

哀れな亭主野郎が、勝ち誇ったような細君の科白にへきえきし、同病あい哀れんでいる様子が目に浮ぶようなやりとりではある。女とは、とかくそういう科白を口にする存在なのである。

I told you so. にはいくつかの変形がある。I told you. というのが一つ、いま一つは Didn't I tell you? という、一種の修辞的疑問文である。

これまた少し長いが、引用させていただく。

Half the fun of taking the family out for dinner in a Chinese restaurant is the Ritual of the Fortune Cookie.

As soon as the waiter puts the plate with the four cookies in front of us, there's sort of a breathless anticipation as we each break open our own crisp little treasure and pull out the slip of paper inside. Even my nine-year-old son knows better, but I think that all of us harbor the secret belief that the future is going to be revealed.

• • •

Next comes Bobby. You'll find happiness in a new friendship. Bobby is pleased.

Then Jeanette. Take advantage of your exceptional talent and skills. She puts that "see-didn't-I-tell-you" smile on her lips. (ALAN KING: *Help! I'm a Prisoner in a Chinese Bakery*, p. 7)

(大意: 家族を中国料理屋につれていくことの愉快さの一つは、例の辻占いのクッキーをわって中にある文句をよむという儀式である。

ウェーターが4個のクッキーをわれわれの目の前におくが早いか、みなが期待に胸をはずませて、パリパリと音をたててクッキーをわり、中に入っている紙片をひき出す。僕の9つになる息子だってあれでさきのことがわかるなどとは考えてもいいが、それでもひとりびとが、将来の運命がこれから明らかにされるのだと秘かに信じているらしく思われる。

• • •

次はボビーの番だが、「新しい友情が、あなたを幸福にする」という辻占をひきあてて、ゴキゲンである。

さてジャネットは、「あなたの持っている特異な才能や技能を十二分にいかすように」というご託宣を手にして、ほらごらんなさい、やっぱりね、といいたげな笑みを口もとにうかべる。)

得意然と笑みを口のあたりにただよわせた三十代後期のご婦人を想像していただきたい。

次は *I told you* の例。大意は省略させていただく。First, of course, it was only fair to give his opponents a warning. They didn't stand a chance anyway. "All right, you varlets!!! " he shouted at the top of his lungs. "Prepare to suffer the vengeance of satyr-man!!! " They all turned their eyes upward in stunned surprise. "It is Satyr-Man! Waldo exclaimed. "See ... *I told you!*" Felicia cried triumphantly. "So that's Satyr-Man," Mr. Big said as he backed away. "Well, he's no ghost. He's alive. Take care of him, men!" (John A. Keel: *The Fickle Finger of Fate*, p. 73)

勝ち誇ったように *I told you* といっているところにご注意ありたい。そしてこれまた女性の発言である。

さてそこで *I told you so* ならびにそれに準ずる発言が男らしくないということを実証するような用例を掲げさせていただこう。

キューバ侵攻に失敗したときのことである。ときの国連大使はいまは亡き ADLAI STEVENSON であった。ケネディ大統領にまさるリベラル派としてきこえたこの秀れた国際的政治家は、もとよりキューバに手を出すことには反対であった。カストロ革命の行きすぎを知りながらも、その歴史的な意義を理解していた。

同大使——大使とはいひ閣僚の一員であった——の反対を知るアメリカ当局は、ほとんど彼をツンボサジキにおいて、キューバ侵攻に green light をあたえ、その結果国連の席上で、なにも知らない同大使はひどく恥をかく破目になってしまう。

それはとにかくとして、そのときのキューバ情勢を収集分析したのは当時の CIA(Counter Intelligence Agency) つまり泣く子もだまる中央情報局の長官、 ALLEN DULLES であった。当然彼の失策が問題にされたが、彼は一切弁解がましいことをいわなかつたという。それに対し STEVENSON 大使は、憤満やるかたない思いについてに *I told you so* と口をすべらしてしまったらしい。

その当時の内幕をつたえた *Time* 誌の記事の一部を引用する。

When the invasion flopped, Dulles took full blame for the C.I.A.'s part in the failure, never mentioned that he had argued for a bigger air strike. "Dulles is a man," Bobby (Kennedy) says admiringly. (May 5, 1961)

(大意：侵攻がみじめな失敗におわったとき、ダレスは C.I.A の役割について全責任を負い、もっと太々的な

空爆をと主張したことについては、おくびにも出さなかった。「ダレスは男だ」とボブ・ケネディ司法長官は感嘆のことばを吐いた)。

自己弁護のためにことあげをしないというのは日本的な美德のようにとかく考えられているが、これをみるとどうやらそばかりともいえないようである。ただこれは想像だが、同じような際におそらくは日本人の心を占めるであろう一種のマソヒズム的な悲壮感は、アメリカ人にはないのではないか。

ここでもう一つ man についての用例をかかげさせていただく。

Phil Adams, for the first time in many months, lost his temper. His usually mild, softspoken voice became hard and stern, reflecting the indomitable strength these hills had given him; these same hills that had spawned him and fed him grudgingly over the years. "I resent that," he said. "I'll personally throw out the fellow who said that, if he is *man enough* to identify himself." (STERLING QUINLAN: *Jugger*, p. 8)

(大意：フィル・アダムスはそこで久しぶりに腹を立てた。いつもは物やわらかな彼の声もきびしさを加え、山国育ちの彼の頑健さを物語っていた。彼を生んだ山国は、長い間にわたって、彼にカツカツの生活を強いていたのである。「実際腹が立つな」と彼はいった。「男らしく名乗ってでたらの話だけど、そんなことをいった奴は、この俺が叩き出してくれる。」)

さて話が男らしさということに移ってきたので、男らしさに関係のありそうな慣用表現その他をいくつか並べて、しめくくりにしようと思う。

少年と一人前の男性とはちがうという考え方がある。いざというときに頼みになるのは、男性であって少年ではないということであるが、以下の用例はほぼ idiom 化しており、私も滯米中に何回となく耳にしている。

He questions me about school, home, money, etc. Only natural—a father has to look out for only daughter. Says wife left him, has had to raise Wanda by himself. Doesn't want her getting involved with any white trash. Adds that anybody can be an officer these days but war won't last forever. Men and boys can be separated when country gets back on feet. (W.P. Cox: *Southern Fried*, p. 102)

(大意：僕に学校のこと、家のこと、お金のことなどいろいろ尋ねた、一人娘のことだもの、あたり前だよな、

細君に逃げられてからというもの、一人でワンダを育ててきたんだと。つまらない（南部）白人なんかとどうこうということになって欲しくないし、この頃じゃだれでも将校ぐらいにはなれる。でも戦争はいつまでも続くものじゃないし、一人前の男かどうかがわかるのは、世間が平常にもどったときだ、ともいっていた。）

Boys *will* be boys. などという慣用表現を思い出していただく向きもある。

次の引用もほぼ同種のものである。

Fellows: Cigarettes won't "make a man out of you." I don't care what the ads say. (And anyway, they don't say that.) (A. VAN BUREN: *Dear Teen-Ager*, p. 126)

（大意：皆さん、煙草を覚えたからといって、別に大人になるというわけじゃなくってよ。煙草の広告がなんといおうとね。それに、煙草の広告も別にそうはいってはいません。）

ティーンエイジャーが、大人きどりで喫煙をはじめるのは、洋の東西を問わないが、とくにアメリカでは、煙草が民間私企業の手にあることもあり、広告合戦がすさまじく行なわれている。そして VANCE PACKARD も説くように、男らしさを主要なモチーフにした広告が多い。イレズミをした筋骨たくましい海の男が、ふかぶかと煙草を吸いこんでいるところなど、肺ガン問題のうるさい今日、なおよくみられるところである。

以下のイディオムもきわめて普通である。

"How come a grown man like yourself drinks milk?"

"Because it puts hair on my chest. Also because it's almost four in the morning and if I have any coffee I won't be able to fall sleep." (DON ELLIOTT: *Passion Trap*, p. 30)

（大意：「あんたのような大人がなぜミルクなんか飲むのよ」と彼女はいった。

「胸毛が生えるからね。それにもう明け方の4時近いだろう。いまコーヒーなんか飲んだら、ねむれなくなっちゃうんだ。」

Manliness の象徴としての胸毛は、やや fetish 化しているが、この場合はからだによい (good for me) ついどの気持であろう。

次の用例はどうであろうか。

"Where did yuh work last?" growled Monkey Face.  
"It's my first job. I'm just out of school."

"Yeh?" he snickered. "Just out of school, huh?  
Well, yuh struck a good job, kid, it'll put hair on  
your chest. Here, take dis." (MICHAEL GOLD: *Jews*

*Without Money*, p. 189)

（大意：前はどこで働いていたんだよ。とサルはいった。）

こんどがはじめてなんです。学校を出たばかりですから。

へエ、学校を出たばかりだって。とにかくお前はいいしごとにありついたもんだよ。一人前になるぜ。さあ、これをとりな。）

さて最後に manliness の antithesis としての sissy ということばもしくは概念をとりあげておきたい。大体この sissy ということばは、アメリカ英語に独特なもので、イギリスにはない。以下は文化人類学の名著として知られるクラックホーンの「人間のための鏡」の一節。本書の翻訳が、さいきん光延明洋氏の名訳で出た。

The British and the Americans are still under the delusion that they speak the same language. With some qualifications this is true as far as denotations are concerned, though there are concepts like "sissy" in American for which there are no precise English equivalents. (CLYDE KLUCKHOHN: *Mirror for Man*, p. 123)

（大意：英国人もアメリカ人も同じ言語をしゃべるという幻想をいまだに抱いている。内包に関する限り、若干の補則をつければ、この考え方は正しいが、しかし sissy のように、イギリス英語に適確な対等概念がないようなものも、アメリカ英語にはある。）

以下の用例は sissy と呼ばれることがイヤなあまりに、書物をかくして歩く少年のはなしである。

I made certain that I wouldn't be called "Sissy," and I managed this by concealing my books, keeping my necktie folded in my pocket, and tucking my clean white collar inside my sweater until I was clear of the neighborhood. (HARRY GOLDEN: *You're Entitled*, p. 232)

（大意：オトコオソナといわれたくなかったので、本をかくし、ネクタイをポケットにしまいこみ、白いカラーをセーターの中にたくしこんで、その一角を出した。）

上掲書の次のページには、以下のような文章がある。  
(*Ibid.*, p. 233)

We went to see Broncho Billy because he taught us the attitudes we admire in this New World. He was heroic. That is what we wanted to be, heroic—and a cowboy, too, if that was possible. The early Westerns conferred upon us the first ideals of American manhood: speak truth, shoot straight, and save the wagon

*train.*

(大意：われわれはブロンコ・ビリーの西部劇映画をみにいった。新世界での美德を教えてくれるからである。彼はヒーローだった。ヒーローに、そしてできたらカウボーイにもなる、というのがわれわれの望みだった。初期の西部劇映画は、われわれにアメリカの男性の理想像を植えつけた。眞実を語り、強くたくましく、弱者をいたわり守るというのがこれだった。)

The tough guy という成句もある。木を切り倒すことに長じ、インディアンとのいくさにみごとな働きをする男こそが、男の中の男であったとすれば、これも当然であったろう。その逆に sissy とか sucker (お人好しなだけがトリエで、物の役に立たず、心利きたるところのないウツケ者) とかみなされることは、致命的であった。

Such attitudes—and the idealization of the “tough guy” and the “red-blooded American” and the fear of “being a sucker”—derive both from the Puritan ethic and from the American pioneer era. Aggressive activity and rapid mobility were effectual in the rapid development of a new country, and it made sense then that the rewards in money and status should be high. (*Mirror for Man*, p. 180) (大意省略)

したがって aggressive という形容詞も、九州大学の渡辺眷吉教授も書いておられるように、人を褒めたことばであり、日本語の「なんにでもシャリシャリ出る」というような非難の気持を含まないことが多い。

“Aggressive” is, in American culture, a descriptive adjective of high praise when applied to an individual’s personality or character. “You have to be aggressive to be a success.” The obvious crudities of aggression are, as Lynd says, explained away by identifying them with the common good. (*Ibid.*, p. 180)

(大意：個人の資質や性格をあらわす際の、aggressive という形容詞は、人をほめる際に用いられるのがアメリカの用法である。成功しようと思えば、aggressive でなければならぬ。という風にである。攻撃性のもつ明らかな残忍さは、リンドもいうように、全体の善と同一視することで片づけられてしまう。)

以上 I told you so の説明からはじまって、アメリカにおける男らしさ談義にまではなしが拡がってしまった。実はこうなったのにはわけがある。

昨年の5月に出した小著『英語の話しかた』のなか

で、I told you so を紹介し、男の使ってはならぬ科白と書いた。ところが多くて読者から、なぜかというお訊ねに接した。アメリカ人に聞いたら、そんなことはないと言われたが、なぜいけないのか根拠を示して欲しい、というご要望もあった。

たしかに、「使ってはならぬ」という説明は若干強きに失したきらいがある。しかしあまり男らしい表現でないことは、以上の説明からも明らかであろうし、男らしくないとみなされることが、あの文化ではすこぶる困ったことがあることもお判りねがえたであろう。これが長長と説明を試みた理由である。この小論が、疑問を寄せられた読者の目に触れることを願う。そして、Didn’t I tell you? ということばで本稿を結ぶとしたら、はたしていや味にすぎるだろうか。

(N H K 中級英語会話講師)

## FUN WITH SPELLING

You may have heard of the expression “from head to toe.” This game is almost the same, but it starts with the word *head* and ends with the word *foot*. See if you can start with the first word and by changing one letter on each succeeding line end with the word *foot*. Remember that each line must be a correctly spelled word.

HEAD

—  
—  
—  
—

FOOT

*The answer to this word game will be found on page 26.*

# 日英語の比較

## —関係節について—

UEDA, AKIKO

上田明子

関係節は言語を学び研究する者に、いろいろのおもしろい問題を提供してくれる。Jacobs and Rosenbaum の表現をかりれば、「文法家は話者がどうやって新しい文をつくり、また、理解するかを究明しているが、関係節は、無数の entities に言及する手段を与えてくれるので、非常に関係の深いものである。」<sup>1)</sup> 彼等のあげている例は、単純ながら要を得ていて、すなわち、the book on the table (the book which is on the table からくるので、on the table は関係節と考えられている) には、ある単語をあて、the book on the refrigerator には別の単語を用いるとすれば、いくら単語があっても不足で、かつ、人間の記憶の限界をこえてしまう。場所を指示する関係節を the book に加えることによって、ある特定の本を示せれば、こういった厄介なことはまぬかれるわけで、この点だけからも関係節はまことに便利なものであるというのである。

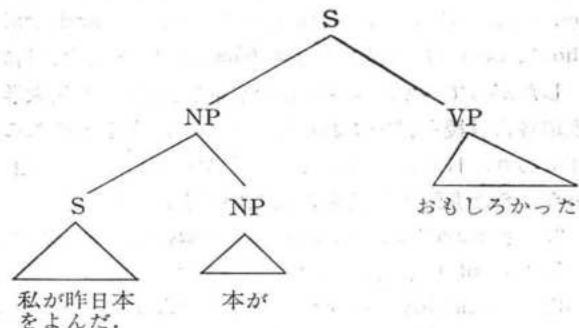
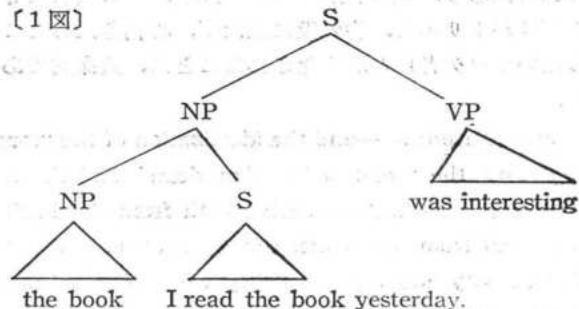
筆者も、かねてから関係節には興味をもっていたが、先日、専門外のある本の翻訳を手がけたとき、関係節の用い方について、日本語と英語ではかなりの差があるのではないかとの疑いを持った。言語の universality を説明するのに、この関係節の存在がしばしば用いられている<sup>2)</sup>。筆者も、深層構造における関係節の存在に universality が見出されることに同意するものであるが、表層構造では、言語によりいろいろな差異があり、特に翻訳の際に問題となることも否定できない。そこで、日英語の関係節について、まず、深層構造における共通性を考え、次に、実際の表層構造にあらわれた差異を観察してみたい。

### I. 深層構造において

a. 第一に、関係節が日英両語に存在すること、また、関係節化が成立するためには〔1図〕に示されるように、名詞句 (NP) の中にくみいれられた (embed された)、関係節 (S) の中に、英語ではそれに先行する NP と同じ NP があること。同様に日本語では、S に後続する NP と同じ NP があることは、よく知られた前提条件である。なお、日本語の場合には、NP の中の助詞は同一

の必要はない。関係節の中のこの同一の NP は関係節化変形の段階で英語では関係詞におきかえられ、日本語では削除 (delete) される。

〔1図〕



なお、関係節となる S が、NP に先行するか、後続するかのちがいは、実は表層構造の順序に影響されたちがいであって、どちらか一方にきめることが可能である。深層構造はそれによりいっそう共通化する。S の移動が必要な言語については、変形で扱えばよい問題であるとの主張があることをつけ加えておく。

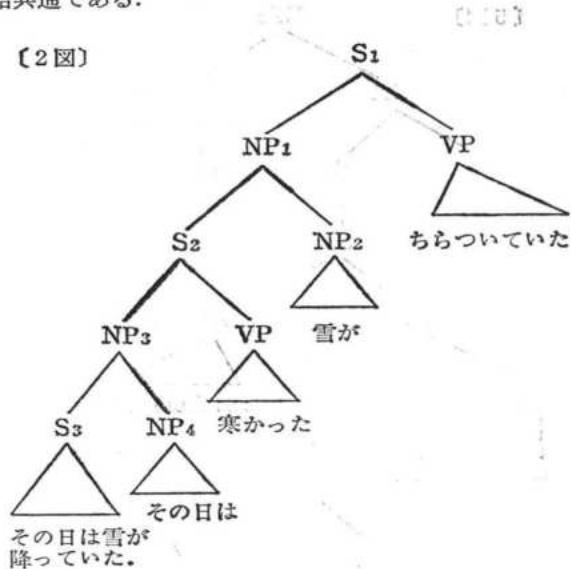
b. 第二に、embedded S の中におこり、先行、ないし後続する NP と同一の NP は、さらにほかの S の一部であってはならないという制限があるが、これも、日英

1) Roderick A. Jacobs and Peter S. Rosenbaum, *Transformations, Style, and Meaning*, Xerox College Publishing, 1971, p. 93.

2) Emmon Bach, "Nouns and Noun Phrases," *Universals in Linguistic Theory*, ed. by Emmon Bach and Robert T. Harms, Holt, Rinehart and Winston, 1968.

語共通である。

〔2図〕

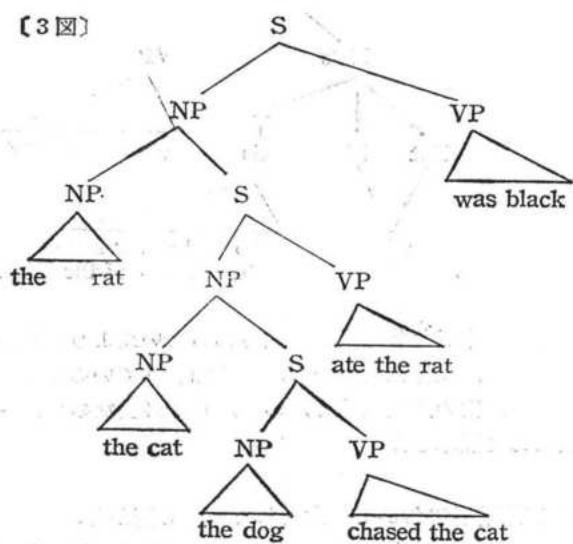


〔2図〕のように、 $S_3$  がまず関係節化すると  $\Rightarrow$  雪が降っていたその日は寒かった。となるが、次に  $S_2$  を関係節化しようとすると、 $NP_2$  と同じ  $NP$  の「雪が」は、すでに embedded  $S_3$  「雪が降っていた」の一部であるので、文法的でない文ができてしまう。 $\Rightarrow$ \*降っていたその日は寒かった雪がちらついていた。

この制限は、日英語共通のものである。

c. 第三に関係節の重なり合いの問題がある。関係節の中の  $NP$  に、さらに関係節が含まれるといった重なりあいがそのひとつのタイプである。この重複は、理論的にはどの言語においても、無限に許されるものとされているか、実際には、記憶力の限界に制約される。Paul

〔3図〕



Postal が、こういった場合の一例として次の文をあげている。

The rat which the cat which the dog chased ate was black<sup>3)</sup>.

簡単な tree で示すと〔3図〕のようになる。

Postal は、この文について、「書かれた場合にはかるうじて理解できるが、きいた時にはわからない」と述べている。

日本語でも、同様な重なり合いが許されるわけで、理論的には同じであるが、実はこの文を日本語に訳してみると、次のようになり、おもしろいことに気づく。

犬がおいかげた猫の食べたねずみは黒かった。

となるので、日本語では、耳で聞いた場合にも理解される。ここでは、このことを指摘するにとどめ、後の差異のところでこの問題はあつかいたい。

関係節の重なり合いには、もうひとつのタイプがある。それは、あるひとつの  $NP$  に、2つ以上の embedded  $S$  がつくかどうかという問題である。これは名詞に先行する形容詞を関係節から導入する変形文法の立場からすれば当然、可能でなくてはならないことで、それでなければ、a tall, handsome, young man のように、名詞の前に、形容詞がいくつか重なった表現は不可能になる。また、次の例のように、who に導かれる関係節の間に and や but などが入っている場合にも、ひとつの  $NP$  に、関係節がいくつつついているとみた方が、最初に等位接続詞でむすんだ節が、ある  $NP$  を修飾するとみるより合理的であり、かつ、文の意味にも合うように考えられる。

On the other hand, there is the professor who loves literature as literature and who can communicate his delight in it.

—Robert Lynd, *Books and writers*

Carlota Smith は、"Determiners and relative clauses in a generative grammar of English"<sup>4)</sup>において、この種の重なりを許した rules をたてている。そこに引用された次の例文を、簡略化された tree に書いてみると〔4図〕のようになる。

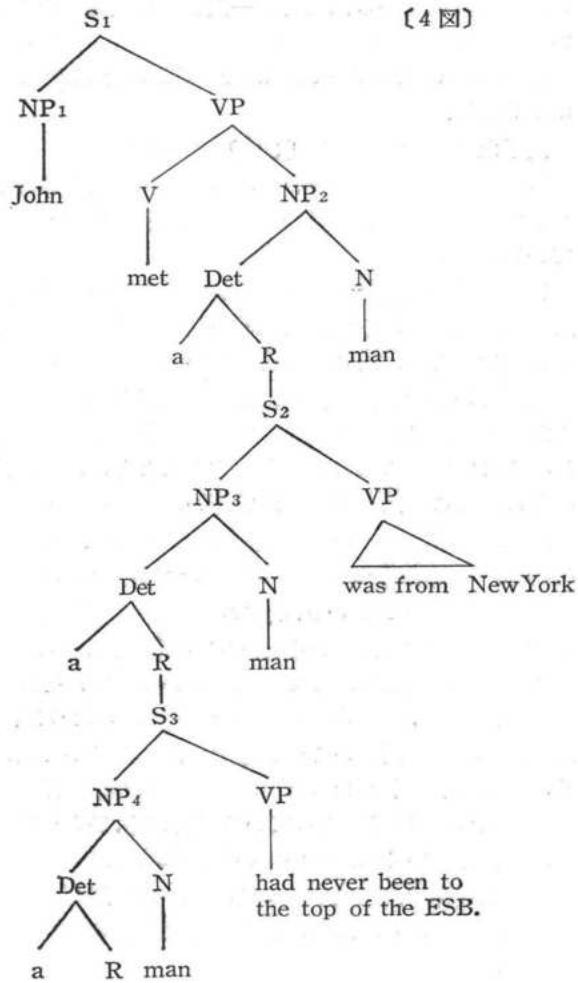
John met a man who was from New York who had never been to the top of the Empire State Building.

Smith では、関係節は Det の一部として、N に先行するので、R movement の変形が必要になる。まず

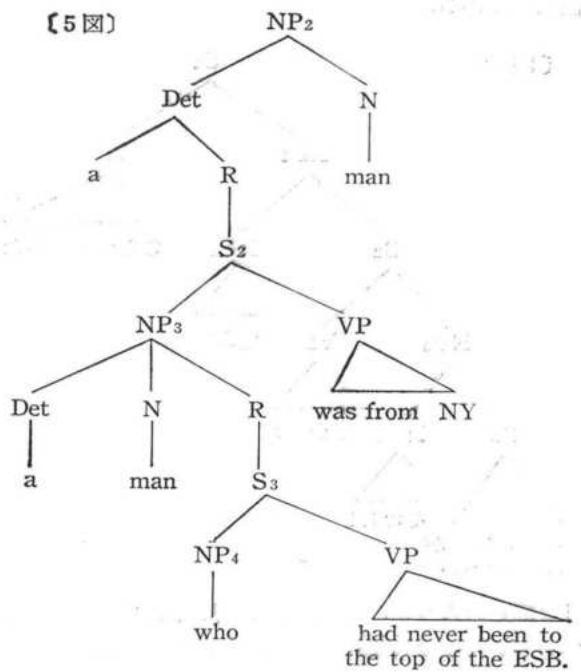
3) Paul M. Postal, "Epilogue" in Jacobs & Rosenbaum, *English Transformational Grammar*, Blaisdell, 1968, p. 269.

4) *Language* Vol. 40, No. 1, 1964.

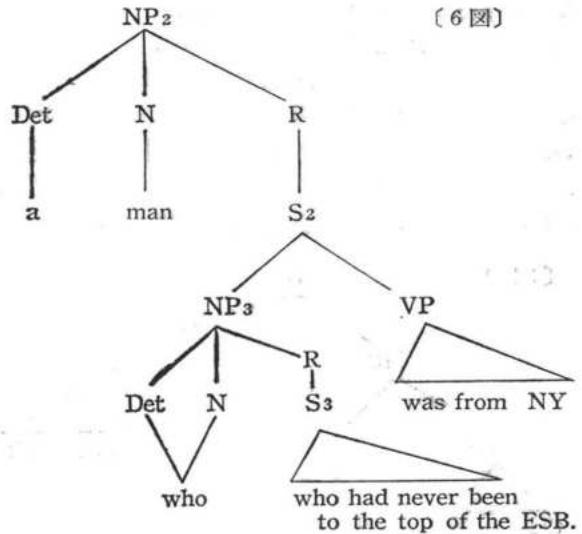
〔4図〕



〔5図〕



〔6図〕



NP<sub>3</sub> の R movement と、関係節化の変形で〔5図〕のようになり、さらにもう一度 NP<sub>2</sub> について、R movement と関係節化を行なうと〔6図〕となる。しかし、これでは NP<sub>3</sub> のなかにつづいて who が 2 回重なってしまう。したがって、これを防ぐために何かの rule が必要である。たとえば Det N が関係節化により who となるときそれがもし R に dominate される S に先行する場合には R-S は raise されて、S<sub>2</sub> の下の VP のあとにつくといったような rule 〔7図〕が必要と考えられる。

日本語の場合にも、同じような深層構造を考えられ、この場合には、R movement も必要はなく、また関係代名詞もないので、同一の NP を取り除くだけで変形の段階が終わるので、より簡単である。

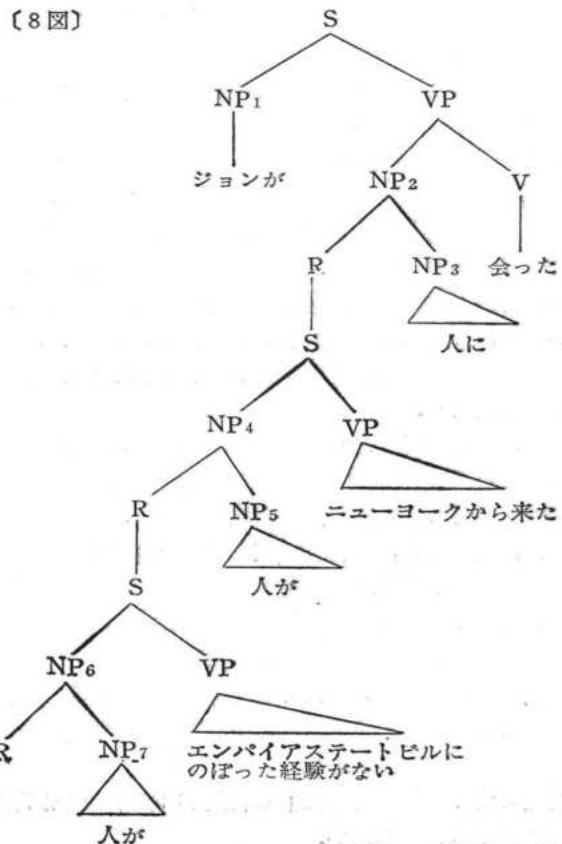
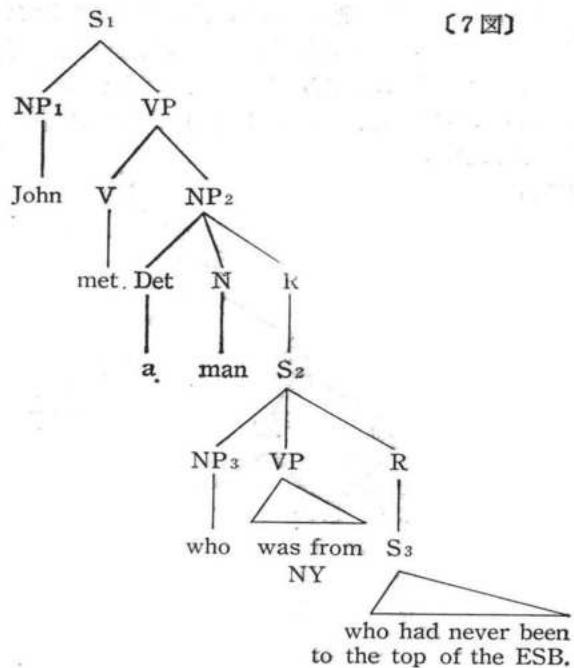
ジョンはエンパイアステートビルにのぼった経験のないニューヨークから来た人に会った。〔8図〕

以上のように、深層構造では、日英両語の関係節に関

しては、根本的な共通性が見出されるといえよう。これらのこととは、関係節について、よく知られている事実ではあるが、次の議論に導くために、ぜひ必要なので、一応まとめて提示した。

## II. 表層構造において一主として実際の例から。

- a. 第一に、日本語には、英語の制限的関係節に対照



する非制限的関係節にあたるものがあるかどうか。翻訳を通してみると、英語の nonrestrictive relative clause の訳は、restrictive relative clause と全く同じ方法で訳出されていることに気づく。

The Japanese, who at every point were accustomed to rigorous definition of hierarchical rôle, looked at the matter differently (Ruth Benedict, *The Chrysanthemum and the Sword*, p. 70)

あらゆる点において階層的役割の厳密な定義に慣れていた日本人は、事柄を異なった見地から眺めていた。(同「菊と刀」長谷川松治訳 p. 82)

また逆に、日本語からの英訳の場合も同様である。

エネルギーが余って騒がしい日本と、国民のエネルギーが不足したような英國を考えさせられるが、このまま没落する英國民ではあるまい。(朝日新聞「天声人語」7 p. 197)

This makes us consider the contrast between busy Japan, where there is an excess of energy, and Britain, which seems to have a shortage of energy. (同 p. 196)

この現象は、英語の nonrestrictive relative clause を「理由」などに、意味の色あいをつけ加えて訳出している場合をのぞいては、すべての場合にみられるものである。日本語には、英語の二種の関係節を区別して表現する方法がないのではないかと考えられる。もしそうならば、この表層構造のちがいが深層構造には差異として存在するのか、あるいは変形の段階でのちがいなのかという問題が残される。

b. 第二に表層構造における関係節と名詞との相互の位置の問題がある。これは実に自明の事実なのであるが、次の論点に関連するので一応のべなくてはならない。すなわち、英語においては、形容詞およびそれに類するものは名詞に先行し、そのほかの関係節および関係節からきているものは後続する。日本語では、すべての関係節は形容詞も含めて、名詞に先行する。一例をあげる。

Note that there is a related transformation which actually deletes relative pronouns.

(Jacobs & Rosenbaum, *Transformations, Style, and Meaning*, p. 97)

Transformation という名詞を中心に、related が先行し、which..., relative pronouns が後続するが、これらはいずれも深層構造では関係節である。日本語では、この両者とも先行して次のようになる。

関係代名詞を実際に削除するところの、関連する変形があることに注目なさい。(同 筆者訳)

この現象は英語を学んだ人なら誰でも気づくことであるが、実際の言語の運用にあたって、すべて先行型の日本語の関係節の重なり合いが、ある時には便利であり、あるときには誤解、あいまいさをまねく結果となることを次にとりあげたい。

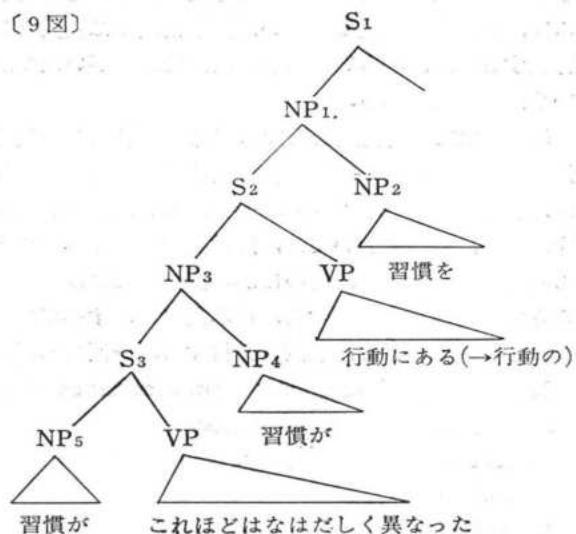
### c. まず、例文からはじめたい。

大戦を敵とする戦いで、これほどはなはだしく異なった行動と思想の習慣を考慮の中に置く必要に迫られたことは、今までないことであった。(『菊と刀』p.5)

「これほどはなはだしく異なった」の修飾する名詞は、「行動」あるいは「行動と思想」のいずれかで、この2語は対をなしているから、ひとまとめにした後者であろうと判断するのが妥当とまず考えられる。ところが、英文では次のようになっている。

In no other war with a major foe had it been necessary to take into account such exceedingly different habits of acting and thinking (C & S, p. 1) Exceedingly different の修飾する名詞は acting でも thinking でもなく、habits である。これは誤訳といったものではない。日本語でどうしてこのような訳が生じたかは、次の分析によって明らかになる。簡略化した tree で表現してみると、[9図] のようになる。簡明のために、「行動」と「思想」のうち、前者だけをあらわすことにする。

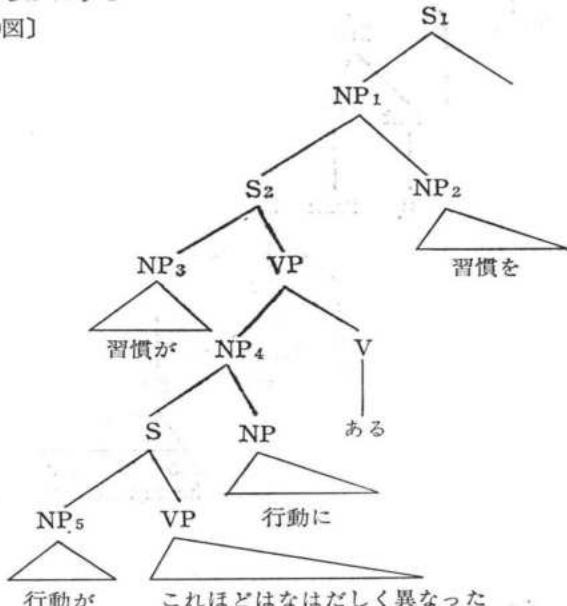
[9図]



関係節化の第一のサイクル (S<sub>2</sub> の中) では  
⇒これほどはなはだしく異なった習慣が行動にある。  
第二のサイクル (S<sub>1</sub>)  
⇒これほどはなはだしく異なった行動の習慣を  
すなわち、NP<sub>4</sub> と NP<sub>5</sub> の「習慣が」が、第一と第二

のサイクルでそれぞれ削除されて、表層構造ができる。そのために「これほどはなはだしく異なった」の部分が「行動」の直前に来て、上記の例文のような解釈を生じている。さらに次の tree [10図] がこのことをより明らかにする。

[10図]



第一のサイクル (S<sub>2</sub>)

⇒習慣がこれほどはなはだしく異なった行動にある。

第二のサイクル (S<sub>1</sub>)

⇒これほどはなはだしく異なった行動の習慣を

[9図] の tree と [10図] の tree が示すように、2つの異なる深層構造が同じ表層構造になっているので、ここで「あいまいさ」—ambiguity が生じている。そして、特に関係節は、距離的に一番近い名詞にひかれやすいので、[9図] からの文にも原文とはちがった、[10図] の tree の深層構造から来る意味を考える可能性が強いといえよう。

一方、英語の場合には habits を中心にして exceedingly different が先行し、of acting and thinking が後続するのでこのような問題は生まれない。

また、英語では、関係代名詞の存在、とくに、who と which の別のあることが理解をたすける場合がある。

the eyes of the man which he gazed at

the eyes of the man who he gazed at

この例では、彼がみつめていたのは、「眼」なのか「人」なのかがはっきりしているが、関係代名詞のない日本語では  
彼がみつめていた人の眼

となって「みつめていた」の目的が「人」なのか「眼」なのかははっきりしない。

ところが、日本語でも、もし第二の文の動詞を変更して、英語の *talked with* にあたる、日本語の「話していた」にすれば、たちどころに「あいまいさ」が消滅する。「話」の相手になりうるものは「眼」ではなくて、「人」であるからである。このように、関係節の中の動詞の features (特性) の制限によって、主語あるいは目的となりうる名詞が限定されて、「あいまいさ」が生じない場合も多いのであるが、一方、実際に「菊と刀」での例のように、そういう動詞特性の制限が及ばないので、「あいまいさ」ないし誤解を生じることも多いのである。

日英語の関係が、これとは対照的に異なっている例として、I e でふれた次の例文を再び検討したい。

The rat which the cat which the dog chased ate was black.

このようにつぎつぎと embedded S のなかの NP が、さらに embedded S を持っている場合、英語では「くみこみ型」とでもいえるような構成となり、理解の限度にすぐ達してしまう。

[The rat | which the cat | which the dog chased | ate | was black.]

日本語の場合は「漸進型」とでも名づけられるように、文頭からひとくぎりずつ進んでいくので、理解の限度にはそれほどはやく到達はしないようと思われる。

[犬が追った | 猫の食べた | ねずみは黒かった.]

この文はスタイルの面からは問題がありそうな文であるが、理解の限度がひろいことは注目に値する。

以上のように、ある構成では英語の方に明瞭度が高く、ほかでは日本語の方が明瞭であるということも、言語の表現能力の比較といった面から考えて興味のあることである。

d. 次に、主語の省略と、関係節の関係を考えたい。よく知られているように、日本語では、自明な主語はしばしば省略される。再び天声人語とその訳から引用するが、日本語に慣れない人には、次のような例は理解が困難な文であろう。

彼女の亡命が伝えられたのは三月十日ごろ、はじめはどこにいるかわからなかったが、ローマからアリタリア航空の特別機で十一日スイスのジュネーブに着いた写真が出た。

Her flight from the Soviet Union was reported about March 10. At first it was not known where she was, but newspapers carried a picture of her arriving in Geneva, Switzerland, on March 11 by

a special Alitalia plane from Rome. (pp. 80-81)  
日本人にとっては「どこにいる」と「着いた」の主語が「彼女」であるのは明白で別に問題にはならない。

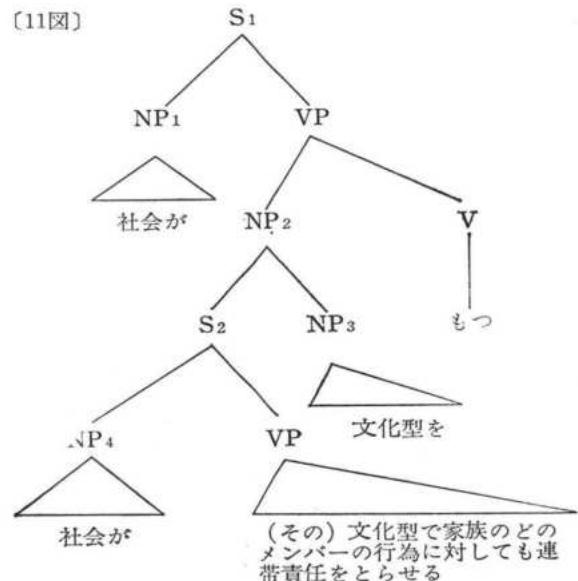
ところが、同様に主語が省略されている場合でも、意味がはっきりしない例がある。関係節との関連において、この問題を考えてみたい。

家族のどのメンバーの行為に対しても連帯責任をとらせるような文化型をもつ社会では、家族の一員であるということが個人に特別な行動をとらせることになるであろう。(R. リントン著 清水幾太郎、犬養康彦共訳「文化人類学入門」p. 93)

この文で問題になるのは、「連帯責任をとらせる」のは誰か、何が主語と考えられるかの問題である。文の前半の深層構造の可能性として、次の二段階がまず考えられる。

(1) 文化型が家族のどのメンバーの行為に対しても連帯責任をとらせる。

(2) 社会が…連帯責任をとらせるような文化型をもつ。ところが、(1)の「文化型が…責任をとらせる」のはどうも内容的に納得がいかない。すると、(2)も(1)を前提としているので、受け入れられることになる。これにかわって「文化型」を場所の副詞句と考えれば、次の解釈 [11図] が可能である。



⇒社会が社会が家族のどのメンバーの行為に対しても連帯責任をとらせる文化型をもつ

⇒社会が家族のどのメンバーの行為に対しても連帯責任をとらせる文化型をもつ

S<sub>2</sub> が関係節化する時に削除されるのは VP の中の

「(その) 文化型で」あるから、NP<sub>4</sub> の「社会が」は、そのまま残って、文頭に「社会が」が 2 回重なる結果となつた。この後に「同一の名詞句削除 (Identical NP deletion)」の変形で、第 2 の「社会が」が消されて、表層構造ができたという解釈が成り立つ。

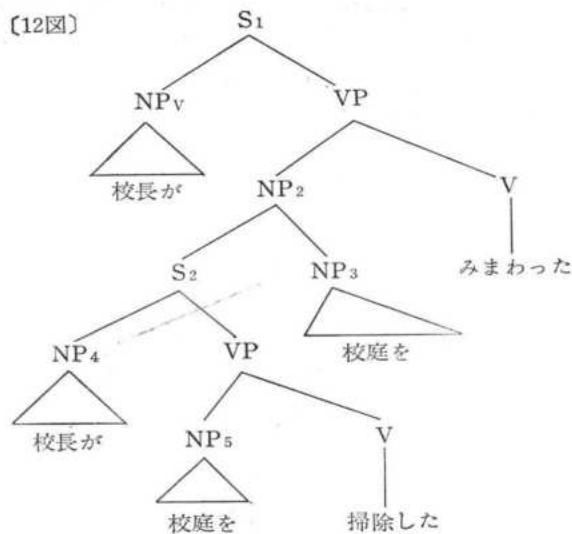
原文は次のようになつていて、一応この解釈と一致する。

Lastly, in societies which have patterns of joint responsibility for the acts of any family member it may impose special behavior upon the individual. (Ralph Linton, *The Cultural Background of Personality*, p. 71)

この文での「あいまいさ」は、同一名詞句削除によりとりのぞかれた NP<sub>4</sub> は、実際には関係節化の段階で削除されたものではないにもかかわらず、S<sub>2</sub> の主語であったようにも考えられるので、そこから生じたものである。

さらに、この同一の名詞の削除と、主語の省略の関係についてもう少し考えてみたい。次の例 [12図] を考える。

[12図]



⇒ 校長が校長が掃除した校庭をみまわった。

⇒ 校長が掃除した校庭をみまわった。

この表層構造だけをみると、「掃除した」のは、どうも校長ではなくて、誰かほかの人であろうと考えられる。校長が掃除をするよりも、誰かほかの用務員か、生徒かがする方がより似つかわしいと考える文化的背景があるのと、さらに、明確な主語を必要としないとき、someone にあたる不特定の主語は省略されるという現象が重なつてこの結果となるものと考えられる。すなわち、本来なら、同一の名詞句が重なつたために削除され

た「校長が」のかわりに、誰かほかのより適当な人を考えてしまつてゐるのである。もちろん、不特定であるから、誰とはっきりしているわけではないが「校長以外の人」という解釈が生まれてゐることに注目したい。これに対して、英語なら

The principal went around the schoolyard which he had cleaned up.

となって問題はない。日本語でも、強調の意味で、第二の「校長が」を「自分が」と代えてのこすこととは可能であるが、普通の場合には削除される。

ここにあげた 2 つの例は、第一が「連続する同一の名詞句削除」と「関係節化による同一の名詞句削除」の間に存在した「あいまいさ」であり、第二のものは「連続する同一の名詞句削除」と日本語の特長の「不特定の主語の省略」の間に生まれた「あいまいさ」の例とまとめられる。

この日本語の同一名詞句削除に関して、もうひとつつけ加えたい事柄がある。それは、削除されるのが、最初の NP ではなくて、embedded S の NP であることの証明となる現象である。同じ例をつかって、これをさらに大きな S にくみ入れることを考えてみる。

{ 校長が次のように述べた。

{ 校長が掃除した校庭をみまわった。

⇒ 掃除した校庭をみまわった校長が次のように述べた。

もし前記の tree の NP<sub>4</sub> の「校長が」が残っていたのであれば、これは embed された S<sub>2</sub> の一部であるから、上のように文法的な文はできないはずである。それをさらに証明するために、NP<sub>1</sub> と NP<sub>4</sub> が同一でなく、両者とも表層構造にそのまま残っている例を用いて実験する。

{ 校長が次のように述べた。

{ 教育委員は校長が掃除した校庭をみまわった。

⇒ \*教育委員は掃除した校庭をみまわった校長が次のように述べた。

NP<sub>1</sub> と NP<sub>4</sub> が両者とも表層構造に残っているときにも、NP<sub>1</sub> については、さらに大きな S へのくみこみが可能である。

{ 教育委員が次のように述べた。

{ 教育委員は校長が掃除した校庭をみまわった。

⇒ 校長が掃除した校庭をみまわった教育委員は次のように述べた。

ここでさらに気づくことは、助詞の「は」と「が」の問題で、「は」は、話題化の変形により、どの助詞でも、話題としたいときには「は」に変えて文頭に移動す

することができる<sup>5</sup>のは事実であるが、関係節に関しては、次のことをつけ加えられよう。すなわち、文の embedding により文頭にいくつかの層のそれぞれの主語がならぶとき、「… が…が」は「…は…が」となる。最初の NP<sub>1</sub> つまり S<sub>1</sub> の主語の助詞は「は」に義務的に変えられるのである。このために「は」は、S<sub>1</sub> の主語の助詞という感覚でとらえられることになるのであろう。

校長が掃除した校庭をみまわった。

の例文では、文頭に NP はひとつなので、「は」は要求はされないが、しかし「校長は」となった方が、よりよく感じられる。これも単なる「話題化」の現象というよりも、関係節の embedding との関係において、S<sub>1</sub> の主語を示すものとして、より明確な表現として、好まれ

るととらえるべきではないかと考えられる。

関係節についての問題点は多く、ほかにもいろいろと考えられる。関係事項として、関係節の部分的削除の問題——英語の -ing form, -ed form の使用に対して、日本語ではどのような表現が用いられているか、など——また、名詞化 nominalization の問題など、問題は多い。特に、関係節は embedded S として、sentence を扱うので、ありとあらゆる問題を含むといえよう。ここで取り上げた点のさらに深い検討、とりあげなかつた問題点など、さらに今後の研究課題としたい。

(津田塾大学助教授)

5) 中島文雄氏の1971年言語学会春の大会の講演による。

## ■ ELEC 近刊案内 ■

### 英語の測定と評価

*Testing English as a Second Language*

ジョージタウン大学教授 D. P. ハリス著  
E L E C 研修部次長 大友 賢二 訳注

外国语としての英語教育は、言語学、心理学、教育工学などの関連諸科学と深く関り合って激動を続いている。その中にあって、英語教授法の理論の検証は勿論のこと、学習者の能力・学力検査に関する知識はますます必要となってきている。

TOEFL の project director の経験を持つ著者の豊かな経験と Robert Lado, Rebecca M. Valette, John B. Carroll, Alan Davies などのさまざまな言語テスト観とを見ごとに総合した英語教育関係者必読の書である。

<内容> 第1章 言語テストの目的と方法／第2章 すぐれたテストの特性／第3章 文法構造のテスト／第4章 聴取識別理解のテスト／第5章 語いのテスト／第6章 読解のテスト／第7章 書くことのテスト／第8章 口頭発表力のテスト／第9章 テストの作成／第10章 テストの実施／第11章 テスト結果の解釈と利用／第12章 テストに関する基本的統計学

### 実践英語教育

E L E C 研究開発部長 山家保著

この本は英語教育実践の第一人者である著書が、各研究指定校・研究協力校などの先生方の協力を得て、過去20年間に亘って進めてきた実践研究の結果をまとめたものである。

古くは Henry Sweet, Ferdinand de Saussure から Harold E. Palmer, Charles C. Fries を経て Noam Chomsky に至る言語学発展の跡を辿り、実際に役立つものであればなんでも取り入れようとする応用言語学の一部門としての英語教育の姿がここに示されている。

豊富な研究・参考資料のほか著者が各地の実演授業で用いた教案が添えられている。

<内容> 第1章 応用言語学と英語教育／第2章 指導理論の言語学的背景／第3章 外国語の学習過程論の変遷／第4章 指導理論の心理学的背景／第5章 教材論の変遷／第6章 発音指導／第7章 文法指導／第8章 英語の理解のための指導／第9章 暗誦のための指導／第10章 応用練習の指導／第11章 Writing の指導／第12章 中学校英語の学習指導／第13章 高等学校英語の学習指導

## 『成層文法による意味論』

池上嘉彦著、三省堂  
x+237pp., 1970, ¥3,000

MIYAKE, Ko

三宅鴻

上掲の表題は外函および奥付けによるもので、正式の表題は *The Semological Structure of the English Verbs of Motion: A Stratification Approach* であり、イェール大学大学院に提出された博士論文の公刊、もとより全文英文である。著者池上氏は東京大学の助教授、人も知るごとく抜群の秀才で研究熱心であり、私の畏敬する学者の一人であって、stratification grammar (成層文法) の我国における第一人者である。著者はすでに『英詩の文法——語学的文体論』(研究社) によって市河三栄賞を受けており、学界での評価は定まっている。

成層文法は周知のごとく、1964年ごろアメリカの Lamb を中心として始まった最新の言語理論であり、その文法を駆使し展開しての本書は、学界の最高水準を示すものとして国際的評価を受ける価値があると信ぜられる。成層文法がすぐれているのは単に新しいからというのみではなく、既存の理論の欠を補いそれを克服しようとする試みにおいて多くの知見をもたらしつつあるからである。もとより学問の世界に最終的完成ではなく、すべて永久に発展する道程の里程碑たるものではあるとはいへ、現在の時点において成層文法的意味論（著者はこれを semology<sup>(1)</sup>と呼ぶ）は、きわめて新鮮なる角度から困難な問題に迫っており、その成果はすべての人々に共有されるべきものである。その意味で本書の公刊を喜ぶ。評者はもと成層文法を専攻せぬ者、書評は任重くして堪えがたきを覚えるが、求めに応じ最善を尽くす。誤解があれば著者に申訳なく思う。

なぜ成層文法がすぐれているかを述べておかねばならない。以下はごく大ざっぱな見取図で、学問的に不正確であることは私自身さえ承知しているが、大まかな位置づけを見ていただきたい。意味論には大きく分けて語彙に関する（「関する」であって「の」ではない）意味論と、文法に関する意味論があろう。文法に関する意味論の一つの古典的な例は中島文雄教授のそれであることは広く知られているはずであり、また変形生成文法は、文法と意味論の境界線を文法の方から押しひろげているから、文法と意味論の境界がどこにあるかがいま改めて

問われている。また語彙（正確に言えば lexicon、私は「辞彙」と訳する）と文法との境界はどこかについても、イエスペルセンの古典的定義以来、多くの試論が提出されており、定説として現在承認されているものはおそらくあるまい。しかし大体において lexicon に関する意味論は、grammar に関する意味論と、一応は区別することができる。池上氏の研究は、lexicon に「関する」意味論（意義論というべきか）の代表的なものであるが、ときに文法にも及ぶ。

池上論の特長の第1はこういうことである。意味論の今日の段階では、polysemy (多義), synonymy (同義), ambiguity (あいまいさ), connotation (非論理学的意味での「内包」つまり含蓄) などの問題を、とにかく体系中にとり入れうるものでなくてはならない。Green ideas というような結合は、異常な結合ではあるが、それを非体系的なものとし、かつ文法規則に反すると考える態度もあるけれども、これは意味論から見て特異である（しかしある場合には可能である）とする態度の方が、包容力が大きい。多義・同義の問題はのちに少し見る。とにかく池上論は、こういう問題を避けて通らず積極的に問題としている。Deviant な結合は、なにゆえに deviant であるかが説かれなくてはならない。それは理論の中核から自然に派生する（しかし文学的には基本的な）ものでなくてはならない。

第2の特長はこういうことである。ひとは walk の意義構造が 'go at the same time as stepping' もしくは 'go by stepping' であると聞くと、あるいは不謹慎にも笑うかも知れない。Fly はかりに 'go through the air' であるとして、なにゆえにそのように持つて廻った言い方をするのであるか、「飛ぶ」とすればすむではないかと。しかしながらこれは学問的にも、辞書作製上の理論

1) ギリシャ語 *sēma* ('sign') を根として作られた用語。意味論に最も広く用いられる名称 semantics は Bréal (1897), Cust (1900) による。また semasiology, sematology の名も提唱された。Semology は M. Joos (1958) が用いたが、早くは Noreen (1921) が始めかと思う。池上氏の semology はおそらく「意義論」である。

からも、英語教育上からも、正しくない態度であると言わざるを得ない。わたくしの属する学校の入試で、「今夜3人のお客様が見るので母は台所で支度に忙しい」という簡単な和文英訳を出題したところ、「お客様」(guests)に対して customers, passengers, clients その他の紛れが数多く出た。これは passenger = お客様, customer = お客様と覚えている受験生の欠陥である Guest とは invite された人であり、invite とは代金を要求せずに人に来てもらうことである、ということを受験生は心得ているべきである。今日の大衆教育時代には教育は一見分り切ったことでも徹底して心得させなければなるまい。学問的にはもとより、walk とか guest とかの意義構造を十分に解明することは、それが右から左へ教育に役だつものではないとしても、今日の重大なる問題である。将来は辞書も、このような意義成分を明らかにしたものでなければならない。かつて Michael West は、*The New Method English Dictionary* および *An International Reader's Dictionary* (ともに Longmans) において、1490語で2万4千の単位を説明することを試みたが、これは単にやさしいことばで言いかえたものであり、これから辞書作製と言語記述は、進んだ学問を応用しての構造の記述であってほしい。

多義と同義ということについてもう少し述べる。これは成層文法がなぜすぐれているかの説明になるはずのものである。

先ず、一つの単語 (word) に一つの（基本的）意義があるとする考え方がある。これは一見簡単すぎるようにも見えるが、現在でも服部四郎教授や國廣哲彌助教授がこの一単語一意義素という仮説に立って有益な成果を提示しておられる。服部先生はこういう意義素を sememe と訳しておられることのみを付け加えておく。

第2に、一つの形態素 (morpheme) に一つの意義素 (sememe) があるとする考え方がある。これは元来ブルームフィールドに出るもので、彼はヴァンドリエスの morphème と semantème という用語を根本的に修正したのである。形態素とはブルームフィールドでは、意味をもつ最小の言語単位である。たとえば authoress は one word であるが、明らかに author- と -ess という、それぞれ意味をもつ2要素から成っており、従って two morphemes であり、ということは two sememes であると、自動的にきまる。（ブルームフィールドを理解するためには、morpheme—sememe という lexical form の単位と、tagmeme—episememe という grammatical form の単位とを合わせ考えねばならないが、ここでは省く。ただし tagmeme— およびその構成単位 taxeme

一という考えは、ブルームフィールドおよびその直系の学派では、十分に発展されなかった。)

ところでこの考えは、一見整然としているが、“cranberry principle”の名で有名になった cranberry (ツルコケモモ) という単語 (one word) の、あきらかに形態素である cran- について、難点が生ずる。ブルームフィールドではこの cran- は、他の単語に現われないので「唯一形態素」と呼ばれるものであるが、この合成語にしか現われない以上 cran- だけの意味を決定することが経験上できない。あるいは逆に、give up (あきらめる、やめる, etc.) という成句 (いわゆる idiom) は、あきらかに give と up という構成要素の意義の合計からは推測できない、少なくとも一つの意義を有する。（それ故に idiom と呼ばれる）。ブルームフィールドはこの取り扱いに困り、言語学者はこの意味を evaluate できないと言っている (*Language* p. 276. ただしブルームフィールドは give up が “compound” だとは言っていない、池上氏の引用——p. 44——は不正確である。)

こういう構成要素上の難点を避けるために、すでに構造言語学者は lexeme (訳すれば辞素) という用語を発明し、give up は two words, two morphemes であるが one lexeme であるという取り扱いをする。しかし eye-doctor と oculist が、別の単語であるにもかかわらずほぼ同義である（池上流に言えば I've to see an oculist と I've to see an eye-doctor とは、同一の文脈に適用可能である）ということ（同義 synonymy の問題）などを回避するために、成層文法では、cranberry も give up もそれぞれ单一の lexeme であると考えるのみならず、さらに、lexeme と、sememe (意義素) というものは、別の次元（これを stratum—成層—と呼ぶ）に属するものであると考える。Lexeme は lexemic stratum に、sememe は sememic stratum に属するものとして一応両者の関係を切りはなす。Lexeme と sememe は一対一の関係をなさないことになる。これによってブルームフィールド以来、いなソシュール以来の難問であった、言語形式と意義とが背中合わせにはりつき、平行しているという考え方を、排することができる。正にこの点において、成層文法は新鮮かつ有益な視点を提供する。ソシュールにあっては signifiant (表わし) と signifie (表わされ) とが、またブルームフィールドにおいては morpheme と sememe とが、明らかに一対一に対応していた。これがさまざまの難点を生んだ。これでは学問の進歩は望めなかつた。

しからばその異なる次元（成層）は、どういう相互関係にあるのか。これが中心的問題である。話し手は、構

造言語学の用語を用いればいわゆる encoding behavior (コード化行動)において、意味から発してそれを形式 (lexeme から、ついには最下位の成層である hypophonemic stratum—音素下位成層一にまで及ぶ) に達し、聞き手はいわゆる decoding behavior において、その順序を逆にして意味に達する。従って sememic stratum (意義成層) は、lexemic stratum (辞彙成層) よりも「上位に」("above") ある。Sememe は、lexeme として "realize" (実現) される。 "... lexemes are 'realizations' of sememes; sememes, on the other hand, are 'realizates' (被実現体) of lexemes." (p.51)。このように二つの strata (成層) を、「実現する(される)」の関係でとらえ悪しき平行性を打破したところに、成層文法の、従って池上論の功績がある。

さて本書の内容の検討にうつる。前後したが本書は3部に分かれ、第一部では一般理論が、第二部ではそれを応用しての英語運動動詞の分析が、第三部では運動動詞という概念の拡張が説かれている。執筆の順序としては、「あとがき」によれば第二部が1967年に、第一部が1968—9年に、第三部が1969年に書かれた（その間に campus disputes がはさまる）ものである。読む上からは、評者は第一部の第3章、すなわち成層文法意味論の展開から始めて、逆に第2章（以前のアプローチの批判）と、第1章（従前の諸説）を読み、それから第二、第三部へと進むのが読みやすいと思う。前説の検討は、学問的作業からは不可欠であるが、ここでは第一部についてもっぱら第3章という中心のみについて語りたい。その前に一言、評者は成層文法について特に専攻しているものではないから、どこまでが Lamb その他の学者によるものでありどこからが池上氏の独創であるかを十分明瞭にすることができないのを遺憾とする（本書はその点を十分明らかにしていない）。しかし著者の Introduction によれば、運動動詞の意味論においても、一般に成層文法による意味論においても、従来の研究は乏しいというから、ここではとりあえず成層文法のアウトラインは Lamb により開かれたとはいえ、その意味論の詳細は池上氏の手によるものとして考察したい。さらに専門的 (technical) な批判はもっと Lamb に通曉した学者に任せるべきである。

池上氏は自らの方法を structural analysis としておられる。Structuralism というものは言語学的には多義なのであるが、アメリカにおける開祖である Bloomfield はすでに、形のみならず意味の distinctive features ということを考えていた (*Language* p.141)。しかしながら Bloomfield 自身も、linguistic meaning の "se-

mantic features" とはどのようなものであるかについて十分明らかにせず、いわゆる neo-Bloomfieldians は意味の研究を後まわしにすると称して事実上棚上げしてしまって、発展しなかった。Features の分析の変形生成文法による研究は、もとより Katz and Fodor のいまま古典的な論文 (雑誌 *Language*, vol. 39) に帰せられる。成層文法による Lamb の意味論は、雑誌 *American Anthropologist* 66(1964)に見られるが残念ながら評者は閲読の便を得ていない。しかし池上論の中心をなす componential analysis (成分分析) (これを池上氏は "a network of fundamentally taxonomic structure" —p. 62 —と呼んでおられる) の大綱は、入手しうる文献である Lamb, *Outline of Stratification Grammar* (1966) でもまことに簡単に述べられている (2ページのみ) に留まり、おそらくは池上氏の独創である面が大きかろう。

先ず一般論として、一对一の関係に立たずに別々の成層に属する sememes と lexemes の間に、原則として二つのタイプの関係、diversification (分化) と neutralization (中立化) とがあるとする。たとえば意義素 'big' が、二つの辞素 big と large として実現されるとき (これは big と large が完全に同義であるということではない), これは「分化」の例である。また、二つ以上の意義素が一つの辞素として実現されるとき (例えば意義素 'big' と 'important' が辞素 big として実現されるとき), これは「中立化」である。さらに、(一つの意義素が複数の辞素の結合として実現されるとき、すなわち 'start' という意義素がその可能な実現の一つとして set off という辞素をもつとき set off は二つの辞素から成るから<sup>(2)</sup>、すなわち idiom であるから、これを composite realization (合成実現) とする。逆に, 'human' と 'female' という二つの意義素が単純辞素 woman として実現されるとき、これと portmanteau realization —かばん実現<sup>(3)</sup> —という。)これらが sememic stratum の realization structure (実現構造) を成す。 (Composite realization と portmanteau r. とは Lamb 上掲書にあるが、分化と中立化は Lamb の1964年論文に詳しく述べられている)。

2) 池上 p.52. ただしこの説明は不正確である。Lexeme (辞素) というものの定義上, set off は one lexeme とすべきである。それが二つの単語、さらには二つの形態素から成るということは、次元の異なる問題としなければならない。

3) 元来 Lewis Carroll に出る portmanteau word というのは、ふつう二語の一部ずつをとって一語としてかばんのごとく折り合わせたもの。例 brunch < breakfast + lunch.

各意義素はそれが結合しうるある範囲の意義素をもっている（それが「通常」結合しうる、とすべきである）。例えば意義素‘go’は、‘thing’意義素（animate or inanimate）と結びうるが、意義素‘walk’は、意義素‘human’あるいは‘higher animal’とのみ結合でき、‘flow’は‘fluid’（流体）意義素とのみ結合できる。ある意義素の結合許容の範囲は semotactics（意義素結合論）により定義される。

さて次は最も重要である。池上氏は問う、

(1) 二つ以上の辞素が同一の意義素の実現であるとなしいう規準はなにか、(2) 二つ以上の意義素が同一の被実現体であるとなしいう規準はなにか。この規準を、少し補って解説すれば、池上氏は substitution<sup>(4)</sup>（置換）と collocability（結合可能性）とに求める。

The boy (→dog) is dead / The boy (→dog) walks, ...

The boy (→child) is dead / The boy (→child) walks, ...

The eye-doctor (→oculist) is dead / The eye-doctor (→oculist) walks, ...

この3系列は、(1) 置換しても言語学的に承認されうる、という要求をいずれもみたしている。しかし、(2) 置換のうち同一の situation（すなわち non-linguistic context）<sup>(5)</sup>に適用可能である、という条件は2と3しか満たしていない（a boy はつねに a child であるから）。しかし、(3) 置換は両方向に symmetrical にはたらるべきである、という条件は第3のものしか満たしていない（a boy はつねに a child であるが、a child はつねに a boy とはきまらない、それに対して eye-doctor↔oculist はどちらからどちらへ交換してもよい）。この3条件をみたすもの、すなわち辞素 eye-doctor と辞素 oculist のみが、同一意義素の実現である。この3条件は池上氏の独創と信ぜられる。

さて eye-doctor と oculist とは、（ほとんど）すべての contexts で相互に交換可能であるが、ある contexts でのみ交換可能であるものもある。

She is my big (→elder) sister.

It is a big (→\*elder / →large) rock.

（ここで→\* は交換不可能をあらわす。すなわち big は親族に適用されたときのみ elder と交換可能である。親族に適用されないときは large と交換可能である。このとき big<sup>1</sup> と elder とのペアはある一つの意義素の実現であり、big<sup>2</sup> と large とはべつの一つの意義素の実現であるとする。この二つの意義素は辞素 big において中立化されている。これを「多義」とする。）

さて cyanic という辞素は、a cyanic flower という context では blue と交換可能である。しかし a blue dress は a\*cyanic dress とはならない。これは一見上記の big の例と似ているが、big はある context では elder, ある context では large という別々の交換可能な辞素をもつて対し、blue は cyanic と交換可能な context を除いては、べつの交換可能な辞素をもたない。（その上、native speaker の直観は blue flower と blue dress の二つの blue は意味が異なるものとはしない）。このとき blue と cyanic はもう一つ上の成層の“eme”（素）に関係づけうるものとし、この成層を hypersememic stratum という。（すなわち同一の hypersememe—超意義素—により実現されるとすると解せられる）。

さてこの場合、cyanic は、blue の実現的特徴（realizational feature）と同一の実現的特徴をもつて加えて、ある種の tactical feature（結合論的特徴、dress とは結合せず flower とは結合するごとき）を有する。すなわち cyanic は ‘flower’ という結合論的特徴をもつ。同じく gallop は ‘horse’ という結合論的特徴をもつ。しかば drive における ‘by a car’, fly における ‘in the air’ という特徴も、同じく結合論的なものか、それとも実現的特徴か。池上氏は、(1) 一クラスの特徴が、他のある特徴のクラスを前提する（presuppose）ならばそれは後者の実現的特徴であり、逆に前者が後者に前提される（presupposed）ならば後者の結合論的特徴である、という見分け方を提出しておられる。この、前提する、されるという関係は常識でもって考えるほかはあるまい。

Lexemic stratum において、lexemes はその privileges of occurrence（構造言語学の用語である）によっていくつかの lexotactic classes（辞彙結合的クラス）に分たれる。Arrival, beauty などはいわゆる「名詞」に、arrive はいわゆる「動詞」に、beautiful はいわゆる「形容詞」に配属されている。これを池上氏は、‘arrive’ という意義素が lexemic stratum では arrive と arrival によって実現されると説く。その両者の撰択は全く、辞彙配列論的に（lexotactically）定義される位置に依存している（三宅言う、たとえば they—late では arrival でなく arrive が立つ）。このようにして、‘rapid’ とい

4) 周知のごとく元来 H. E. Palmer（パーマー）の用語である。しかしふーマーでは substitution は I can / could /may/must/ought to see him. のごとく、文法的 pattern を変えずに置換することを指した。池上氏のいうのは同一意義をもたらす置換である。

5) 池上氏は context を linguistic context（言語的背景）と non-linguistic c.（非言語的背景）に分け、後者を situation と呼ばれると見られる

う意義素に対して *rapid*: *rapidly*: *rapidity* という三幅対の辞素がある。そこで池上氏は、名詞・形容詞・動詞などの辞彙配列論的クラスに対して、「thing」、「event」、「quality」、「degree」、「quantity」などの意義素的カテゴリーを立てることは「有用であろう」と言う。しかしそれは「本書の主要関心事ではない」からとして検討を省いている。これは賢明な制限であって、この問題、たとえばある事象が意義素的に「thing」であるか「event」であるかというような問題は、認識論的問題を呼び起こす可能性があり、それは池上氏の関心の外にあろうからである。

さて意義素「child」は、意義素「boy」よりもヨリ一般的な性質のものであることは明瞭である。すなわち「boy」+「child」+ $\alpha$  である。この  $\alpha$  がなにかは「boy」と「father」という意義素を比較すれば分る。Male boy とか male father とかの結合が redundant (過多) であるのは平行している。従って  $\alpha$  に対して「male」という価値を与えることができる。「Boy」=「child」+「male」である。さてこの「child」という意義素は、an adult child が incongruous (不整合) であるところから、「child」=「human」+「young」<sup>(6)</sup> であるとわかる。つまり最終的には「boy」+「human」+「young」+「male」である。これが「human」+「young」+「male」であるかは、「human」+「young」+「male」であるかは、p. 64 の図示で解決されている。つまりどちらもあるのである。

ここで用いられた「過多」および「不整合」というテクニックは、次のような例で明瞭である。

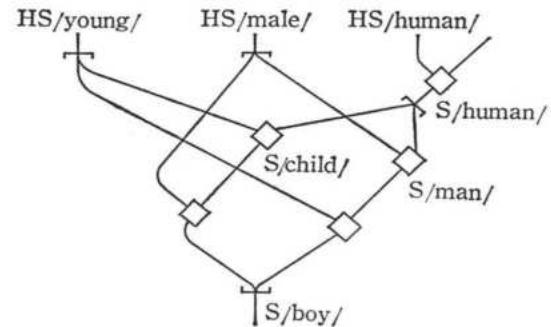
\*He advanced backward.

\*He hurried rapidly.

明瞭に前者は incongruous であり、二つの相容れない意義素が結合している。後者は redundant であり、*hurry* という辞素のなかにすでに「rapidly」という意義素が含まれている。

重要なことは sememe とは池上氏では、必ずしもそれ以上（その性質を保った上で）分割不可能な単位ではなく、sememe がさらに sememes に分析される場合もある。たとえば、「child」=「human」+「young」、「boy」=「child」+「male」である。Child にはまた親に対して子という意義もあり、これは「child」=「human」+「descendant」+「first generation」+「lineal」、また「son」=「child」+「male」となるであろう。つまり、一つの意義素が一つの taxonomy (定訳がない、Frake, Conklin らの人類学者が用い出したことばを Lamb がとり入れたものである)<sup>(7)</sup> 以上に属し、全体は network (網目状) となる。これが上述の “a network of fundamentally tax-

onomic structure” の表わす意味である。これを理解するには Lamb の理論(主に文法論である)を先ず理解解説せねばならないが、池上論では sememic network は taxonomic representation で示されているので、その簡単な例を一つだけ示すことにし、あとはことばで解説する。「Boy」は、上述のごとく ('human'+ 'young') + 'male' でもあれば 'human' + ('young' + 'male') でもあるが、これは図示すれば次のように三つの hypersememes(超意義素) から作られている (HS=hypersememe, S=sememe):<sup>(8)</sup>



すなわち sememe/boy/は二つの taxonomic 構造に属し、一つは sememe/child/に、他は sememe/man/に支配されている。

これは実現的特徴の図示であるが、通例はこれに tactical range (配列の範囲) を示す図が加わる。Tactical range とはある意義素と結びつきうる一組の意義素を言う。この tactic range がまた複雑な taxonomy を示す。詳細は省く。たとえば drink が drink alcohol と同義である場合、通常は意義素「drink」の配列論的特徴(結合しうるもの)として前提されている「alcohol」という意義素が、「drink」一つの意義素の中に組み入れられている。これだけの事実でも、これを図で表わすと本書 p. 73 の図のように複雑な network となる。

本書で私の最も興味を覚えたのは14節に展開された synonymy(同義)、polysemy(多義)、hyponymy ('boy' が 'child' の意義素+ $\alpha$  であるような関係)、antonymy

6) 'Human being' と 'youngster' であろうというような批評をすべきではない。意義素といふのは上述のように品詞といふ lexemic などとは次元が違うから、「human」と「young」で良いのである。

7) 元来人類学では、動植物の名のごとく植物・動物学で taxonomy (分類学) が学問的にきまっているものに対し、クジラをドイツ語で Walfisch) 'whale-fish') というがごとき民間の分類を folk taxonomy と呼んだ。この通俗分類学は、科学的分類学に対して当然、荒っぽく重複もあり欠陥があるが、一般人の文化を知るには重要である。池上氏は Lamb にならってこれを応用して意義の関係構造を taxonomy と呼ばれたと見られる。

8) この図を完全に理解するためには Lamb, Outline, pp. 9 ff. を参照しなければならない。簡単に言えば「大」の字式記号は、UNORDERED の OR の関係(つまり多義)を示す。

(反義) (池上氏はこれを3種に大別する), markedness vs. unmarkedness (*unmarked* とは一般的意義と特殊的意義——「人」の *man* と「男」の *man* のごとき——があいまいであるもの), redundancy (過多), amplification (*pierce the cushion* が *pierce through the cushion* というように amplify されうる場合), collocability (前述), incongruity (前述), substitutability (前述), paraphrase (synonymy という概念の拡張, *pines are planted on the ground* は *the ground is planted with pines* とパラフレーズされる, 通常のいわゆるパラフレーズとは異なる), ambiguity (*man* が any human being とも a male human being とも解しうる場合, すなわち performance<sup>(9)</sup> のレベルでの多義), vagueness (performance でなくシステムとしての言語自体における不確定性. *Steal* は運動動詞としては 'go quietly' とも 'go secretly' とも記述しうる), connotation (含蓄), field (場) など, 教育にも文学にも重要な概念であるものの取り扱い方である. ことに field という概念は, おそらくドイツの *Feld* (*Wortfeld, Begriffsfeld*) という古い概念に新しい展開を与えたもので, 専門的には詳細な検討を要求されるが, 紙数がなく割愛する. これは英詩の文法とラムの理論との双方に精通した著者でなければ考えつかなかつたであろう内容をもつ.

さて第二部の実践論へとうつる. 著者は先ず第二部第1章で verbs of motion を定義することから始めているが, 場所移動をさす動詞と定義しても, なお明瞭に範囲の定まったグループではないことが述べられている. 議論をかりに別として, 著者の扱う運動動詞とはたとえば, come, go を典型として, drop, enter, jump, gather, precede, separate, steal (こっそり進む), stray, turn など百数十に及ぶ. その中には運動全体よりは運動の特定の部分に言及するもの, 運動以外の特徴が強調されているものがある. またたとえば Prices rise (物価はある)においては, 本来運動の不可能な抽象物が比喩によって運動するものとして扱われている. この種のものは, 運動の概念の「拡張」として別に論ぜられている.

さて第二部第2章の, 英語の運動動詞の一般的分析は非常に綿密精緻で, 池上氏の力量を最も良く示しているから, 繁をいとわずその所論を紹介する. 運動とは動くものと動き方を含み, そして言語上は主述関係で表わされるのが典型的である. そこでまず:

The stone moved. .....(1)

The man moved. .....(2)

He moved the stone. .....(3)

He moved the man. .....(4)

(1)は石の場所移動を示すが, 石が自発的に運動するとはふつう考えられないから, (1)はその運動が他のなにかによって cause されたもので, 従って(3)と連関する. 同様に(2)と(4)とが連関しそうに見えるが, 実は(2)は(2a)その男が自発的に動いた場合と, (2b)押されるかして何か他のものによって動かされた場合とがある. (4)はゆえに(2b)としか連関しないであろう.

辞彙論的には (lexologically), (1)——(4)の各文は主語・述語という用語で説明されるが, 同じ主述関係でも意義論的には (semologically) 上記の4つの文は異なる構造をもつ. そこで先ず概念として agent (作用体) つまり自発的に (voluntarily) 動くものと, ergatum<sup>(10)</sup> (被作用体) つまり自発的に動かず動かされるものと, initiator (起因体) つまり運動を起させるものと, はじめに3つの要素を仮定する. そこで

*The stone* (ergatum) moved.

*The man* (agent or ergatum) moved.

*He* (initiator) moved *the stone* (ergatum).

*He* (initiator) moved *the man* (ergatum).

となることは上の説明から明瞭である.

さて(3)(4)を次の(5)(6)と比較する:

He caused the stone to move. ....(5)

He caused the man to move. ....(6)

第1に, (3)と(4)では 'he' とは石や男に実際に作用を及ぼした人であってつまりそれを動かしたのであるが, (5)(6)では 'he' は initiator ではあってもだれか別の人にその運動を起させた (自分では動かさなかった) もかも知れない. そこで(3)(4)の immediate causer (直接原因体) と, (5)(6)の [ある場合の] non-immediate causer (非直接原因体) とを区別することができる. 第2に, たとえば(6)は 'he' が運動を起させることについて [自分が動かしたにせよ人にやらせたにせよ] 積極的役割を果たした場合と, 果たさない場合とがある. 果たさない場合は, *the man* が, 会いたくない人を見て動いたような場合で, これは会いたくない人はやはり initiator ではあるが, 動作を起こさせるようには行動していない. この後の場合を ergatic initiator (被作用体的起因体) とし, (5)(6)のある場合がその例であり, また(3)(4)と, (5)(6)の他

9) チョムスキーの用語. 彼は competence (言語行使能力) と performance (実地運用) とを区別する. ほぼラングとパロールの別とは違う.

10) 明らかにギリシャ語 *ergon* (名詞, 'work') と, ラテン語 -atum (動詞第一変化完了分詞中性形) の結合で, hybrid formation (混種形成) である. ラテン語だけで純種に形成すれば *actum* (<*agere*>) であろう. 池上氏によればこの混種形成は, ergatic という形容詞形が作れるから用いたという.

の場合とを、agentive initiator (作用体的起因体) とする。

第3に、(4)では *the man* は non-voluntary (非自発的) であるが、(6)では *the man* が非自発的の場合と、起因体 'he' が *the man* が自発的に動かざるを得ないよう計らった場合とがある。 (4)の *the man* は ergatum であり、(6)の *the man* は ergatum or agent となる。そこで：

*He* (Ag. In. and Imm. Cau.) moved *the stone* (Er.).

*He* (Ag. In. and Imm. Cau.) moved *the man* (Er.).

*He* (Ag. In. or Er. In.) caused *the stone* (Er.) to move.

*He* (Ag. In. or Er. In.) caused *the man* (Ag. or Er.) to move.

Agent も agentive initiator も、辞彙論の成層では subject, object. あるいは by-phrase で示される：

*The man* (subj.. ag.) walked.

*The man* (subj.. ag. in.) walked *the horse* (obj., agent<sup>11</sup>).

*He* caused *the man* (obj., ag. in.) to walk *the horse*.

*He* was kicked by *the horse* (prepositional obj., agent).

*The horse* was walked by *the man* (prep. obj., ag. in.).

そこで次のまとめを得る：

	被実現体	と共に
'agent'	voluntary	subj., obj., by motion
'agentive in.'	voluntary	" cause
'ergatum'	non-vol.	" motion
'ergatic in.'	non-vol.	" cause

ここでは証明を略するが agent と agentive initiator の差は還境の違いに帰しうるもので、これをまとめて新たに agent と呼び直す。しかし ergatum と ergatic initiator はそのように一つにまとめられない。Ergatic initiator は、非自発的である点で ergatum に類似し、実現が motion である点で agent に類似する。そのため cause に 2種類を認め、cause<sup>1</sup> は agent をとり、cause<sup>2</sup> は ergatic initiator をとるときめる。

そこで、議論をはしょれば、次を得る：

Agent + Motion : *the man jumped*

Ergatum + Motion : *the man fell*

Agent + Cause<sup>1</sup> : *the man jumped the horse*

Agent + Cause<sup>1</sup>/Cause<sup>2</sup> : *the man caused the horse to jump*

そこで、前の 6 文を次のように訂正分析する：

*The stone* (Er.) moved. ....(1)

*The man* (Ag. or Er.) moved. ....(2)

*He* (Ag.) moved (cause<sup>1</sup>) *the stone* (Er.). ....(3)

*He* (Ag.) moved (cause<sup>1</sup>) *the man* (Er.). ....(4)

*He* (Ag.) caused (cause<sup>1</sup> or cause<sup>2</sup>) *the stone* (Er.) to move. ....(5)

*He* (Ag.) caused (cause<sup>1</sup> or cause<sup>2</sup>) *the man* (Ag. or Er.) to move. ....(6)

さらに、結論だけ見れば、運動動詞には大きく見て次の 3つのタイプがあることになる：

(1) 'agent' のみをとるもの : walk

(2) 'ergatum' のみをとるもの : fall

(3) 'agent' か 'ergatum' かどちらかをとるもの : move  
また、'cause' については、cause<sup>1</sup> (自発的 initiator をとるもの) はふつう単独の causative な運動動詞として lexical に実現され、一方単独の causative verb (例 to cause) は、cause<sup>1</sup> と cause<sup>2</sup> を中立化する。Cause<sup>1</sup> は by-phrase でも表現できるが、cause<sup>2</sup> は because, because of の clause, phrase で表現される。つまり、*He made the man to move away* では 2種の cause が中立化されているから、これは

*The man* was made to move away by him.  
(cause<sup>1</sup>)

*The man* moved away because he [sc. some other man] was present etc. (cause<sup>2</sup>)

と区別できる。Cause<sup>2</sup> とはふつう reason と呼ばれる。

その他 'goal' その他の要素の説明は省き、最終的に運動動詞の分析に必要な要素 [sememes] は次のとおりとされる：

義務的要素 : Agent or Ergatum + Motion

撰択的要素 : { Agent + Cause  
Various Specifying Elements }

そこで典型的意義構造は

(Agent + Cause (+Specifying Elements) + )Agent/  
Ergatum + Motion (+Specifying Elements)

ここには変形文法のテクニックが巧妙に生かされていることに読者はすぐに気づかれるであろう。

こういう道具を用いて運動動詞百数十が 17 のタイプに分けて論じられる。一例として分りやすい「方向」の成分を含むものをとる。'Downword', 'Down' の成分をふくむものは次のように分析される：

/descend/ : 'go<sup>1</sup>' + 'toward'/'to' + 'down' (+ 'on')<sup>12</sup>

11) 馬は「歩かされた」のであり、「歩いた」のは馬であるから馬は agent である。

12) He descended the tree (木を降りた) と He descended on the ground (地面に降りた) と両方可能である。

これは *descend* と実現される。

/fall/: 'go<sup>1</sup>' + 'toward'/'to' + 'down' + 'free'//Ergatum

これは *fall* と実現される。

/drop/: 'go<sup>1</sup>' + 'toward'/'to' + 'down' + 'free' + 'momentous'//Ergatum

これは *drop* として実現される。

/drip/: 'go<sup>1</sup>' + 'toward'/'to' + 'down' + 'free' + 'momentous'//Ergatum ('liquid')

これは *drip* と実現される。

/sink<sup>1</sup>/: 'go<sup>1</sup>' + 'toward'/'to' + 'down' + 'free' + 'slow'//Ergatum

これは *sink* として実現される。

(水の中に沈むのをさす *sink* はべつとする。上記は The sun sank in the west のごとき場合のみである)。

一番分りやすくかつ有益なのは方向(到達)を示す動詞のうち *come* と *go* の比較であろう。初步的に *come* は一・二人称のところへ進むことを言い *go* はその他の場合とされるが、実情はそのように簡単ではない:

I came to you. (1) \*I went to you. (1)'

I went to him. (2) I came to him. (2)'

You came to me. (3) \*You went to me. (3)'

You went to him. (4) You came to him. (4)'

He came to me. (5) \*He went to me. (5)'

He came to you. (6) \*He went to you. (6)'

He went to her. (7) He came to her. (7)'

つまり到達点が第1・第2人称の場合は *come* が義務的であり、第3人称では *go* と *come* が交替する。また

He told me I should come to him.

He told you you should come to him.

She told him he should come to her.

これらの文で、*told* した主体が訪問する相手と同一人なら \**go* でなく *come* でなければならない。これは直接話法の *come* をそのまま間接話法で残すからである。

第二部第3章では「記述の問題」として、運動動詞の構造分析を行なっている。第三部では、運動の概念を拡張して *give*, *receive*, *have* などの授受の動詞やさらに *see*, *hear*, *look*, *listen* などをも扱っている。これは元来 *motional* でない動詞を、運動動詞の場合をモデルにして分析しうる可能性を示すものとされる。

余りに長くなるので紹介はこの位にして、書評子の責務の一部である批判にうつる。本書のような開拓的業績にないものねだりをするのは、簡単ではあるが有意ではない。しかしこの諸点は私も読者と共に考えたいと思う。

第1はとくに第一部で述べられている extralinguistic

(言語(学)外的) ということばである。すでにイエスペルセンは notion の世界を extra-lingual と呼び、言語学(文法)は form と notion の相会うところ(function もしくは morphoseme) に成立するとした。構造言語学(neo-Bloomfieldians)ではこの function に当るものとを言語学プロバーの領域とし、これを microlinguistics と呼び、phonetics は prelinguistics(前段言語学), semantics(意呼論)は metalinguistics(後段言語学)とされて、意味論は microlinguistics つまり狭義の言語学からしめ出された。その結果は意味の研究がおろそかになり、形式一点ばかりのつまらない言語学が生まれた。変形文法によってこの弊が除かれかけているが、池上氏は成層文法を中心として、新たに意味論(意義論 semology)を再建しようとしておられる。池上氏によつて semology は intralinguistic(言語(学)内的)のものとなつてゐるのであるが、しかば意味の広い世界において、どのようにして言語内と言語外の意味を分かつかが当然問題になる。池上氏によれば lexeme と sememe の一対一の関係は否定された。そのことは正当であるが、しかばどこまでが sememe でありどこからが nonsemological であるか。

おそらく池上氏は、イェルムスレウ的に言えば content の form が sememes である、semology は etic な世界でなく emic<sup>13)</sup> な世界を扱うのであると言われると思う。しかばその意味における emic な世界(意義論)が成立するためには、sememe 設定の手順が明らかになる必要がある。池上氏はそれはるとして述べた、substitution と collocation がそのテストで、最終的には native speaker の intuition(直観)がきめ手であると答えられるであろう。それでは本書第二部でその手順によって sememes が抽出されているかといえば、記述の便宜からかそれはなされていない。もしこれを行なうとすれば記述は膨大なものになるから、池上氏は直観的分析をなされたものと思う。しかし数例でよいから手順をふんだん分析を示してほしかった。そうでないと semology の分析が、結局は semantics つまりふつうの意味論を深化したものとなり、それならばそれでよいのであるが、池上氏の意図のように intralingual な emic なものとなることが示されないのである。なにも愚直な構造言語学のように手順ばかり物々しくせよとは望まないが、もし emic な sememes の世界が意味一般につなが

13) Phonetics(音声学)と phonemics(音素論)との差を土台として、etic な continuum(連続体)の世界と、emic な discrete な(離散的な、一つずつはなれた)単位の世界とを分つのが構造言語学である。

って分れないとすれば、むしろ問題は然るべき心理学によって形式を全くはなれた面から lexeme との対応関係を見ればよいことになる。池上氏はそれを望まれないであろう。Lexeme との関連においてのみ sememe が立てられているからである。これはまことにむずかしい、根本的な課題である。

第2に、これもまたむずかしい注文なのであるが、著者はこの本で国際的水準を抜きんでた学位論文を書いている。従って当然、初学者はこれを読むのに難儀し、私の望むように英語教育界にこういう精密な意義論が応用されるようにとの希望は俄かには実現されがたい。Explorer と popularizer は元来別の才能であるという説に私はおおむね同意はするけれども、私は敢て著者に、英語教育界のために不正確になる犠牲を払ってでも一般向けの edition をも作って頂くよう望みたい。これを言うのは戦後の言語学の急速な驚異的な発展が、英語教育界に十分生かされていないうらみがないわけでもないからである。

しかしながら同時に、読む方も寝ころんで読んでも頭に入るような怠惰を望むのは賛成できない。単なる常識ですっかり理解できるほどいまの学問は水準が低くない。術語や図表が多くて formidable であるとして食わず嫌いの人がとかくあるのであるが、これは学界の進歩のために好ましくない。記述言語学も戦後ようやく学問としての体系をとり始めた。読者は手っとり早い早わかりを望まず、地道にソシュール、ブルームフィルード、ホケット、イエルムスレウ、チョムスキー、ラム（後述）などを順を追って学ぶことが望まれる。著者と読者のこのような呼応があって始めて、学界は大きく前進するのである。

私はあまり本書に注文をつけたくはない。それは本書が、成層文法を中心とし、変形文法や構造言語学や人類学のテクニックを取り入れて、独自の体系と実地分析を提供している点において優に国際的水準に達しているからである。日本の学界からこのようなすぐれた研究が出たことは同国人として誇りに思う。聞けば本書には海外から書評のための注文があるそうである。私はそのような海外の書評を読んではいないが、おそらく反応は好意的であろうと思う。細かい注文はさらには正して行けばよいのであって、私は未開拓の荒野に敢て道をつけたこの優秀な頭脳に高い尊敬を捧げる。これは大正元年の故市河三喜先生の『英文法研究』以来、我国でなされた研究のうち最高水準のもの一つであると信ぜられる。

翻って英語教育から見れば、従来の教育はとかく drop=落ちる、drip=したたるというような対当語によ

る言いかえが多かった。しかしこれが不十分であることは冒頭で述べた。日本語の動詞に、英語と意義素を全く同じくするものはあっても稀であろうから、学ぶ者は英語の意義が分らず日本語訳で考えてしまって誤りやすいのである。英英辞典もしかし、start=begin, start=set out on a journey のごとく言いかえが多い。これは結局どこかで堂々めぐりになってしまう。Begin とか set out とかの規定を、しっかりとかつ生徒に分るように記述しそれを教育に（生のままでなくとも）応用しなければいつまでも理解が不完全になる。心ある英語教師はみなそのことに気づいており、池上氏の著書のごときはその方向に、ひいては十分に意義を記述した辞書の作製の方向に、大きな刺激となると信ずる。

最後に一般の例にならって、誤植を述べる。一見して明瞭な agrue (p. 2, →argue), obejct (p. 87, →object) のごときは指摘する要もないが、次のようなものは理解にさしつかえる。P. 61 の 'boy'+'child'='male' は、'boy'='child'+'male' でないと話が通じない。P. 63, l. 18 の s/X+z/ は、s/X+y+z/ ではなかろうか。P. 71, l. 14 の serve は serves であろう。P. 100, l. 13 の to moved はむろん to move である。P. 128, l. 10 右側の went は came ではないのか。（追記。以上の指摘はすべて池上氏の御同意を得た。）

以上、私の理解は必ずしも十分とは言い難いけれども求めに応じ最善をつくして本書の特徴を述べた。批判でなく紹介が主になった理由は明白である。成層文法についての常識が本書理解のために必須であるが、Lamb はいきなりは読みにくい。幸い雑誌『言語研究』第57号に、湯川恭敏氏による概説がある<sup>14)</sup>。本稿のうち realization とか stratum とかについて、この論文は解説している。ただし成層文法自体、構造言語学の levels の問題を、変形文法による否定からさらに進んでっと深化して復活したところがあるから、研究はさらにさかのぼるのである。私は本書を読む機会を与えられて大いに有益であったので著者の勞に感謝し、さらに池上氏が次の深化へと進まれることを希望し、読者諸賢には本書を通じて英語教育の前進に寄与せられることを切に望む。

（成蹊大学教授）



14) ただし、Lamb の意味論に対する湯川氏の批判は、本質的なものでなく私は賛成することができない。

## 『図説日本の洋学』

惣郷正明著 築地書館刊  
丸善発売, vii+343 pp., ₩ 2,300

OMURA, KIYOSHI

大村喜吉

惣郷（そうごう）正明氏の『図説日本の洋学』が出版された。日本の洋学に関心をいだいている日本人の1人として心から拍手を送りたい。まことに本書は色々な点においてユニークな特色を持っている。

いま「洋学」という言葉を大槻文彦の『大言海』でひくと、

やうがく（名） | 洋学 | [和学, 漢学に対する] 西洋の学問。特に、西洋の語学。

と出ているが、日本においてこの洋学という言葉がいつ頃から用いられたものかを示す用例はない。いつも感ずることだが、日本にイギリスの OED に相当する辞典のないことはまことに残念である。ヘボン (Hepburn, J. C. 1815—1911) の有名な『和英語林集成』(慶応3年, 1867年初版) には「蘭学」は The study of the Dutch language or books.——と与えているが、「洋学」はのせていない。いまたまた手もとにある岩波文庫の『吉田松陰書簡集』(広瀬豊編)を開くと、松陰が獄中から「某に興へて斎藤貞甫に伝ふ」という安政2年(1855)某月12日付の書簡の中に「返す返すも洋学専要に奉存候」という文句が見える。「洋学」という言葉はやはり幕末ごろから用いられたものであろう。なお現在朝日新聞に連載中の『花神』の中で司馬遼太郎氏は「この長州藩が出した不世出というべき思想家の吉田松陰でさえ、洋学の必要を感じ、それを学ばねばならぬとみずからを責めつつも、ついに学ばなかった」と書いているが、その進歩はかばかしいものでは決してなかったが松陰はオランダ語の稽古を始めていたのである。

著者惣郷氏は本書に寄せて言う。

「洋学関係の古書を集めはじめて35年、約1500点近くになった。

洋学は、いまの語学よりも、もっと広い『実学』であった。

天文、医薬、農工、兵学から、教育、政治と、自然・人文の科学全般にわたり、日本の文化を進め、産業を起こすためのオランダ語・英・仏・ドイツ語による学問であった。

日本近代化の原点であった洋学に、幕末・維新前後の動乱のさ中で、立ち向っていった先覚者たちの熱い息吹きを、これらの古書の中に感ぜずにはおれない。

35年の漁書歴をふり返ると、戦前までは、古書店の和本の中から洋学関係の本を探しだせたが、ちかごろは和本がある店もまれで、語学専攻のひとびとでさえ、こうした古書に接する機会が少なくなってしまった。洋学史については、すでに多くの論考があり、私ごときが、いまさら加える物はないが、満足な辞書も参考書も乏しかった時代に、体を張って横文字にいどんだ先覚者たちの気魄を再現できればと、原資料を基にして編んだのが、この小著である。」

これまでにもたしかに洋学の伝来と発達を記述した著作はあった。これをせまく、英学史の畑にだけ限るとしても、太平洋戦争前においてすでにわれわれは荒木伊兵衛氏の『日本英語学書志』(昭和6年4月), 竹村覚氏の『日本英学発達史』(昭和8年9月), 桜井役氏の『日本英語教育史稿』(昭和11年3月), 豊田實博士の『日本英学史の研究』(昭和14年2月), 重久篤太郎氏の『日本近世英学史』(昭和16年10月)などの専門書をもっていた。しかしこの「洋学先覚者たちの気魄」を再現するという段になると、果してどういうものであろうか。私自身K社から明治100年を機に『日本の英学100年』の編さんを依頼されたとき、痛切にこの思いを新たにさせられたものだった。それだけいっそこの『図説日本の洋学』の成功を心から称賛せざるを得ない。

さらに本書にはもう一つユニークな点がある。それは日本における印刷技術の発達史という側面(これはあるいは正面というべきかもしれないが)から「日本の洋学書」を取り扱っていることである。著者の「序」のことばを借用すれば「日本紙に毛筆で丹念に写したオランダの文法書」「4万語に近い単語を一つ一つ木版に彫りつけて出版された英和辞典」、それこそ「手彫りの木版、銅版、初期鉛製活字から返化まで、タイポグラフィの資料」として本書の技術史、科学史への貢献も大きい。すすんで本書には幕末の洋学史から当然の発展とは言い

ながら、蘭学、英学史への impetus はもとより、さらにドイツ学史（戦前この方面への業績を持たれる山岸光宣博士への言及がある）、フランス語学史、すんでロシア語学史研究への大きな刺激がある。

ここで本書の内容を眺めてみよう。

- 1—蘭学のあけぼの—辞書も写本で—2
- 2—蘭学時代の開花—學術書からオランダ語まで—6
- 3—一切腹に始まった英・仏語—最初の辞書刊行—12
- 4—最初の外国留学生—英語に打ち込む少年のアンビション—18
- 5—慶応年間の英学書—開成所と外人の活躍—26
- 6—明治維新直後の大辞典—上海で印刷の英・独・仏和辞書—34
- 7—文明開化と啓蒙書—入り往来、千字文—42
- 8—英・仏学につづく独逸学—衰えたオランダ語の学習—50
- 9—初期の教科書、独習書—官学派と慶應派の英文典—60
- 10—英文手紙と会話書—変則から正則英語へ—70
- 11—明治中期の辞書—洋装と和装の大辞書—84
- 12—特殊専門辞書の続出—各科学から音楽まで—94
- 13—訳読から直読へ—泡鳴と鑑三の会話書—110
- 14—明治後期の辞書—独・仏語の勃興—120
- 15—英和・和英辞書の整備—先進中国を凌駕—132
- 16—明治のリードルと註釈書—英学から英語学へ—150
- 17—語学・文学への発展—詩の翻訳から笑話まで—166
- 附一参考図版262点

なお巻末に「資料集」があり、179頁までの本書のbodyともいべき「図説洋学史」と181頁から335頁までのこの「資料案」との、必要に応じて cross-reference を行ないながらの見事な対を見せており、殊に本文の解説が、さすがジャーナリスト出身で、年鑑やグラフのこまかい編集に直接たずさわったことのある career がここにも光っていて、じつに簡明で正確でしかも魅力的である。いまここにその見本として第13章の岩野泡鳴と内村鑑三の英会話書のところをのぞいてみよう。

岩野泡鳴編の《公用会話》は……いかにも泡鳴らしい文章が見えるので、「風俗上の一注意」の前半を紹介しておく。

- (1) The button of your trousers is out of place.
- (2) It will be very rude if you go before a lady.

あなたのズボンのボタンがはずれて居ます。

婦人の居る所へ出る時恥ぢをかきます。

(説明)……日本では“おんな”といって、婦人を軽蔑する気味がありますが、英語を話す国人どもは、之を尊ぶ風なれば、どんな婦人をも lady (レイディ) というのです。

同じ警醒社から『東京独立雑誌』に内村鑑三が「世に憤るべき事多し、而して英語は学ばざるべからず」として連載した『英和時事会話』は15章にわたって、日本の政党、貴族、宗教談をのせている。伊藤博文を批評した一斑を示すとつぎのようである。

「左様でございます。私の考えますに、伊藤侯は平穏の海を走るに巧なる航海家です。彼は潮流と共に行く法を知って居ります。彼は理想なるものを持ちません。即ちピットやバークの政治的生涯を刺激した様な高き道徳的の理想を持ちません」

Well, I think Marquis Ito is a smooth sailor. He knows how to go with the current. An ideal he has not; i. e. a high moral ideal like that which actuated the political life of a Pitt or a Burke.

「然し、足下は彼を評するに、彼の生存する時代を以てせねばなりません」

「ソンナラ、私は明治時代は甚だツマラナイ時代だと云わなければなりません」

Then I must admit that the Meiji Era is a very stupid era.

——『図説日本の洋学』pp. 112—114

以て本書の全貌を察すべしである。誤植も一読したところほとんどの見当らない。強いて瑕瑾を探せというならば p. 14 の『諳厄利亞語林大成』（日本で出た始めての英和辞典と言わんより当時の豆单）の語数を約6300語とされたのは何の authority によられたものか（これは実際に計算すると5910語）、しかしこれなど本書全体の価値から見たら問題とするには当らないことであろう。むしろこのささやかな私の書評は、著者がその「序」の結句とされている次にかかる大槻文彦博士の言葉をもってしたい。

「今の世の中は、横文字ができるば立身出世するのであるから、後のために学問をするのであるけれども、昔の先生方の一つ間違えば家内眷属まで罰せられる。それを冒してしたのは、この日本国を開くのは西洋の学術でなくてはならぬという見当をつけたので、ここがエライところだ、生命を犠牲に供しても、やるという精神がなくては苦学は遂げられぬ。……今のは、古人が苦心したその苦心に劣らぬだけのことを別にやらねばならぬ。何か更に新発明をするとかいわゆる國利民福の一端を遂げて、國のため、人のためにせねばならぬ」——明治33年、大槻文彦講演『洋学先哲の苦学』

(埼玉大学教授)

## 『こんにちは 鳥飼玖美子です』

ジャパンタイムズ発行、184 pp.、¥480

英語を必要とする職業はこの世に5万もあるが、英語の同時通訳ほど高度の英語の力を要求される仕事はなかろう。単に英語の運用能力のみならず英語を国語とする国々の政治、経済、社会的文化的背景、風俗習慣についても精通していなくてはならない。それだけではない。英語を第2国語として話す人々のそれらにも、そしてもっと広く解釈するならば、英語が Lingua Franca として広く世界に使われている現場では、全世界の国々の社会的文化的現況に通じていなくてはならない。このような広い知識と高い英語力を要求される英語の同時通訳の第一線で活躍している鳥飼玖美子さんが、自分の歩んだ道を現代の若者の口語体で、何の気取りもなく紹介してある。

読んでいてとにかく楽しい。戦中、戦前派の読者には、いつのまにかフォークダンスのサークルの中に引き込まれて、はちきれるような若さの青年たちと腕を組んで夢中で踊っているような快さを覚えさせる。それは単に彼女の歯切れよい文章だけから受ける印象ではない。現代の若者の持つ行動力の上に彼女の負けん気と才能が生み出すエピソードの数々が読者を引きつけるからである。

英語教育に関心のある読者には、彼女の幼少の頃から彼女を英語に志向させた小さい色々な動機が興味をそそるだろう。アメリカやイギリスに永年住んでいたり又はそこで教育を受けて英語力を身につけた人達より、1年間のAFS留学生としてのアメリカの生活を除いては、日本で育ち、小学校から大学まで日本で教育を受けた鳥飼さんのような日本人がその身につけた英語の学習の道すじの中に案外現在の英語教育の盲点を指摘するものが隠されているような気がする。

英語教育に関心がなくとも、英語に関心のある読者には、観光ガイド、逐次通訳、同時通訳など同じ「ペラベラ」の英語が要求される仕事でもその「ペラベラ」の質の大きな相違を認識させてくれるだろう。

これから英語を身につけようと常に心を海の彼方に向けている若い人達には、自分の2本の足の立っている日本にもう一度目を向けさせてくれるだろう。テレビの画面で見る鳥飼さんが見る人達に親近感を持たせてくれるのも彼女が常に日本人である事を誇りにし、日本人であろうと努力している彼女の精神がにじみ出ているからではなかろうか。又同時に話すべき内容を持たずに外国語

を学ぼうとする努力の無駄も言わずもがなに教えてくれているような気がする。

「この頃の若い者は…」といつも世代のギャップを嘆いている者には、ここに若い世代のもう一つの側面を彼女に見ることができるだろう。この本の読後の清々しい気持が若い世代に対する信頼感につながるかも知れない。世代を越えて楽しめる本である。 (S.Y.)

## 『和英翻訳ハンドブック』

村田聖明編

ジャパンタイムズ発行、222 pp.、¥980

「これはその表題の示すとおり、在来の和英辞典にとってかわるためのものでは決してなく、和英辞典を補い、翻訳者の便に供しようとするものである」と、はしがきに書いてあるが、英文実務家にとって非常に便利な本である。

内容は第1部と第2部にわかれており、第1部では一般和英辞典に採録されていない用語または採録されても訳語が適当でない用語を扱っているが、この部分は辞書として役立つことはもとより、読みものとしても非常に面白く読むことができる。オーナードライバー、ガソリンスタンド、スタンドプレーが和製英語であることを教えてくれる。また、文法事項で「定冠詞の用法」「複数形の用法」「無冠詞形の用法」などは実務家にとって必要不可欠の知識であると思う。なによりも楽しく読めるのは、「火炎ビン」「月着陸と英文法」「前向き」「ハイジャック」等々について、ところどころに挿入してある隨筆である。「面白くてためになる」とはまさにこのことをいうのであろう。この種の隨筆集が刊行されることを期待する。

第2部では、国会・政府・官庁、公社・公団・法人、経済商工団体、会社、大学、労働組合などの固有名詞が採録されている。たとえば、大学のところでは、日本大学、日本女子大学、日本医科大学などはそれぞれ Nihon University, Japan Women's University, Nippon Medical School となることがわかる。

英文実務家だけでなく、英語に関係ある方々すべてに一読をおすすめしたい本である。

(Q, Q)



# 展望通信

第51回 10月16日（土） 2:30—4:30

“Cultural Comparison”

E L E C 英語研修所講師 Miss. Gretchen Weed

## ◆E L E C 海外留学英語試験

E L E C では、海外留学希望者、T O E F L 受験者、海外出張者等を対象に、英語能力検定・診断・指導を行なっている。希望者は E L E C 宛に願書を請求されたい。

## ◆下中科学研究助成金

全国の小・中・高校の教師を対象にした研究助成金で、今年度は 50 件に対して 250 万円が用意されている。締切は 11 月末日になっているので、希望者は 20 円切手同封のうえ下記宛に「申請書」を請求されたい。

〒 102 東京都千代田区四番町 4 の 1

平凡社内 下中記念財団

## ◆E L E C 理事 岩崎民平氏 6 月 29 日心筋梗塞のため逝去。

## 編集後記

◇E L E C 創立当時から E L E C 理事としてずいぶんお世話いただいた岩崎民平先生が 6 月 29 日永眠された。先生と本誌との関係は第 4 号の巻頭言においてだけになってしまったのはいかにも残念であるが、先生は「統一採択に関連して」と題して、教科書の検定制度の改善の必要性を指摘すると同時に、採択についても「選択の自由は担当教官または学校に一任されてもよいのではないか」と述べておられる。

◇今年の 8 月に行なわれた E L E C 夏期研修会に参加された中学校の先生方約 100 名にアンケートをしたところ 85% の人が来年度使用する教科書を「知らない」と答えている。現在の採択制度を 99% の人が「良くない」と答えている。

◇教科書の検定制度と採択制度を国際的立場からじっくり再検討する必要があるのではないだろうか。（Q. Q）

## ◆E L E C 創立 15 周年記念

E L E C が創立されてから今年が 15 周年にあたるので、その記念行事としてつぎのことが計画されている。

### 1. 記念式典およびリセプション

11 月 5 日（金）、於 E L E C 会館

### 2. 第 7 回 E L E C 英語教育研究大会

11 月 6 日（土）、於 E L E C 会館

講演 Dr. Douglas W. Overton

斎藤 勇博士

実演授業 浅野高等学校 石川喜教氏

### 3. 英語弁論大会

11 月下旬、於 E L E C 会館

## ◆E L E C 月例研究会

第 50 回 9 月 18 日（土） 2:30—4:30

「学習英文法の諸問題」

東京学芸大学教授 江川泰一郎氏

英語展望 (ELEC Bulletin) 第 35 号  
定価 250 円 (送料 55 円)

昭和 46 年 10 月 1 日 発行

© 編集人 中島文雄

発行人 竹内俊一

印刷所 大日本印刷株式会社

東京都新宿区市谷加賀町 1 の 12

電話 (269) 1111 (大代表)

発行所 E L E C (財団法人英語教育協議会)

東京都千代田区神田神保町 3 の 8

電話 (265) 8911 ~ 8916

振替・東京 11798

# ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC